

329

326



始



21383

329-326



訂正
増補

枕草子春曙抄

北村季吟法印著
鈴木弘恭訂正増補
佐藤仁之助改訂増補

改訂増補

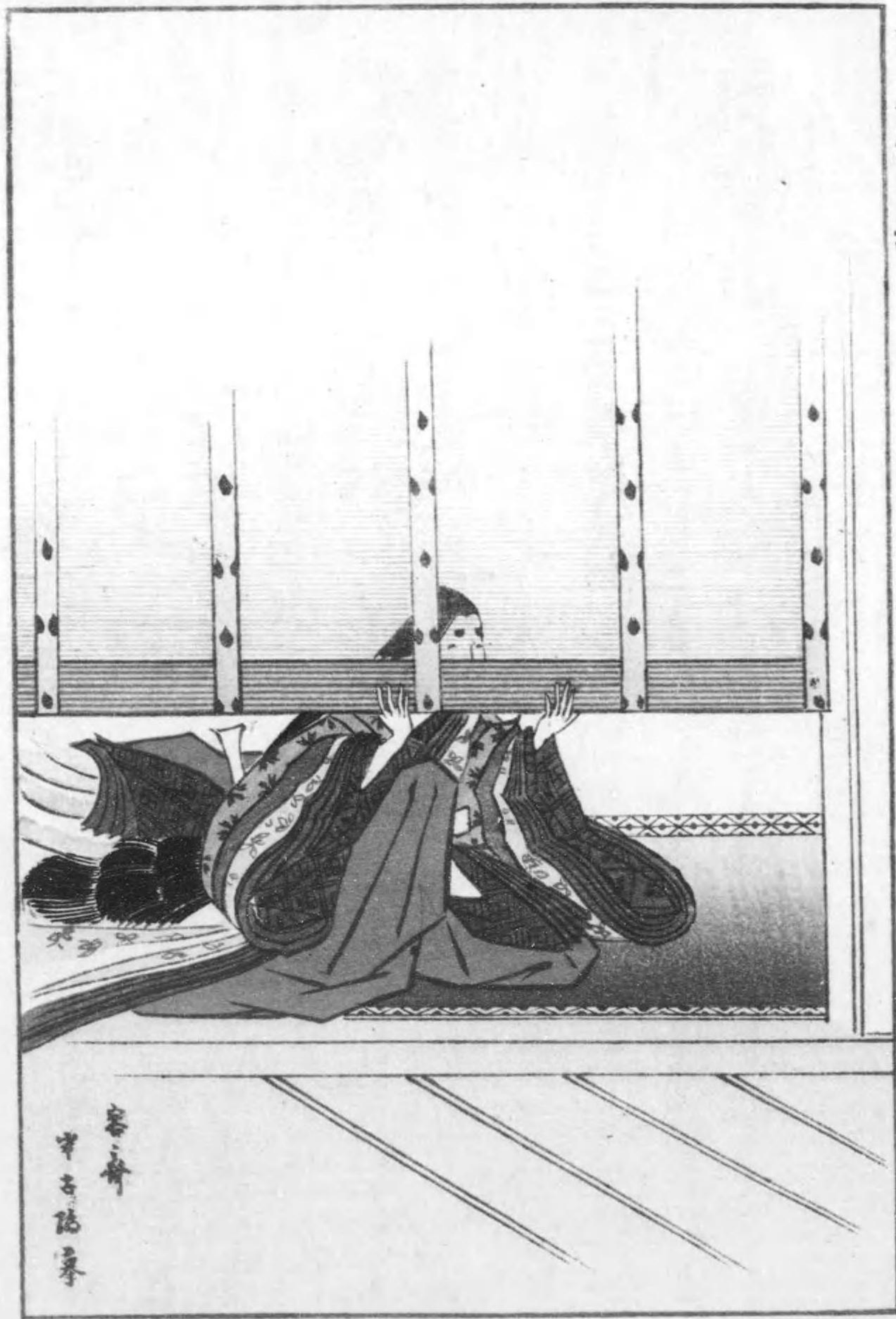
大正
12.4.16
内交

附。装束抄。かき紙のいらあひ

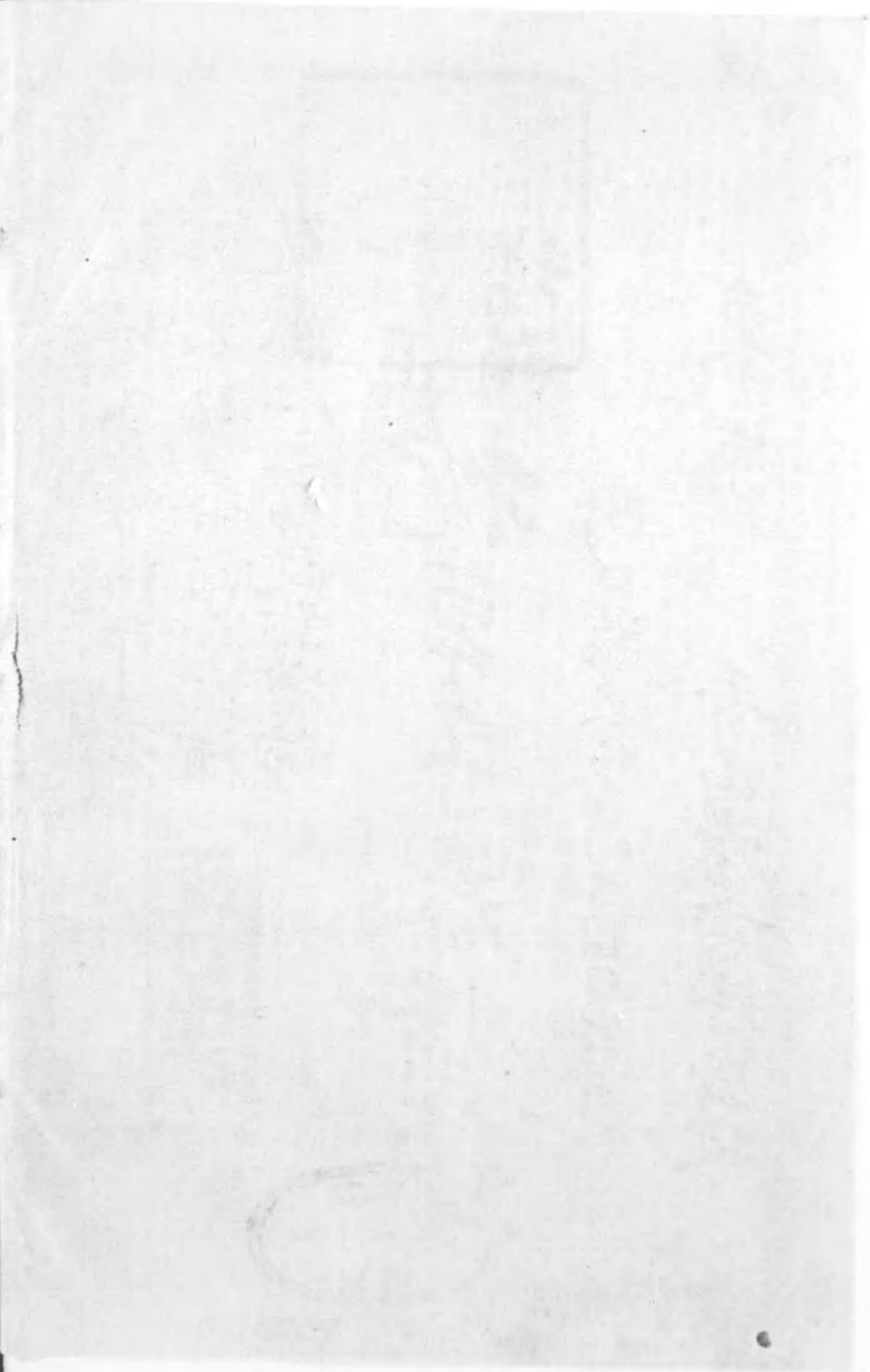
東京

青山堂書房藏版

洋少無言持筆置 菊池容齋



容齋
甲子臨摹



訂正枕草子春曙抄
増補

緒言

この草子のいとめでたくてはやくより世にもてはやされ
しことは。今さらにいふべくもあらず。その註釋どもさへに
くさくあれども。北村翁の春曙抄をもてよろしとすべし。
されどその抄中をば校考のいまだしきところ。假字の誤り
たるものどもあるは。いとあかぬ心ちせられて。こたび万
歳抄。活字本。清水瀆臣校合本。黒川春村校合本。天文五年古鈔
本。其の他一二の異本をもて訂正を加へ。をらびに假字の誤
ともかきあらため。さて舊註に漏れたる所。或はあやまれる
ふしのあるは。加藤盤齋。清水瀆臣の考。并に契沖阿闍梨。石原

正明。橋千蔭。黒川春村等。先達の説をもてこれを増補す。夫のみならず。わが師黒川眞頼翁の考。たよび愚考をもより。よりにわいつけたり。よて訂正増補の文字を冠らせられたれど。大かたはもとのまゝと失はざらんことを旨として。舊名をさへに存し。たきて。訂正増補枕草子春曙抄とはれほせつ。かばかり意を用ゐつれども。今やうの活版にものすることゝなれ。ば。例の口をしき誤植もありぬべし。ろは見む人をほよく注意し給へれかし。

明治二十六年二月

鈴木弘恭

訂正増補 枕草子春曙抄の改訂増補に際して

故鈴木弘恭ぬしは予が忘年の友なりしが、往にし明治二十六年初めて訂正増補枕草子春曙抄を物せられたりき。數ふれば既に三十餘年の星霜を経て版を重ねる此に三十七版に及べり。此の長日月の間枕草子の注釋書の種々梓に上りたるもの殆計るに勝ふべからざるに、かくばかり版數を重ねたるは是主として北村季吟法印の春曙抄が頗る要領を得て、廣く天下に流布したるにも因るべけれど、又一には鈴木ぬしの訂正増補の加はりたるが、讀者に便利多かれはなるべし。されど、初版當時と今日とは社會事物の變遷に従ひて學術界も亦莫大の進歩發達をなしたるを以て、到底往年の訂正増補のまゝにては學界の需要に應じ難くなりしならむ。されば更に本文の異同を考へ注釋を改め且は講讀に必要な殿舎の構造土地の考證衣冠調度飲食花卉蟲禽の研究、乃至參考圖畫標本等の類に至るまで一層詳細を盡さざるべからざるに至れり。是を以て予は嚮に數十種の圖畫を卷頭に増補して聊か參考の料に供したりとしかば、未だ改訂増補の暇

あらざりしは甚遺憾せり。然るを頃日青山堂主人訪れ来て曰はく年來江湖愛讀諸子より、屢々改訂増補の忠告を寄せられたる好誼黙止難ければ改訂増補の勞を煩はしたしこの懇請に依り、予は不敏をも顧みず年頃の研究と教授上の實驗とに基きて改訂増補を試みたり。然れども今回は原版の體裁を損ぜざる程度に於て改訂増補を加へたれば固より完全を期し難し。但し原版よりは幾分の便利を加へたることあるべしと信ずるなり。若し他日全部改版の好期を得て舊觀を一新することを得ば予が宿望完く成れりといふべし。鈴木ぬしの御靈もし心あらば今回の舉を見て、あな姑息のわざやま九泉の下に微笑せられなむかし。

大正十二年二月

故鈴木ぬしが忘年の友

佐藤仁之助識

枕草子春曙抄の改訂増補の忠告を寄せられたる好誼黙止難ければ改訂増補の勞を煩はしたしこの懇請に依り、予は不敏をも顧みず年頃の研究と教授上の實驗とに基きて改訂増補を試みたり。然れども今回は原版の體裁を損ぜざる程度に於て改訂増補を加へたれば固より完全を期し難し。但し原版よりは幾分の便利を加へたることあるべしと信ずるなり。若し他日全部改版の好期を得て舊觀を一新することを得ば予が宿望完く成れりといふべし。鈴木ぬしの御靈もし心あらば今回の舉を見て、あな姑息のわざやま九泉の下に微笑せられなむかし。

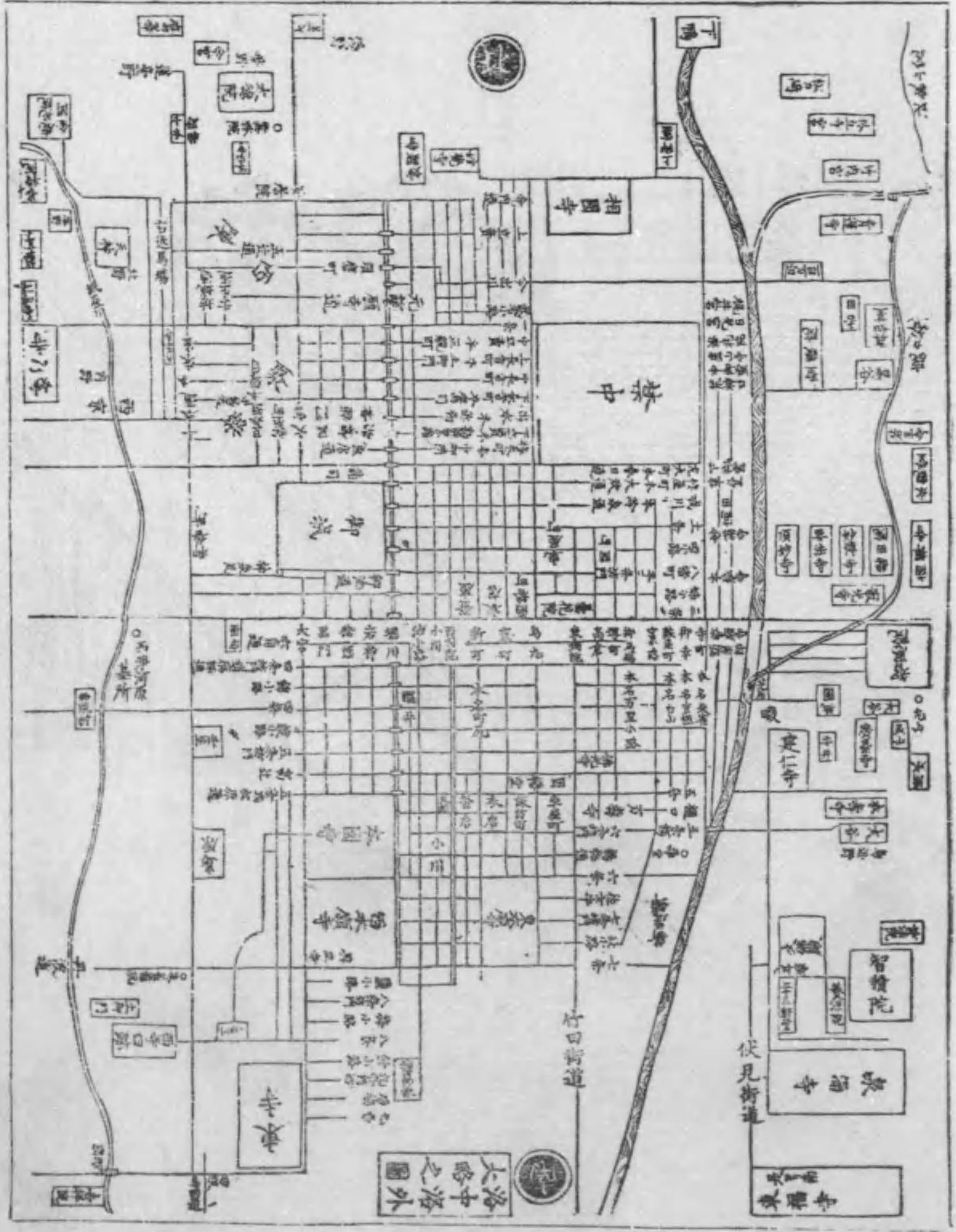
直衣 冬



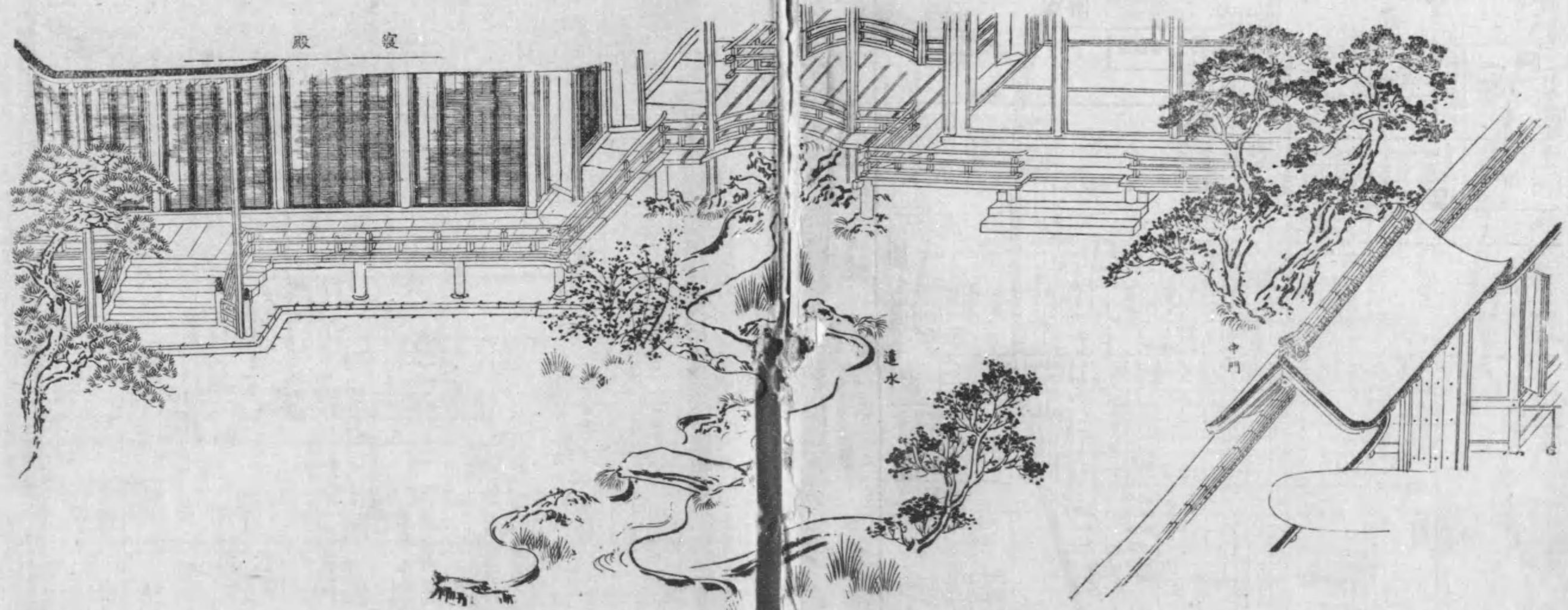
直衣 夏



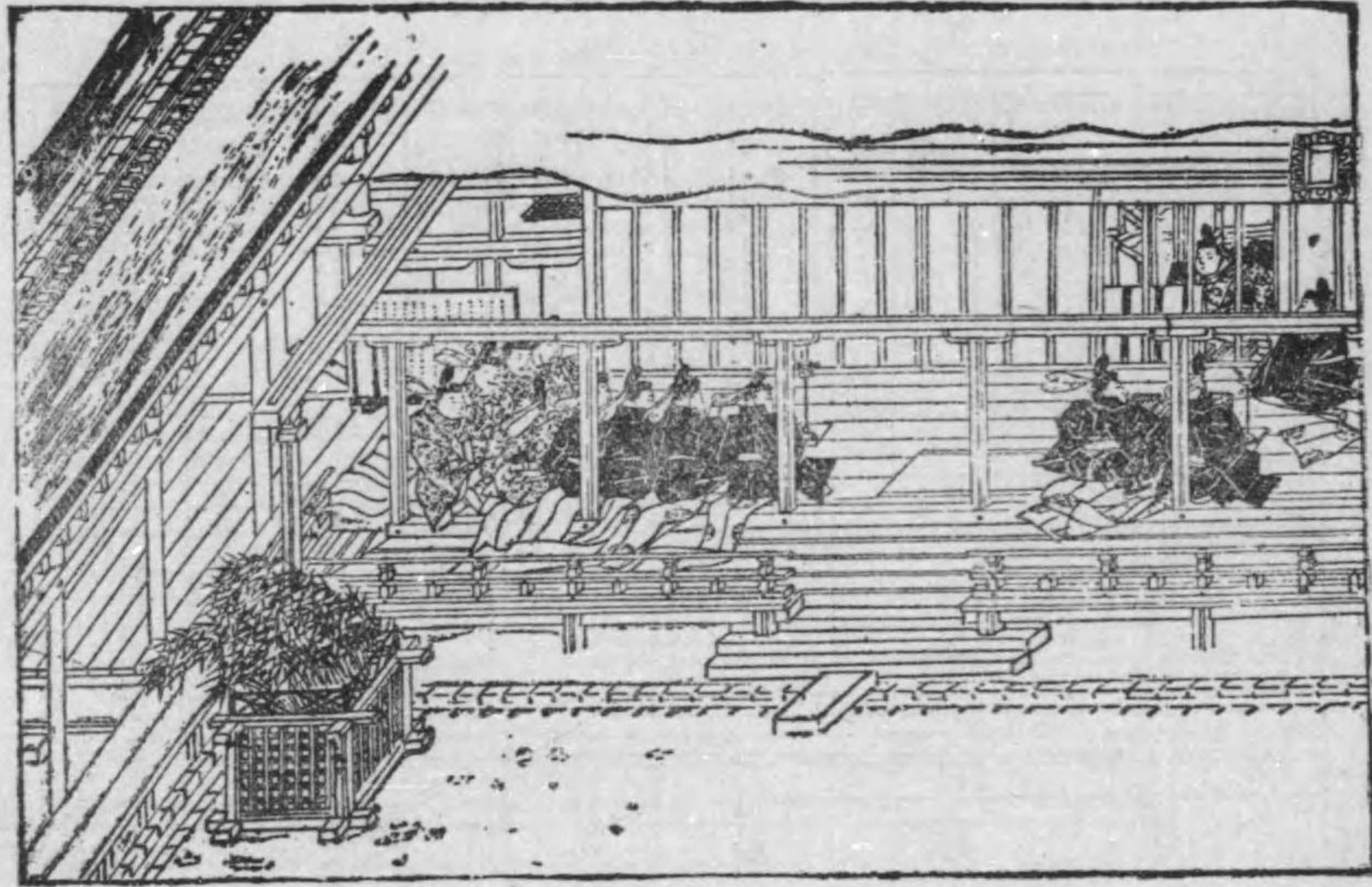
近世洛中洛外大略圖



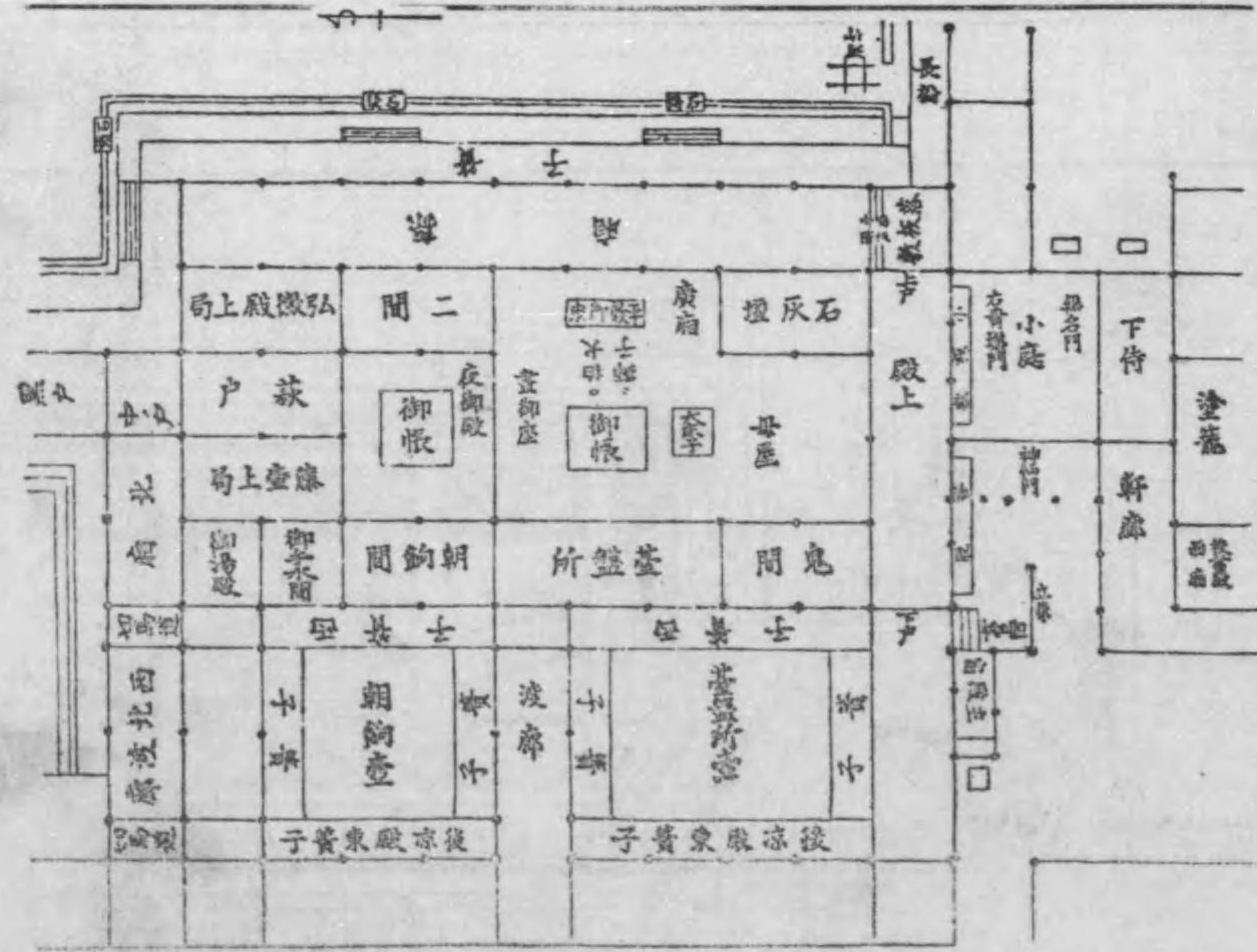
寢殿及對屋之圖



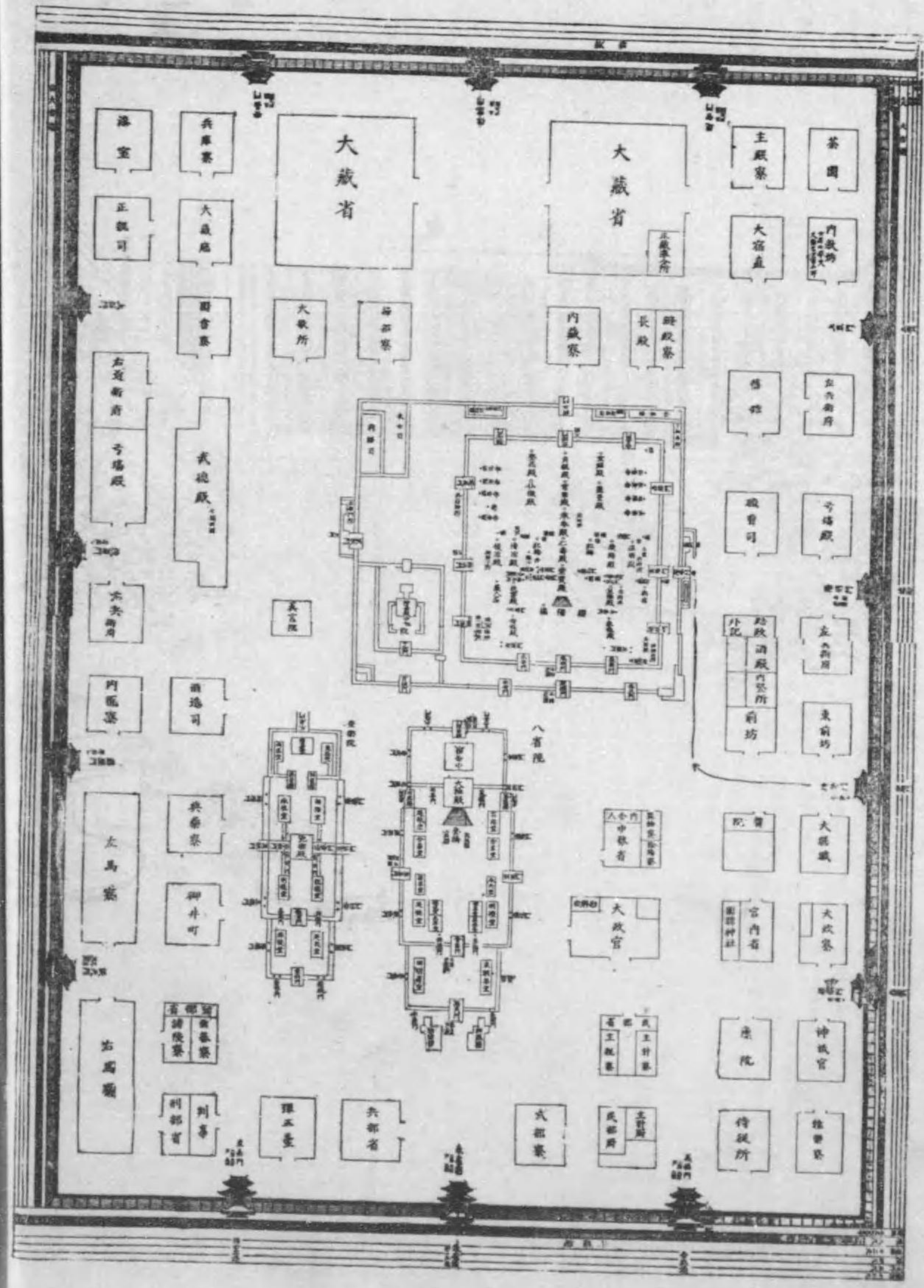
清涼殿正面圖



平面圖

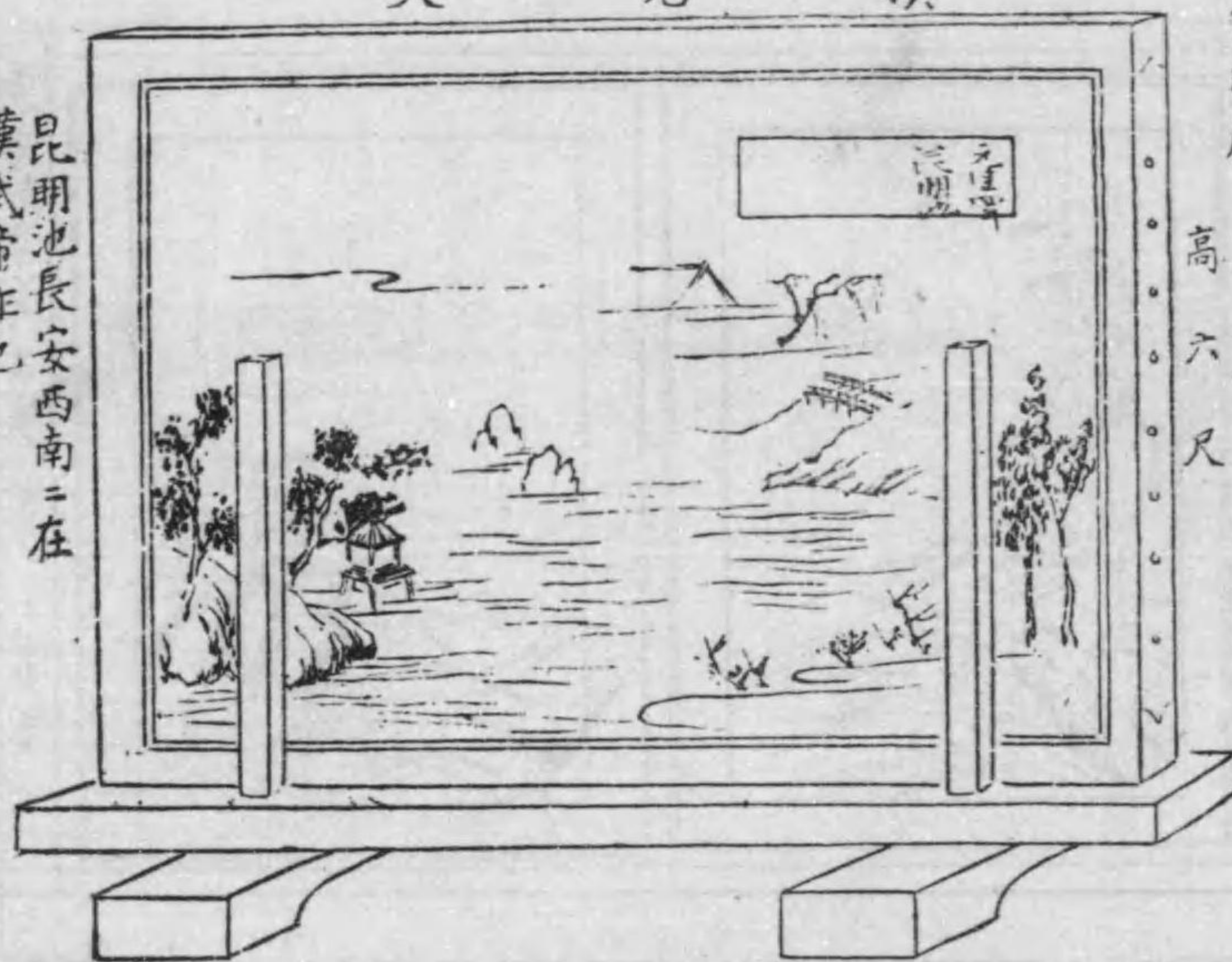


大內裏圖



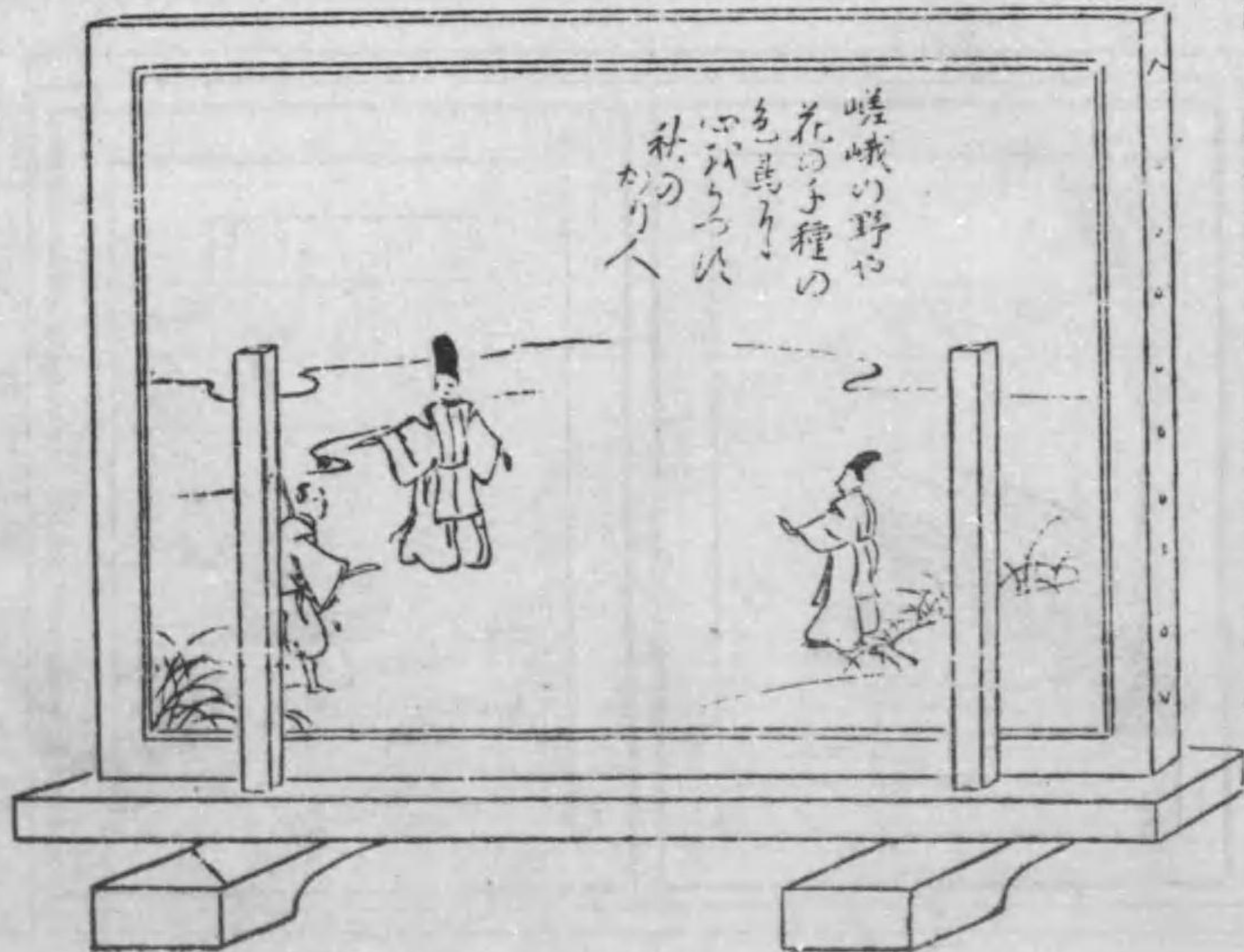
横九尺

昆明池長安西南二在
漢武帝作也



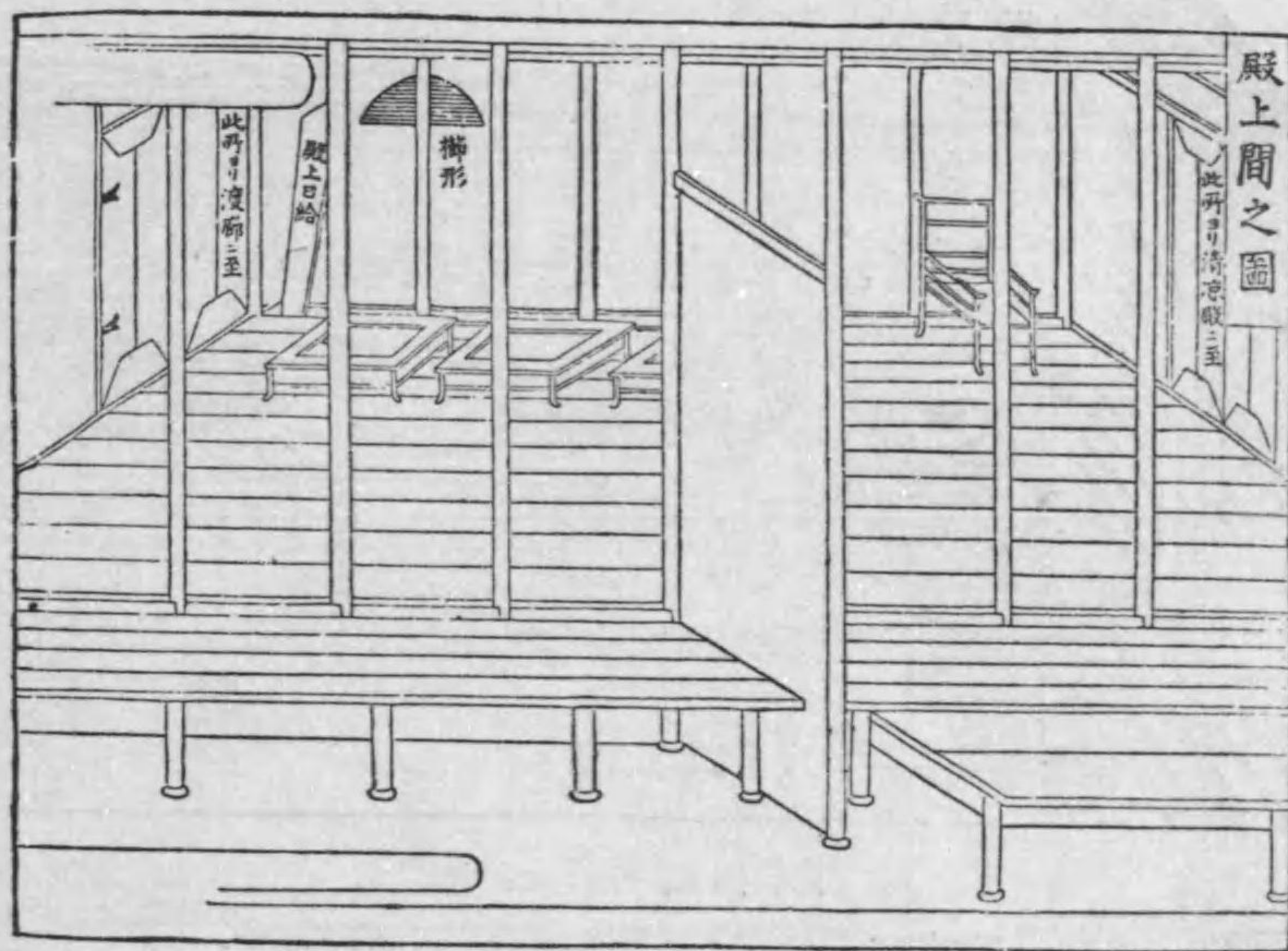
清涼殿 昆明池御障子圖表 極彩色
高六尺

同 昆明池之裏 鷹匠之圖 極彩色

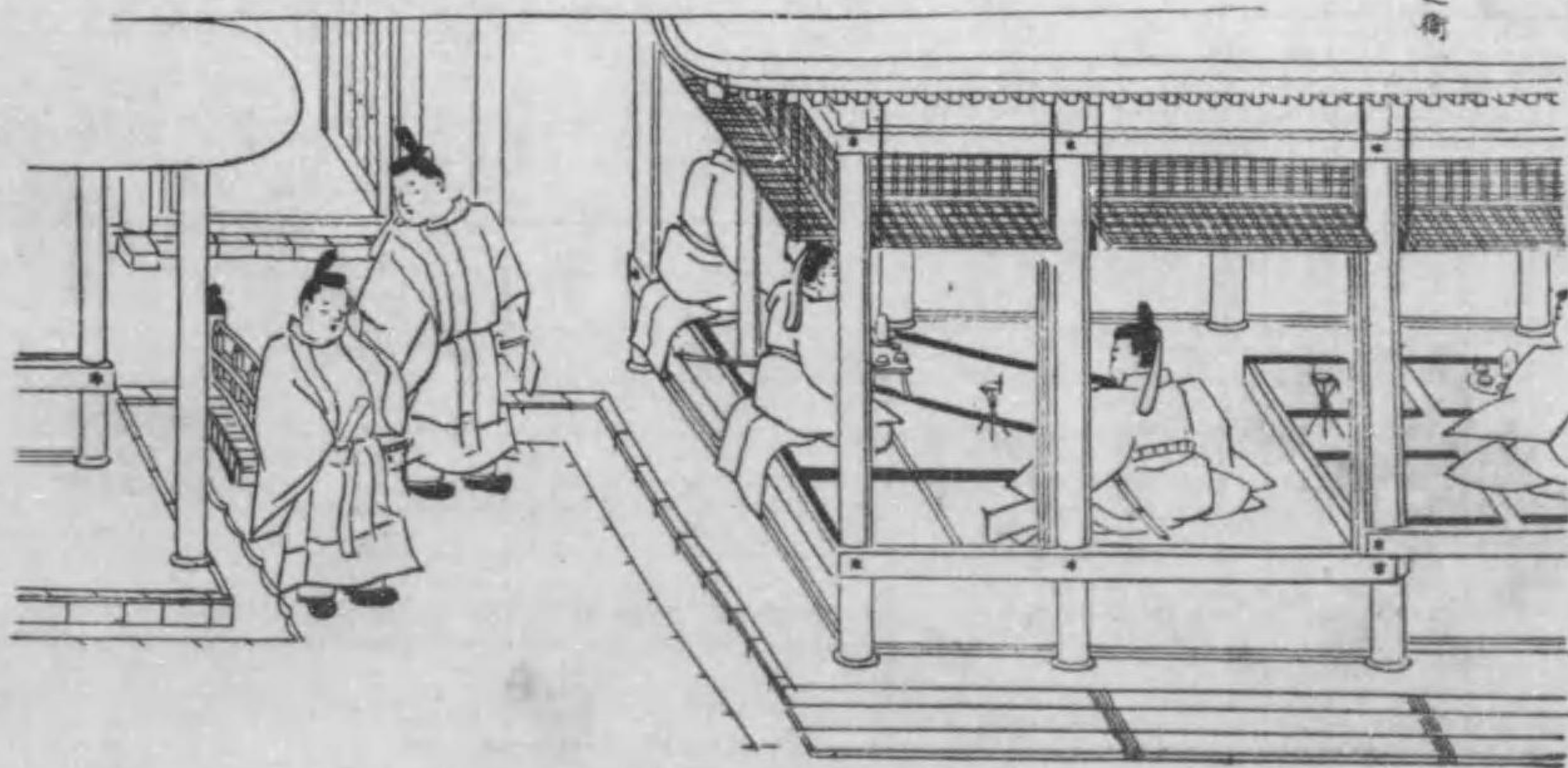


嵯峨の野の
花の多種の
色鳥の
心はよみ
秋の
かり人

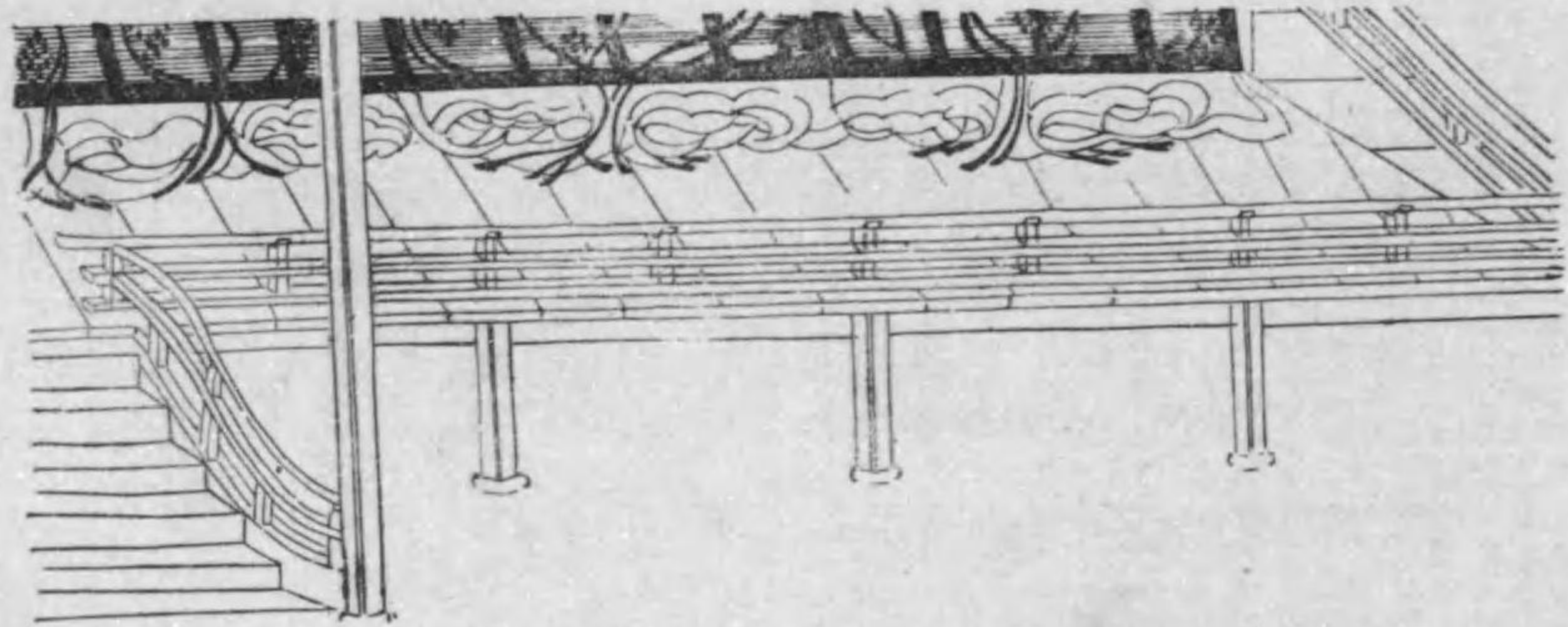
殿上間之圖



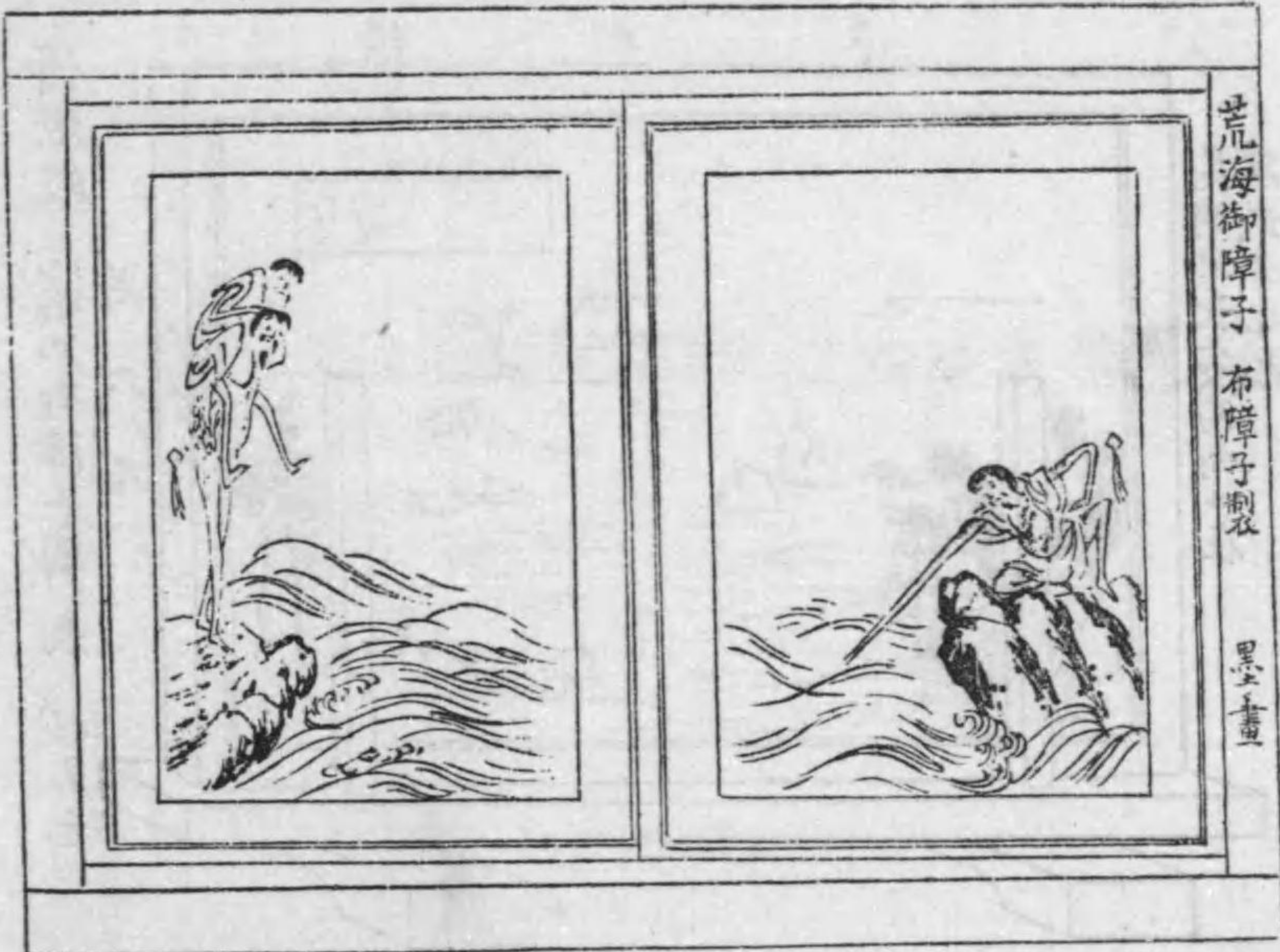
障座
右邊街



女房出衣

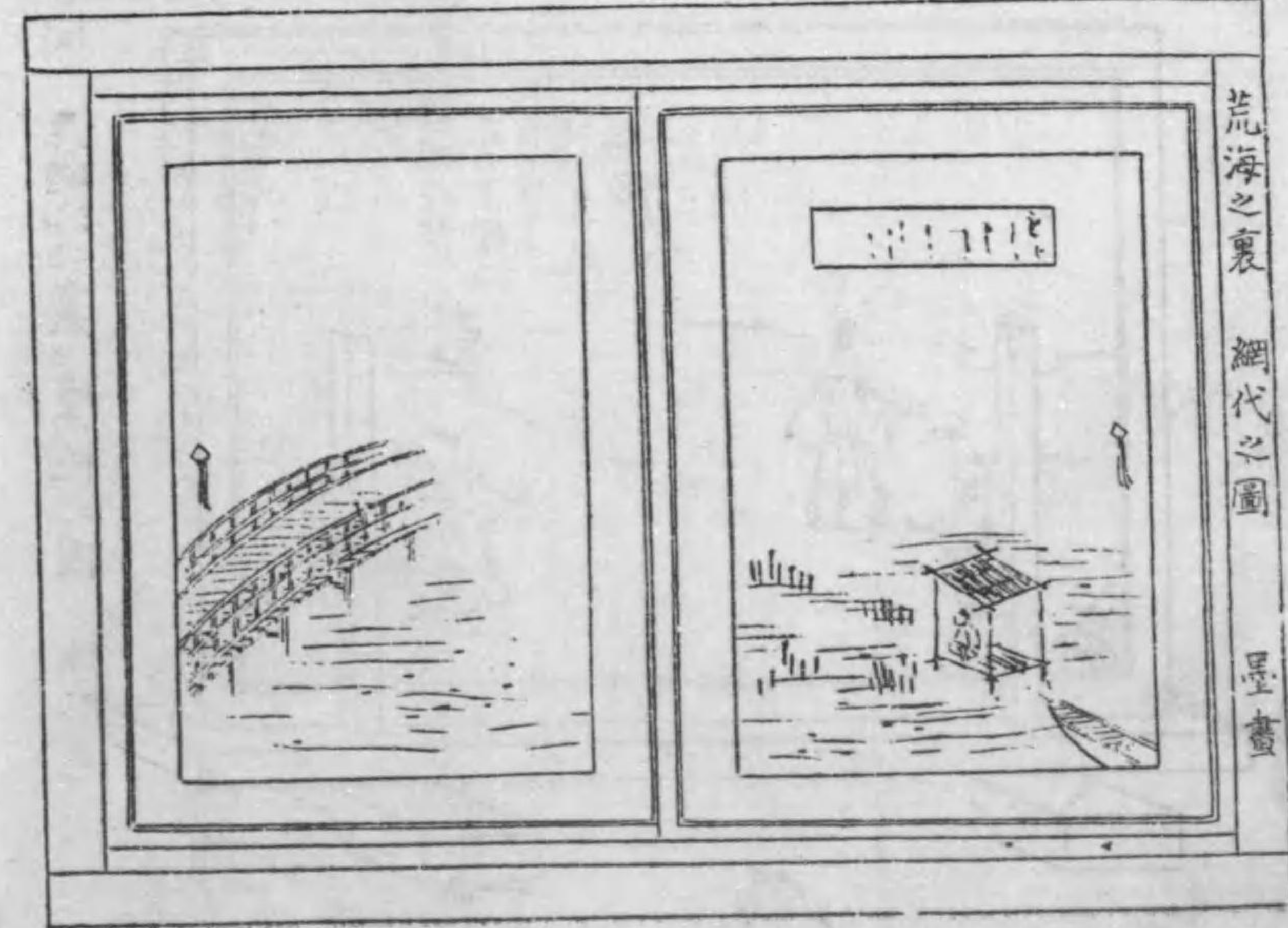


几帳裏



荒海御障子 布障子製

墨畫



荒海之裏 網代之圖

墨畫

御隨身



直衣立烏帽子



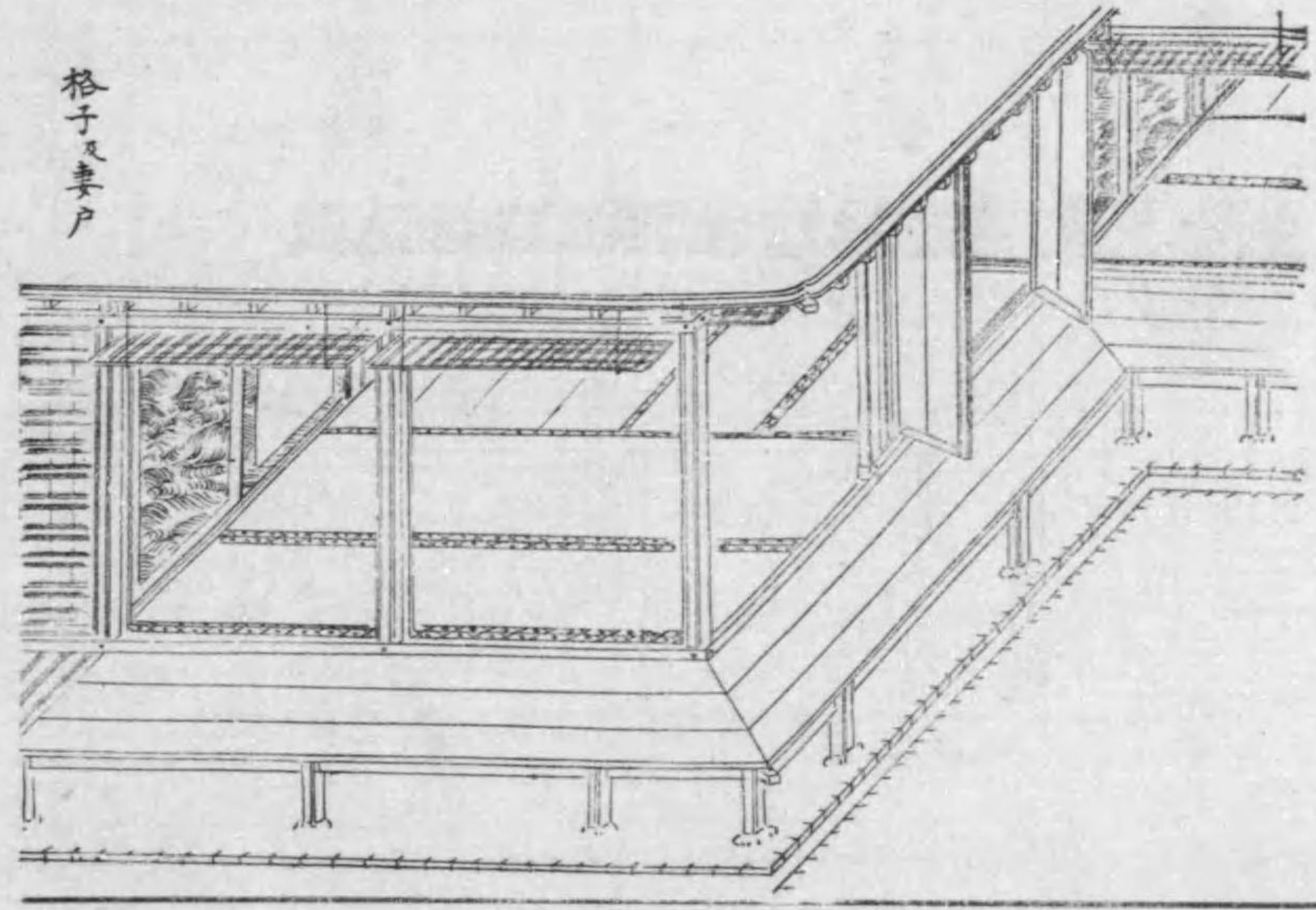
隨身後



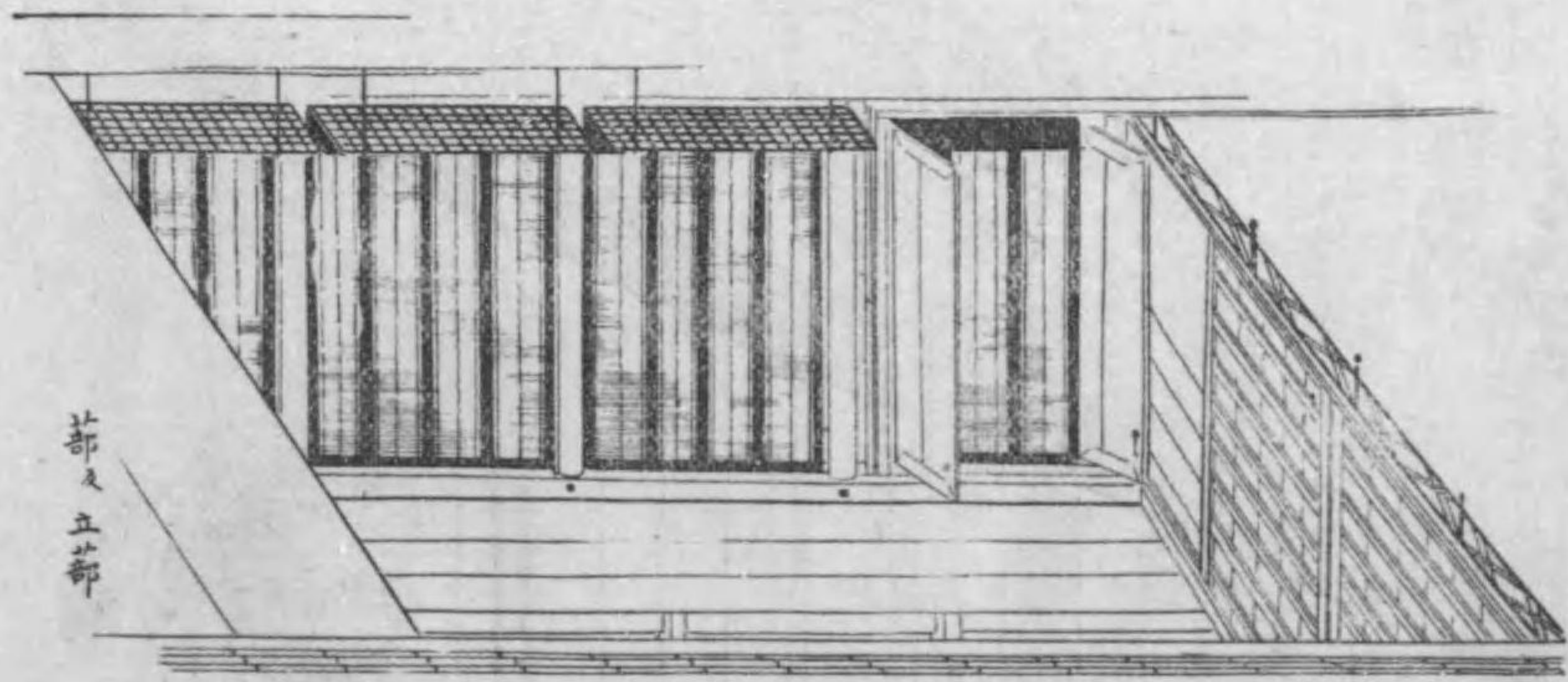
隨身前

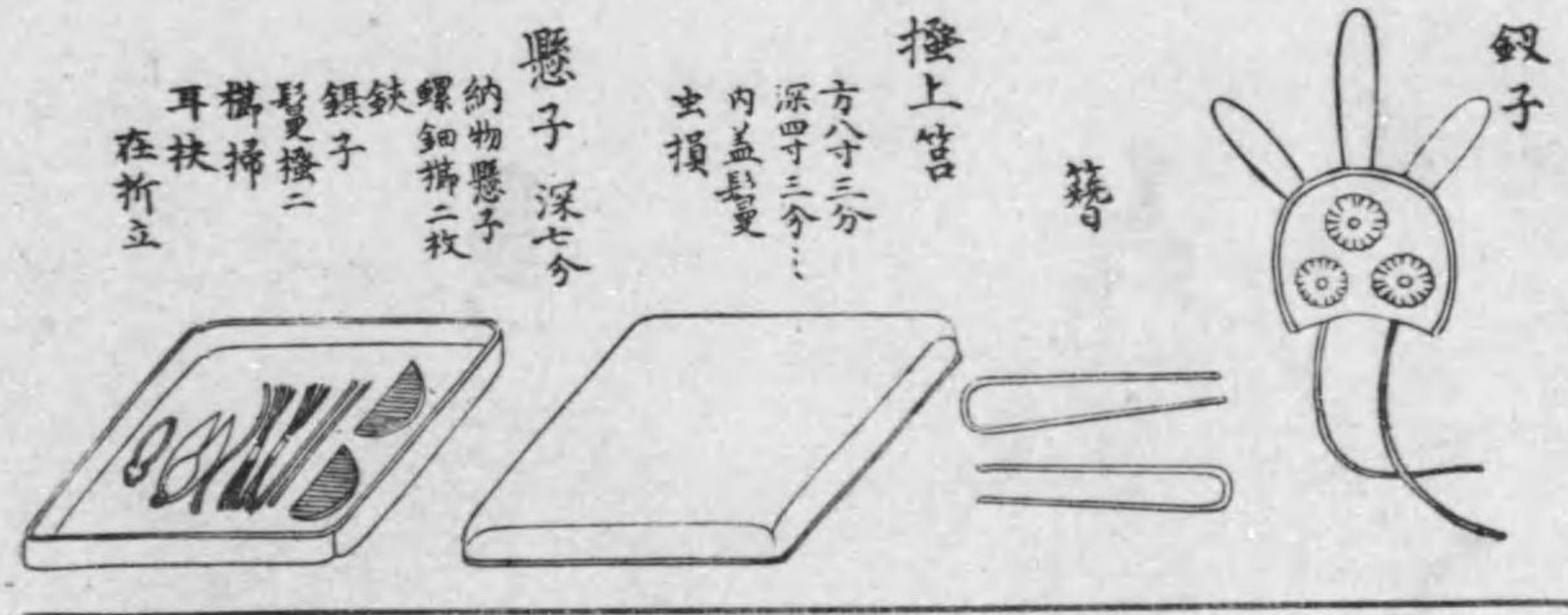
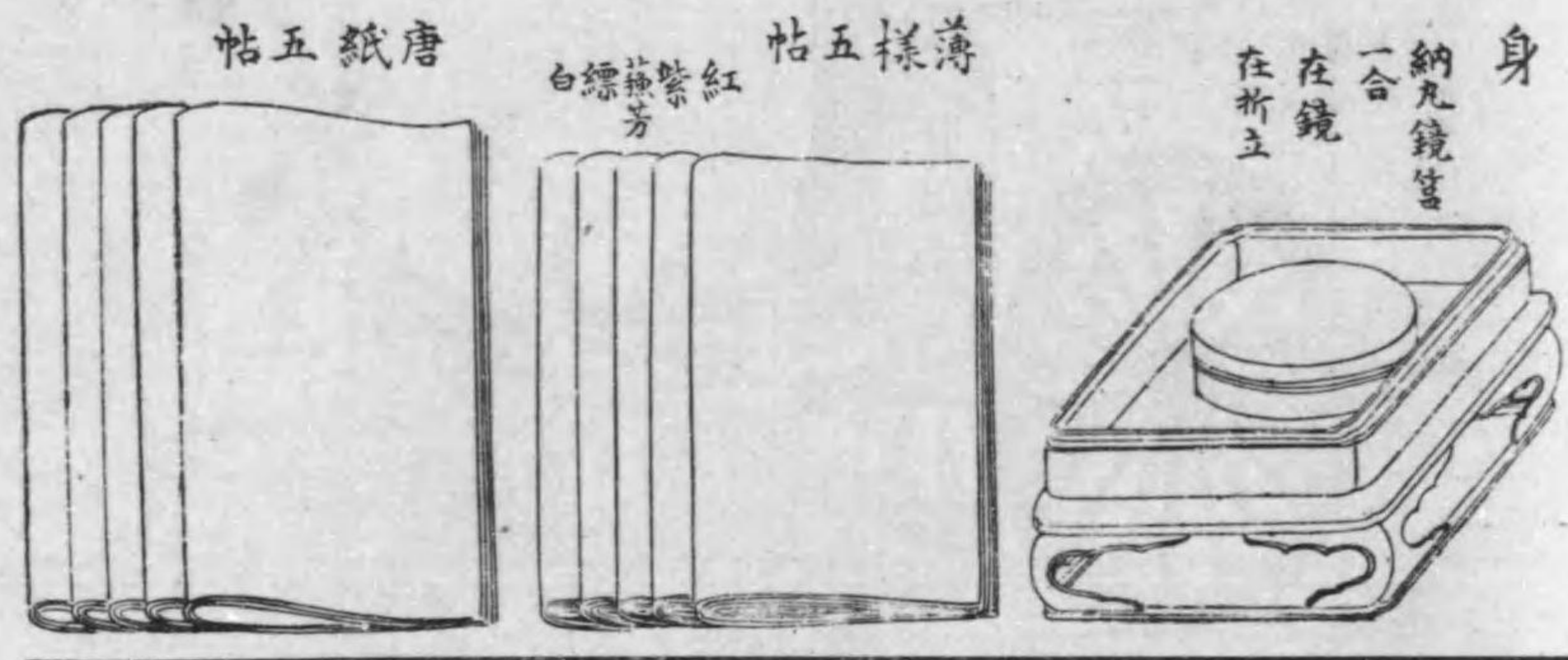


格子及妻戸

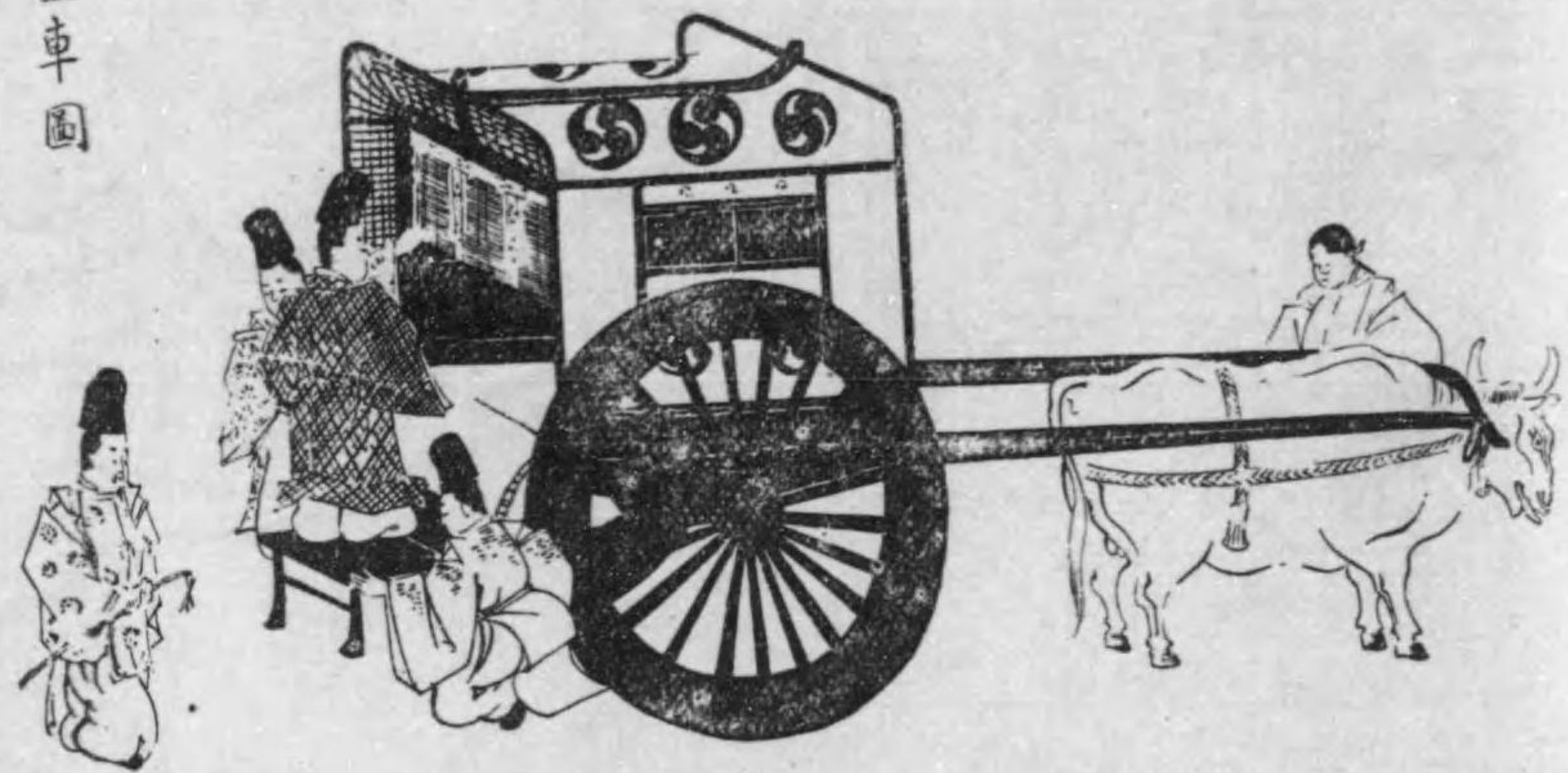


土部及立土部

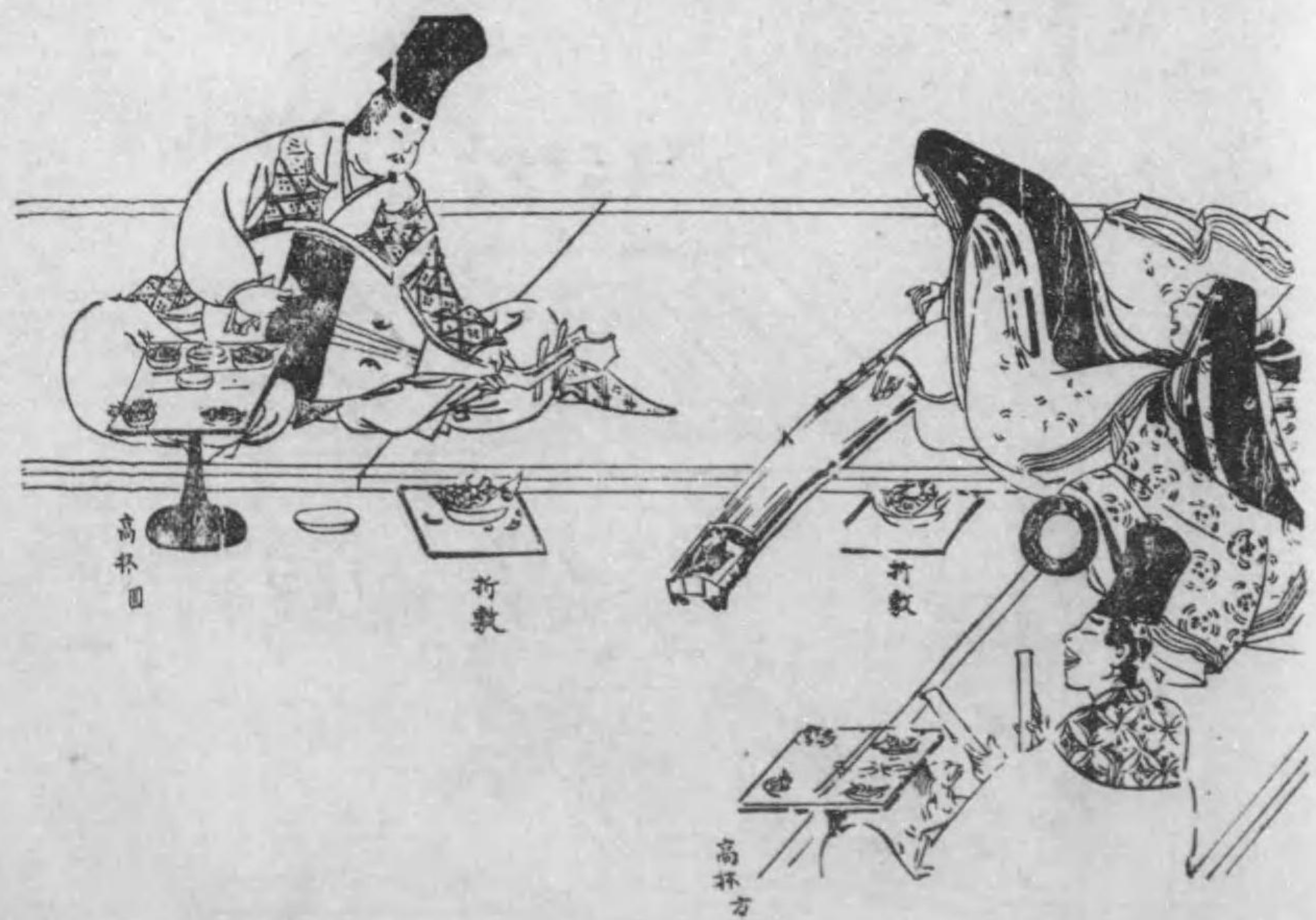
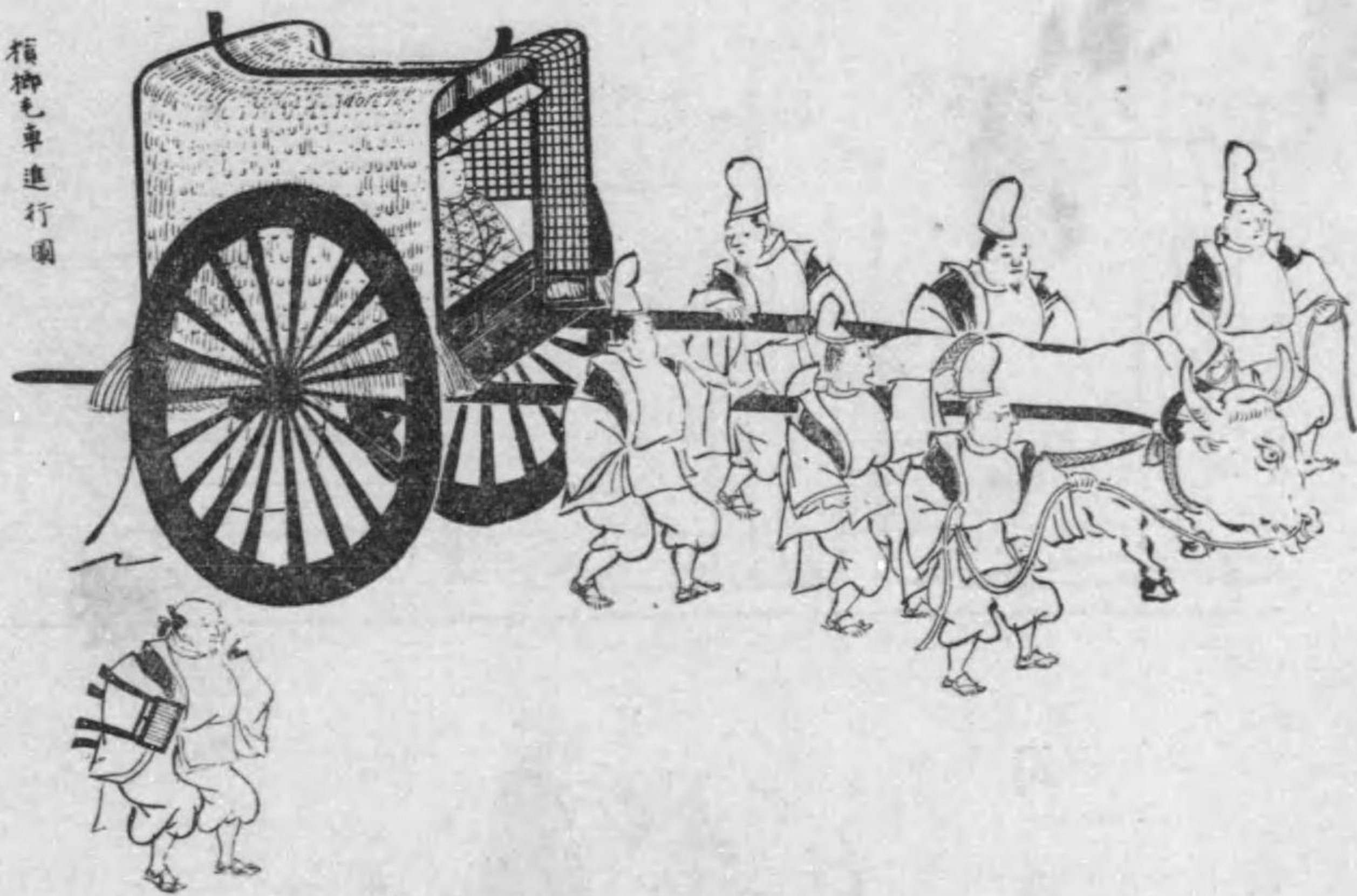




網代車上車圖



檜柳毛車進行圖



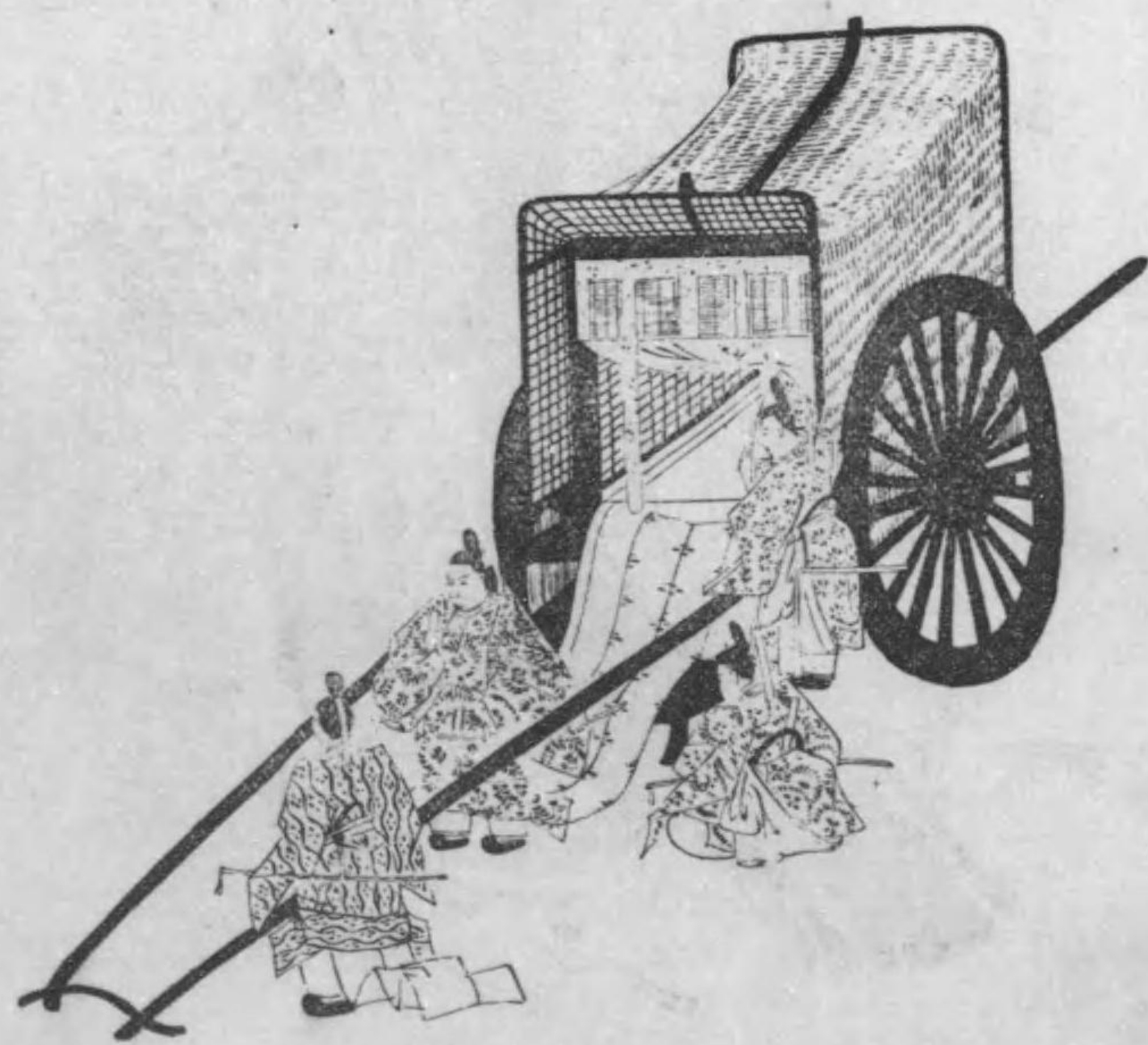
高杯目

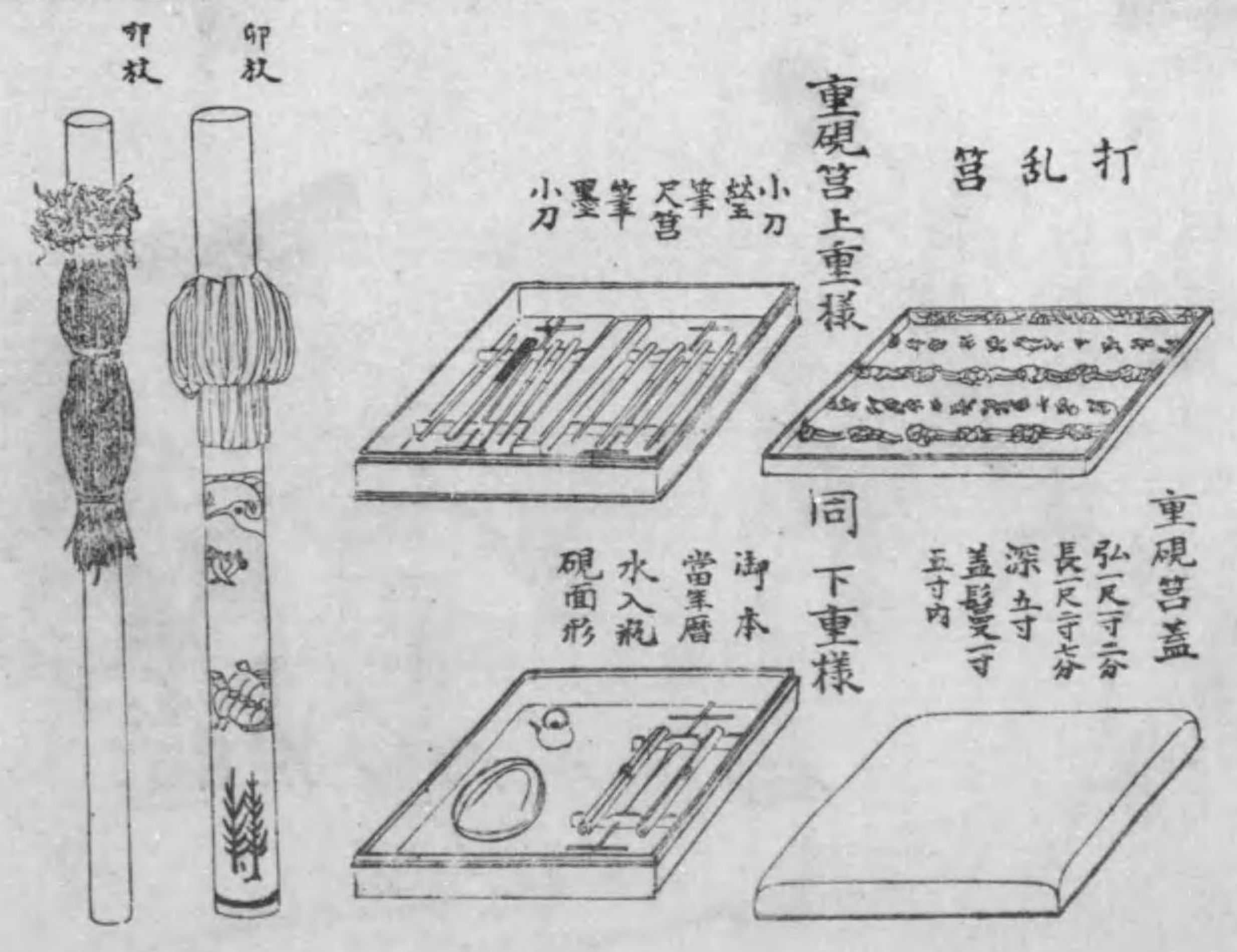
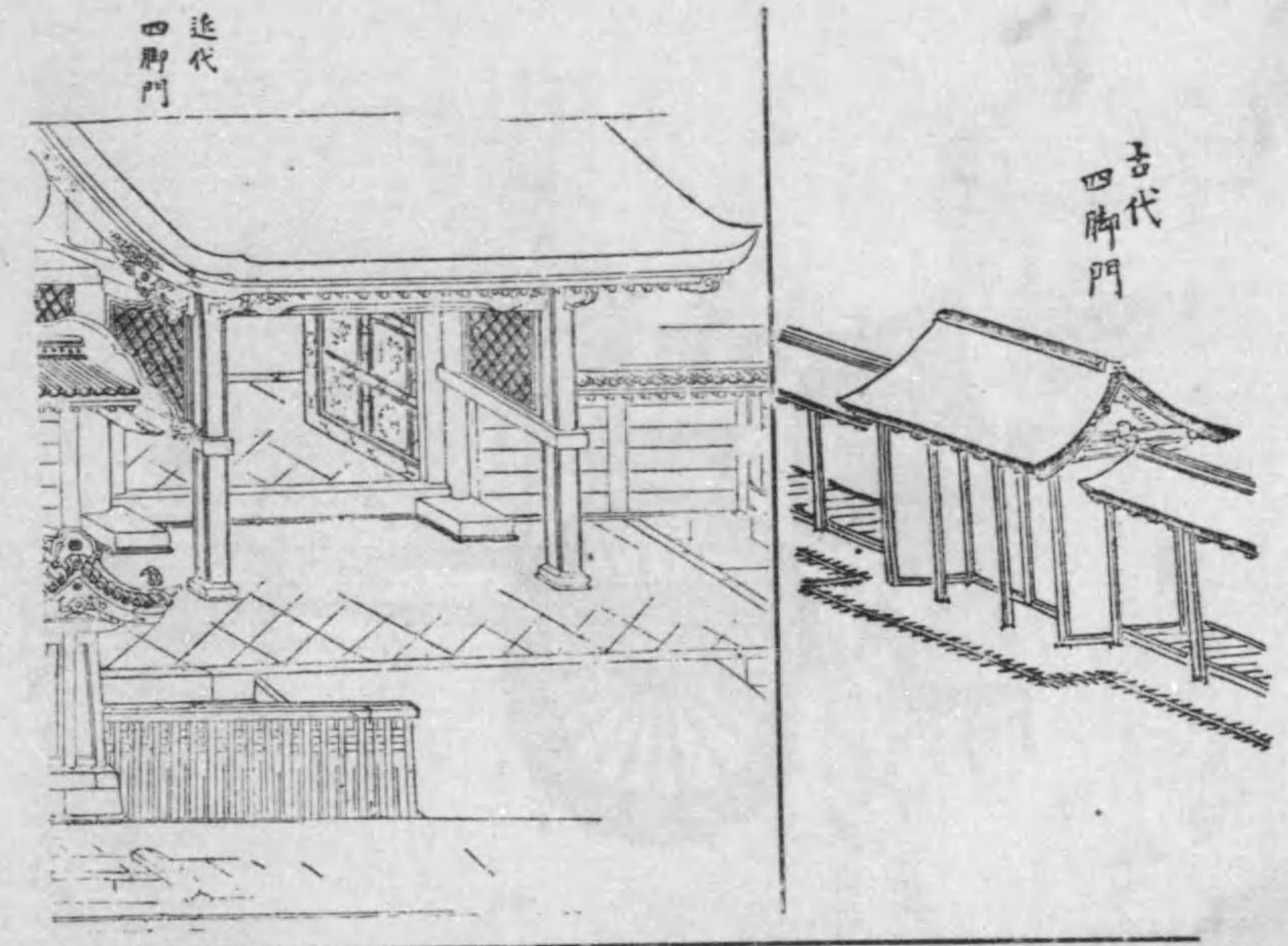
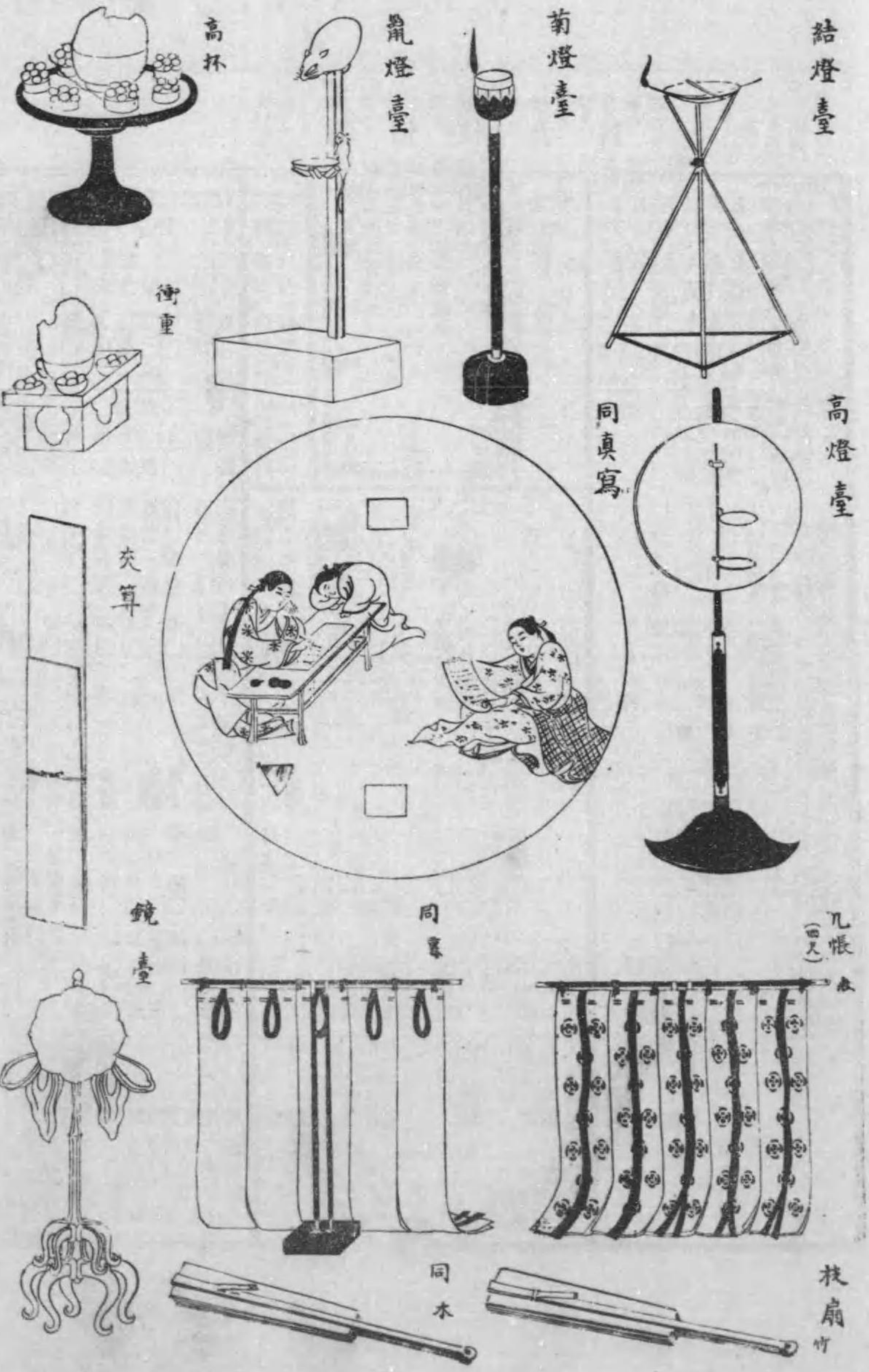
折敷

折敷

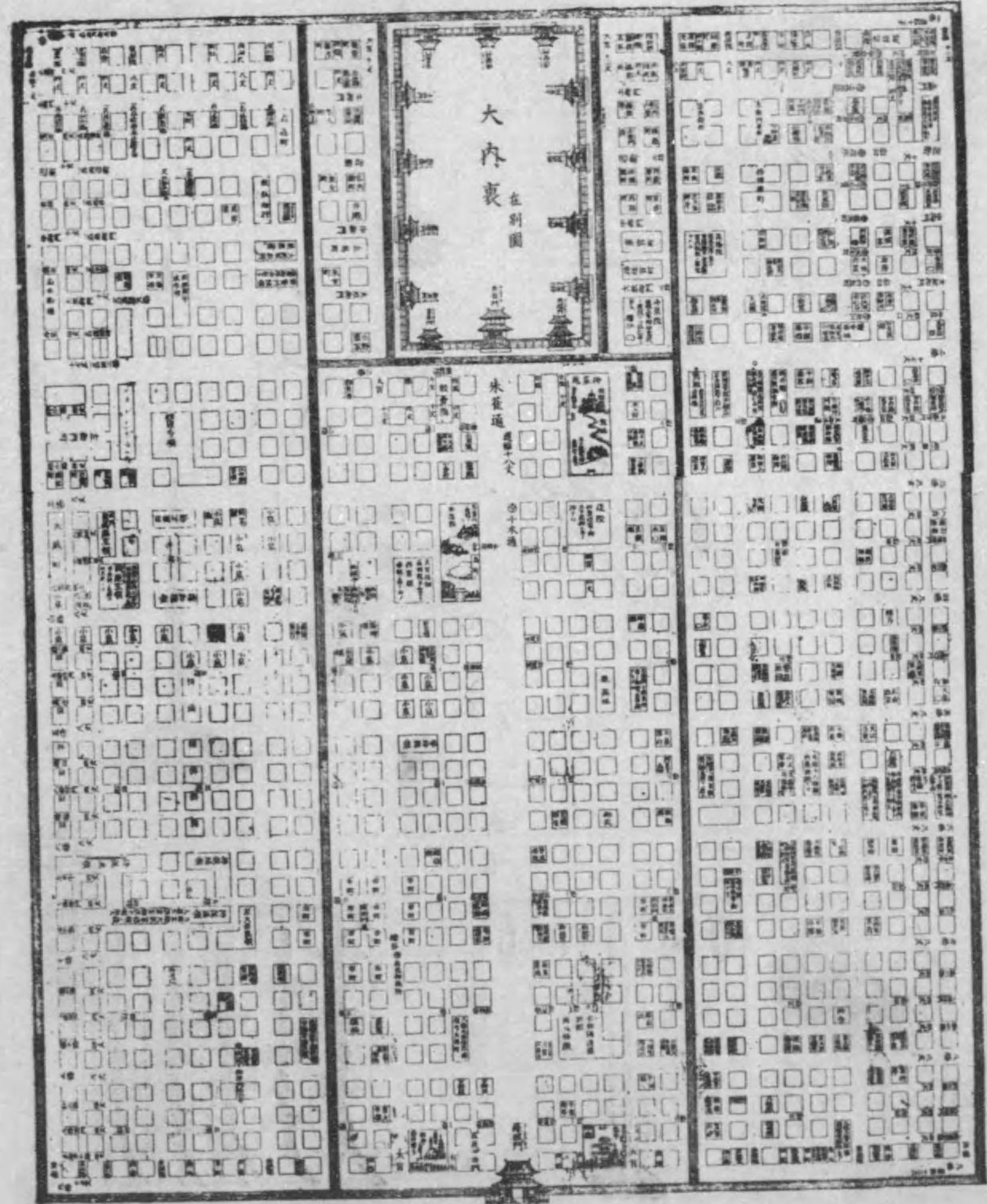
高杯方

檜柳毛車下車圖





花洛往古圖



訂正 枕草子春曙抄上巻目録

卷一

- 初段一 春はあけぼの
- 二段二 ころは
- 三段二 月朔日は
- 四段八 さんくなるもの
- 五段二 山は
- 六段二 くれは
- 七段二 原は
- 八段二 市は
- 八段二 淵は
- 九段二 海は
- 十段二 市は
- 十一段二 渡は
- 十二段二 みささきは
- 十三段二 いへは
- 十四段二 すすまじきもの
- 十五段二 たゆるもの
- 十六段二 人にあなつらるもの
- 十七段二 にくきもの
- 十八段二 心さきめきするもの
- 十九段二 過にしかたこひしきもの
- 二十段二 ころゆくもの

〔増補〕
 原本には目録なし。今萬葉抄に云はれたる段落の目次を此所において、假に目録とす
 弘恭云。この草子に見えたる歌は。凡三十六首あり。然して此のうち清少納言が自詠は十六首あるのみにて。そのほかは他人の詠あり。今云は左の如し
 卷一 古歌二首あり
 卷二 自詠一首あり
 卷三 なし
 卷四 自三首他二首あり
 卷五 自二他三連歌一首あり
 卷六 連歌一首あり
 卷七 自二首他二首あり
 卷八 他一首あり
 卷九 自一他二連一首あり
 卷十 自一首他一首あり
 卷十一 自二首他二首あり
 卷十二 自四首他二首あり
 合計三十六首也

卷三

- 二十一 一段 六十九 木の花は
- 二十三 一段 七十二 せりば
- 二十五 一段 七十八 鳥は
- 二十七 一段 八十二 虫は
- 二十九 一段 九十七 瀬は
- 三十一 一段 九十八 橋は
- 三十三 一段 九十九 草は
- 三十五 一段 百二 歌の題は
- 三十七 一段 百五 おほつかなきもの

卷四

- 三十九 一段 百九 ありかたきもの
- 四十一 一段 百十五 いとほしげなき物
- 四十三 一段 百十六 さりもてるもの

上巻目録終

- 二十二 一段 七十一 池は
- 二十四 一段 七十四 木は
- 二十六 一段 八十一 あてなるはものは
- 二十八 一段 八十四 げなきもの
- 三十 一段 九十七 川は
- 三十二 一段 九十九 里は
- 三十四 一段 百一 集は
- 三十六 一段 百二 草の花は
- 三十八 一段 百八 たとしへなきもの

- 四十 一段 百十四 あじなきもの
- 四十二 一段 百十五 心よげなるもの
- 四十四 一段 百三十二 物の哀しらせ隨なる物

訂正枕草紙春曙抄中巻目録

卷五

- 四十五 一段 百四十九 めでたきもの
- 四十七 一段 百六十四 れたきもの
- 四十九 一段 百六十八 あさましきもの

卷六

- 五十一 一段 百九十五 はるかなるもの
- 五十三 一段 百九十九 森は
- 五十五 一段 二百 つれよりもこごに聞ゆるもの

- 五十六 一段 二百一 繪にかきておとる物
- 五十八 一段 二百一 あはれなるもの
- 六十 一段 二百十一 わびしげに見ゆるもの
- 六十二 一段 二百十三 はつかしきもの

卷七

- 六十三 一段 二百十五 むとくなるもの
- 六十五 一段 二百三十四 つれくくなる物

- 六十四 一段 二百十六 はしたなきもの
- 六十六 一段 二百三十五 つれくなくさむる物

- 六十七段二百三十五 たり所なきもの
- 六十九段二百四十九 おそろしきもの
- 七十一段二百四十九 きたなげなるもの
- 六十八段二百三十六 なほ世にめでたきもの
- 七十段二百四十九 きよしと見ゆるもの

卷八

- 七十二段二百五十一 いやしけなる物
- 七十四段二百五十二 うつくしきもの
- 七十六段二百五十五 名おそろしきもの
- 七十八段二百五十六 むづかしげなる物
- 八十段二百五十八 くるしげなるもの
- 八十二段二百六十一 とくゆかしきもの
- 八十四段二百七十三 昔おぼへてふやうなる物
- 八十六段二百七十四 近くてまほしきもの
- 八十八段二百七十五 井は
- 九十段二百七十五 やまりのつかさの權の守は
- 七十三段二百五十一 むねつぶるゝもの
- 七十五段二百五十四 人はへするもの
- 七十七段二百五十五 みるに異なる事なき物
- 七十九段二百五十六 えせ物の所うる折の事
- 八十一段二百五十九 うらやましきもの
- 八十三段二百六十二 心もとなきもの
- 八十五段二百七十四 たのもしげなきもの
- 八十七段二百七十四 遠くてちかきもの
- 八十九段二百七十五 受領は
- 九十一段二百七十六 大夫は

中巻目録終

訂正枕草子春曙抄下巻目録

卷九

弘云・卷九の初丁は。此の抄は萬歳抄と大に異なり。萬歳本には左の如くあり
 九十二段 上達部は云々
 九十三段 君達は云々
 九十四段 法師は云々
 九十五段 女は云々
 九十六段 宮仕所は云々
 此の五段は。諸本も此抄の如く下にあり。即ち卷十さいしきものとある次に出たり

- 九十二段二百九十二 ○九十三段二百九十三 ○九十四段二百九十四 ○九十五段二百九十五 ○九十六段二百九十六 ○九十七段二百九十七 ○九十八段二百九十八 ○九十九段二百九十九 ○百一段二百九十九 ○百三段二百九十八 ○百五段三百一 ○百七段三百二 ○百九段三百三 ○百十一段三百十一 ○百十三段三百十一 ○百十四段三百二十三 ○百十六段三百二十三 ○九十八段二百九十三 ○百一段二百九十七 ○百二段二百九十七 ○百四段三百一 ○百六段三百二 ○百八段三百二 ○百十段三百四 ○百十二段三百十一 ○百十四段三百二十三 ○百十六段三百二十三 ○百十七段三百二十八

弘云。此所の上達部以下宮仕所に至る五段は。萬歳本には上にいへるが如く卷九に入りたり。

- 百十八段 三百二十九日
- 百二十段 三百二十九里
- 百廿二段 三百三十霧
- 百廿四段 三百三十ないがしろなるもの
- 百廿六段 三百卅一さかしき物
- 君達は (上の九十三) (段に入ル)
- 女は (上の九十五) (段に入ル)
- 百廿七段 三百卅五身を習たらん人杯はかくや有けんと思ゆるもの
- 百廿八段 三百卅六たすきにすぐるもの
- 百三十段 三百卅八いみしくきたなきもの
- 百卅二段 三百卅八たのもしきもの
- 百卅四段 三百七十三たふとき物
- 百卅六段 三百七十三さしめき
- 百卅八段 三百七十四ひとへは
- 百四十段 三百七十五したかさねは
- 百十九段 三百二十九月
- 百廿一段 三百二十九雲
- 百廿三段 三百三十さわがしきもの
- 百廿五段 三百卅一ことばなめけるもの
- 上達部は (上の九十二) (段に入ル)
- 法師は (上の九十四) (段に入ル)
- 宮仕所は (上の九十六) (段に入ル)
- 百廿九段 三百卅六ことにしらねもの
- 百卅一段 三百卅八せめておそろしきもの
- 百卅三段 三百四十三うれしきもの
- 百卅五段 三百七十三歌
- 百卅七段 三百七十四かりきぬは
- 百卅九段 三百七十四わらきもの
- 百四十一段 三百七十六扇の骨

卷十一

弘云百四十九段。女のうはきは。此の段今本には皆なし。萬歳抄にのみある也。又云百五十四段綾のもんはとあるは。諸本もんはとのみあり。又云百五十五段のやまひはの次に。並本皆心つきなきものといふ一段あり。然して萬歳本には之を省けり。此のことは委しく其所にいふべし。

- 百四十二段 三百七十六ひあふきは
- 百四十四段 三百七十七崎
- 百四十六段 三百八十六きらくしきもの
- 百四十七段 三百九十五みならひする物
- 百四十九段 四百六女のうはきは
- 百五十一段 四百七
- 百五十三段 四百七おりものは
- 百五十五段 四百八やまひは
- 百五十七段 四百二十みぐるしきもの
- 百四十三段 三百七十六神
- 百四十五段 三百七十七扇
- 百四十八段 三百九十五うちとくまじきもの
- 百五十段 四百七からきぬは
- 百五十二段 四百七がざみは
- 百五十四段 四百七綾のもんは
- 百五十六段 四百十二いびにくきもの

以上百五十七段

下巻目録終

【増補】
年々隨筆卷一廿三
隨筆の中にいしへ今からやまごにわた
りてめでたきは枕草紙。李義山が雜纂にも
さづきたりといふ説あり。時代のほどを思
ふにさることならんもまりがたし。又偶合
ならんもいかに知らん。いさよう似たり
といふ人もあれど。それは紫羅金身のたごへ
に。費直やみか引いづるが如し。其色こそ
似たりめ。余ささきたなまさいさくこ
なし。から人もかの雜纂をかしこや思ふ
らん。つぎいで来て四巻まであり。い
づるこにいとくきたなし

【訂正】
梨壺は。原本梨壺に作れり。今改めつ
村上天皇の天曆五年。勅を奉して禁中の梨
壺に於て。大中臣能宣。清原元輔。源順。
紀時文。坂上宮城が後和歌集を撰びしを
いふ

【増】玄旨法印
細川藤季のよ。藤野と稱し稱して玄旨
と稱す
【増】榮花物語
榮花物語は。四十一巻あり。赤染衛門の作
也と云傳へたり

訂正 枕草子春曙抄二
増補

北村季吟法印 抄
鈴木弘恭訂正増補

枕草紙は。清少納言の筆作也。少納言は清原元輔のむすめ
なれば。其姓をもちあて。清少納言といへり。父の元輔の。
後撰集の撰者梨壺の五人のひとりなり

清原氏系圖

天武天皇——舍人親王日本紀國者——貞代王——有雄——道雄賜清原姓
海雄筑前守房則豐前守深養父内匠九職人所傳色顯忠泰光下野守

元輔肥後守清少納言 此草紙の作者也

玄旨法印御説に。清少納言は。一條院の皇宮の女房とみえ。
此皇后宮と申侍る。中關白道隆公の御むすめ。定子と申
侍し。此草紙の所々に宮のおまへと侍る是也。然るに榮花

物語に。三條院の女御淑景舍道隆公女の御もとに宮仕せしよし見えたり。愚案此草紙に淑景舍の御事は所々に出たれど。此御局ミヤノに宮づかへせし事ハ見え侍らず。但此草紙にあらハせる人々の官などを勘カシへ侍れば。一條院の長徳年中長保元年二年などの事どもにて。其後の事見えざるにや。彼皇后宮は長徳二年十二月十五日にかくれさせ給へり。淑景舍は三條院の東宮にておはしませしけるほどにまゐり給ひて。四年はかりや宮づかへし給へりけん。さて長保四年八月廿日にかくれ給へれど。猶皇后宮カミミヤにハ二カとせいきのこり給ひければ。かの皇后宮カミミヤ隠給ひてのち。はらからの御かたなれば。もし清少納言もまゐりかよひたるにや。然らば榮花物語に赤染衛門のしるせる所は。此草紙かける後の事にてや侍らん可尋之。

新古今集云。元輔がむかしすみ侍ける家のかたはらに清

【増】新古今集。二十卷あり。土御門帝の元久二年。後鳥羽帝の院宣によりて。源通具。藤原有家。藤原定家。藤原家隆。藤原雅経。等の爲して尋りし其之

【可】猶皇后宮には二とせ云々あるは事實違へり。長徳二年と長保四年は六年差あり。然してハ二とありては。皇后宮淑景舍より後まで存生し玉ひしやうに聞ゆること。ハはよりの誤。二は六の誤なるべし。假令誤ならずとも本文のまゝにては。いと解しがたし

少納言すみける頃。雪いみじうふりて。へだての垣もたふれ侍ければ。申つかはしける。

跡もなく雪ふる里は荒あはれにけり家集たるかトアリ

いづれ昔の垣かきねなるらん家集さかみかるトアリ

赤染衛門

又玄旨法印百人一首抄云。清少納言老後には四圍のかたにおちふれたる物と云々。愚案一條の御代のはじめに道隆公關白せき給ひ。定子皇后宮に立給ひて。御威光おんゐかうもめでたかりしに。清少納言もかの皇后宮にめしまつばまつて。上藤の次にてまじらひ。其才さいいみじかりければ。内侍になすべき沙汰さたなどの事此草紙に見えたり。まかるに中關白殿道隆かくれさせ給ひて。御兄弟ながら御中よからざりし御堂殿關白せき給ひて。上東門院入内ありて中宮にたせ給ひなどして。後には伊周公隆家卿など遠流の事ありき。皇后宮は女みこ男みこなどうませ給ひけれど。ほどなく

【増】新古今集。清少納言が。老の後四圍の邊に暮あふれたるよしへぞ。綴千載集雜に老の後こもりぬて侍りける。人の尋てまうできたりければ。清少納言。さふ人も有とばえこそいひて我やはわれささるるわれつつ。是によれば。都の邊にこもりあけるなるべし。他國ならばそのころをあぐべき。さもなければ。此の考へし。後世東へ下りし時のふみさて有も。いさ後にふみかくこもしらぬもの。儼げんかきしものぞ。衆日記にいへること。また枕草子にわれはめせしは。みくめ。女ふみは。是もさかしう。いさたれ。歌はさかし通てかこゆ

【可】古事談二云。清少納言零落之後。若殿上人アマタ同車。渡ニ彼宅前ニ間。宅跡破損シタルヲミテ少納言無下ニココ成ニケレト車中ニ云テ開テ本自後敷ニ立タリケルガ。履ヲ披上げ如鬼形之女法師顔ヲ指シ出云々。駿馬ノ骨ヲ買ハアルト云々。さあるを見ても老後に零落せられたりしこさは知られたれど。四圍にさすらひ住まれ

たりしは。いまだたしかなるものに見あらず

清水源臣云。此草子に山はそこ。川はそれ。なごける多し。國々におほなる山川の名をしもぬきいでいきたる。より所ある事。今考るに其名のこさやうなるを。かかしき。又ふるくより歌によみもてはやしたるなるべし

又云。此抄に(春曙抄のこさ)地名の註おほくは。八雲御抄を引て證したれど。八雲御抄はこの草紙をよりごころにし。その關もあるもあまり多し

河社卷二十一云。枕草子となつくるよしは。彼草子の奥にみづからけるがとし。御昭いはく。龜鏡抄出で後たれかこれを枕草子にせざる人ある。さればまぐらば常にもてならず物なれば。枕にもするばかりもてあそぶこころなり

弘毅云。河社の説に。これは枕は常にもてならずものなれば云々。さあるは。いさいぶかし。彼草子の奥にみづからけるがとし。下にある史記といふ文をなんかいせ給へるさの玉はせしか。枕にこそは侍らめと申しおは云々。さあるをいふなるべし。按るに。こはうへの御前には草紙に史記といふふみをか。せ給へれど。清少はさることあまりにかさしければ。枕にこそは侍らんと申たる事。さて枕にこそは侍らぬものにて人の見ゆ所に用ゐるがゆゑに。人にかくすべきことを當時の俗言に枕にこそは侍らぬ。即ち公にすべからざる言の意にて。私言などの意なり。さてかく本文

に枕に侍らぬといはれたりしより枕草子とは世人の呼ぶことなれるなるべし。然して専らにかく枕草子と名付しは後人のつけしことにて。古へは清少納言の記。或は直に清少納言などいはれたりしこと。ものに見えたるをとも知るべし

かくれさせ給ひ。御いもうどの淑景舎もうちつゞきてうせ給へれば。彼御かたの人は時をうしなひて。成出べきやうもなくなりゆきしに清少納言もさるあれたる所にすみ。四國にもさまよひ給ひしにこそ。此草紙にも其昔を志たふ思ひをのべて。此皇后宮の御威勢ありしほどの事を所々に書あらはし我身の世にはめはやされし事ども數多かれ侍しにや。或説に。清少納言誓願寺にて出家して帝の御かへり見をかうふり。いみしき往生をどけて彼寺に墓も有と縁起に見ゆ。時代にあはで一旦はおちふれしかども終焉のさまはいみじかりけん事。才有し人のまるしめでなく侍にや。

おまへに内のおとゞの奉り給へりしを。是に何をか、ましうへの御前には史記といふ文をなんかせ給へるとのたまはせしを。枕にこそは侍らめと申しおは。さはえよとて給はせたりしを。あやしきを。こよや何やとつみせずおほかるかみのかずを書つくさんとせしに。いと物おほえぬことぞおほかるやと云く。枕にこそは侍らめとて申うけたる物にかゝれたる草紙なれば。まぐらさうしと申侍るなるべし。草紙は双紙ともかけり。草紙は物の下がきを草案草稿などいへる。其心にていまだ清書をも志あへざる物どのこゝろにや。双紙はかみをならべてかきつらぬし心なるべし。いづれも昔物かたりなどの惣名をいふん。

此さうしの文牒やごとなき物にて。我國の至寶といはれし源氏物語に双び稱せられて。源氏枕草紙と申つゞけ侍

〔増〕
つれく草にも云々
按るに徒然草に。法師はかうやまじか
らぬものはあらじ。人には水のほしのやう
に思はるゝよき清少納言がけるもげにさ
るこそぞかし。さある類。

〔増〕
此草紙の異本は。活本にも二冊なるあり。
古抄本は三冊なり。又七巻本まで七冊なる
もあり。又群書類聚本は。全段を載せざれ
ば。こゝには取らざれども。その初段の如
きは。此の抄并に諸本にはいまだ見えぬ所
の同多あり。就てみるべし。

るにや。吉田の兼好はうしがつれく草にも。此草紙を庶
幾せる所々おほし。其筆のあや詞の優美。心の幽玄更に
はんもいまめかしき儀なるべし。

此草紙異本さまざまあり。或は二冊。或三冊。或五冊。一決
しがたし。古今和歌集。後撰集。源氏物語等は。定家卿の證
本ありて世に定り侍るに。枕草紙にはいまだ此卿の御本
を見出侍らず。承應二年の春。尾州より一本を得たり上下
二冊其本紙ふるく手跡中古の筆跡なりき。其文意あざやか
にて。所々に朱點をくはへ。且又人々の傳。官考などまるさ
れたり。奥に異本兩通かきくはへられ侍しは。此本多本を
合せて用捨せられし事まられ侍り。其奥書云。

往來所持之愚本紛失年久更借出一兩之本令書寫之
依無證本不審但管見之所及勘合舊記等註付
時代年月等謬案歟

安貞二年二月

毫及愚翁在判

文四乙未之仲夏廣橋亞槐送實相院准后本下之本末兩
冊見示曰余書寫所希也嚴命弗獲止馳禿毫彼舊本不
及切句此新寫讀而欲容易故此拉之次加朱點畢

正二位行權大納言藤原朝臣教秀

此毫及愚翁誰人にや。動物は此作にて。朱點は教秀卿と見
ゆ。此奥書の上は證本と用侍らんにとがあるましくや。又
一本上下二冊塚本とて宮内卿清原氏の奥書あり。發端より
一紙がほどはよのつねの本に大かた似て。其次枕詞の次
第など大きに異也。又清少納言の歌よみし物語一段も書
つらねず。此本も先達の用ひ給へる由の奥書など見えな
れど。只此毫及愚翁教秀卿等の奥書の本のおもむきを古
人の用ひ給へる證據おほし。まづ後拾遺。千載集。新古今。
續古今。玉葉等にいりし清少納言の歌詞書までも皆此本

〔増〕
弘教云。教秀卿は。勸修寺大納言教秀卿な
り。明應五年七月十一日薨す。年七十一

〔訂〕
弘教云。用ひの假字は。和行一段用格にし
て用ひさく方正しけれど。既に中むかし
の頃にも流行中二段活用として用ひ用ふ用
ふる用ふれさける例多くあれば。今改め
す。下文音をなす

〔増〕
後拾遺集。千載集。新古今集。續古今集。
玉葉集。いづれも動物の賦集に
榮秘抄三卷あり。順徳院御撰之

八雲御抄六卷あり。圓院御發之
悦目抄一卷あり。藤原某俊の撰
徒然草二卷あり。吉田兼好の作

増
季經は。傳詳ならず

延喜式五十卷。左大臣時平等撰す

西宮抄廿五卷。左大臣高明公著之

北山抄十一卷。大納言公任卿著之

江次第十一卷。大江匡房の隨筆

職原抄二卷。藤原朝隆の著之

年中行事歌合一卷あり

公事根源一卷あり

官位令。今の第一巻にあり

職原抄二卷。北島親房の撰著之

百寮訓要抄一卷。二條良基の著之

和名集は。倭名類聚抄のと。二十巻あり。

源順の著之

拾芥抄六卷。左大臣實盛公の著之

公卿補任。巻數不定。或は八十巻。或は

百巻なるもあり。著者未詳

大系圖三十巻。四道守の撰之

大鏡八巻。藤原爲業の著之

作者部類三巻。元盛の撰之

万葉集二十巻。橘諸兄公撰之いへり

古今六帖十二巻。紀貫之の女の著之

三代集とは。古今。後撰。拾遺の三代をい

ふ

日本紀は。日本書紀のと。三十巻あり。

舍人親王等勅を奉じて撰す

三代實錄五十巻。左大臣時平等撰

菅家文五十二巻。菅公の詩文集也

本朝文粹十五巻。藤原明衡撰す

朗詠集二巻。大納言公任の著之

伊勢物語二巻。作者詳ならず

土佐日記。一卷。紀貫之の著

大和物語二巻。作者詳ならず

狹衣物語八巻。大貳三位作

宇治拾遺十五巻。大納言隆國作之

古今著聞集廿巻。橋成季の著之

江談三巻。著者詳ならず

ちくび物語四巻。作者詳ならず

河海抄廿巻。四辻大納言善成の著之

花鳥餘情廿巻。一條兼良公の著之

源氏物語五十四帖。紫式部作

伊勢物語二巻。作者詳ならず

土佐日記。一卷。紀貫之の著

大和物語二巻。作者詳ならず

狹衣物語八巻。大貳三位作

宇治拾遺十五巻。大納言隆國作之

古今著聞集廿巻。橋成季の著之

江談三巻。著者詳ならず

ちくび物語四巻。作者詳ならず

々所々は。順和名集。拾芥抄に勸へ。名所は歌枕等ありとい

へど。此草紙をよく沙汰せさせ給へる故に。八雲御抄をど

り分て用侍り。彼老及愚翁の勸物にもらせる人々の官考。

系圖。傳などは。公卿補任。大系圖。榮花物語。大鏡。作者部

類等にてかきなへり。引歌は。万葉集。古今六帖。三代集よ

りこのかた代々の撰集家々の集等に勸へ。神社は。日本紀。

三代實錄。延喜式など。卜部の家説等を引まじへ。佛のうへ

は。その經々をかかんがへ。古語は漢家の諸書にかんがへ。古

詩は。文選文集のたぐひ菅家文章。本朝文粹。朗詠集など用

ふといへど。猶我朝の詩文には疑はしきを闕事おほし。此

國詩集數多は見侍ねは也。衣服の色々は。餉抄。桃花藥葉な

ど。河海抄。花鳥餘情などの類。やまと詞の品々は。源氏。伊

勢物語の諸抄を證とし。土佐日記。大和物語。狹衣。宇治拾遺

古今著聞。江談。ちくび等の古物語。其外多年見し所の歌

これに従ひて改めつ 綺語抄云夕まくれねにゆく鳥のうちむれていづれの山のみれにさふらん弘恭云。異本には本文にゆくさありからすのれさころに 原本つとめての四字なし。古抄本及び異本に此の四字あり。こはある方よろし。此段はすべて四季の評なれど。抑強あり照「訂」冬はつとめて。いさ殊勝の筆つひなれば。其意もよく味はひ見るべし。まづ春はあけぼのさひ。夏はよるさひ。秋は夕ぐれさやうにつづけたれば。冬はつとめてさあるぞさる事なる。然るを原本に脱文したるは。いさ不具の文さなるべし。今二本によりて之を補ひつ。「改訂」つとめて「は其の翌朝」の意に用ゆるが當時の用法にて單に「朝」とは異なり。尙嚴威目時の義なれば「動めて」の義と思ふべからず。いささむささあるに對してさあるべき所なるをや 又さらで「訂」猶なごのいささろき 原本しるくさあり。今異本によりて以てつ。さるは下の又さらでぬるくゆるびもてゆけば 別に冬の寒さを愛したる心をこさるる詞を、冬も寒さはさるるみゆるくゆるみゆれば。燈火なども殊略にありたるはむるしと云。冬の朝の寒さに燈火もてあそぶにそつきしけれいはんため詞也

「訂」弘恭云。原本にはなごさある所に書し「も」を添てなごさむさやうにしたれど。古き讀辭なれば今は省けり。

「改訂」すびつ「は炭櫃の義なれど、此は、は四角形の火鉢のなり。諸注圍爐義を釋したるは此に當らず。火をけは丸形火桶にて定家卿の愛せられたる「桐火桶」などいふ物の類或は楕圓物などもあるべし。「改訂」しるき灰。炭火の燃え盡して白き灰となりたるにて世にじようさいふもの、老翁を「尉」といふに寄せていふ語なるべし。春注せうさあるは誤なり。

「訂」此所異本に三月を三四月。七月を七八月。八九月を九十月。十二月を十一月としたるもあれど無用なれば取らず。万葉抄に正月一日はより別段としたれば。今これに従ひ

正月一日はまいてそらのけしきうらうらしく
前に正月三月なご云出て。ひさしせながら
をいささ書しうけて元日まいて面白き事
をいふ。こはむつきついたちさむむべ
き。うらうらうらうらうらうらうらうら
なる望の氣色をいふ。瀬川百首「うらうら
春たさむささいしより日のうらうらさな
りにけるかな」

「増」まいては。まして同音之の音便なり
七日は雪間のわかあなをや。こしより用る
事也。事文類聚云。人日探七種菜二作。愛
蔵時記河津抄云。七種は野、蕨、芹、香、御

ころい。正月。三月。四五月。七月。八九月。十月。十二月。す
べてをりよつつけつひとひとながらをかし。
正月一日ハ。まいてそらのけしきうらうらしくとめづらしく。
かすみこめたるに。世に有とある人は。すぶたかた心こ
とにつくるひ。君をも我身をもいはひなごしたるさまこ
とにをかし。七日は。雪まのわかあな青やかいつみ出つれ
いはしむさるものめちかからぬところにもてさわぎ。白
馬みんとて里人はくるまきよけにえたてへ見ゆ。中

形、須く代佛産。世談問答云。正月は少陽の月也。又七日は少陽の數也。仍て如延をはしめとして。私の家にいたるまで。宴會を催す也。それにあつものか食すれば万病又邪氣を除く術也といふ本文あり

白馬見んとて。あなむまこむべし。年中行事番合註。二條大關註云。正月七日青馬のせちまさいふ事は馬は陽のけた物也。馬をみれば。年中の邪氣をさり。年災を除くといふ本文侍とかや。愚案は十節鎌井皇世記等のおもむき也。猶延喜式。江次第等に委し。河津抄云。光仁天皇寶龜六年正月七日。天皇御。楊梅院安殿。設宴於正位以上。已而内殿宴進。青馬馬。兵部省進。位已上。裝馬。是青馬始也云々

例はさしもさる物めちかからぬ所にめちかからぬ所は。目にはかく見ふれぬ也。若菜の葉などいふ物を見なれぬ宮殿のたりにも散ふ心也

「増」弘恭云。白馬節會の源原は。問宮永好論が天武天皇十年正月七日向安殿にて宴會の儀あり是や此節會の始なるべきさいはれたるよろしきすべし。彼の万葉集二十の卷に。

「改訂」白馬をあか馬といふは上古。馳馬クロウマを用ゐたれば正しくあを馬といひしが中古其の馬の廿一頭揃へて用ゐるが容易ならぬより白馬に改められたれど昔のまに「あを馬」といふなり拙著白馬節會沿革考に委しく辯せきたり。

中の御門のさしきみ。待賢門中の御門と號す拾芥抄にあり。中の御門は大内裏の東の御門にて白馬の陣へ近きゆゑに。此門より車にのりて見に
いるさま也。白馬の陣は遠處門をいへり。左馬陣は。第一也。江次第二に。左馬陣石白馬陣などのせちの所にあり

の御門のどじきみひきいる程。かしらをも一どころよ
まろびあひて。さしきしむたち。よういせねはをれなごし
てわらふも又をかし。左衛門のちんなごに。殿上人あまた
たちなごして。とねりの弓もとりて馬もたごろかし
てわらふを。はつかに見いれたれば。たてしごみなどの見
ゆるに。どのもりづかさ女官などのゆきちがひたるこそ
をかしけれ。いかばかりなる人。ここのへをかきたちなら
すらんなご思ひやらるかし。うちにも。見るはいさせばき
ほごにて。さねりがかほのきぬもあらはれ。しろきもの
ゆきつかぬごころは。まごころにくろき庭に雪のむらぎぬ
たる心ちしていご見ぐるし。馬のあがりさわきたるもお
そろしくたほゆれば。ひきいられてよくも見やられず。」

いかる心にかあらんかきはらだち
 祝儀にてたばふれにうつ事を腹立をいかな
 る心あらんと也
 まかしくいふをかし
 のろひ事。おそろしき事をいふさま也
 かしこまりなし。畏の字也。禮義正からぬ心
 也。禁中のうるはしき所もけふは此朝の木
 の事に打亂て禮義も疎かなると也
 除目のほど。召の除目也。江次第には外官
 除目九日始議之由見三涼記北山抄等云々
 々。一御御説には正月十一日より十三日ま
 で三ヶ日也云々。年中行事注云。召の除目
 と申事は外官をむれと任せる也。外官
 とは諸國の司也。田舎をあらたしと也。外
 官の人々を召て任官をさづけらるればかや
 うに名づけ侍るにや
 猶次第は江次第に委其國は雲國あり
 「訂」あない。原本にはあないといふれど。異
 本にあないさふるをよすとす。故今改めつ
 まうしよみ。諸國の守にても介階目ふとにて
 も望。申訴状也。公事根源。名譽。國替。
 名國替。秩滿。更任。任府。派上などいふ申文の色々敷をしらす云々。江次第に委し
 四位五位わかやかにさげらるは其身すでに四位五位に至り。若き人など何國を望むたのもしげ也と也。次に老人をいばんとて也。藤原
 抄云凡國司者相常五位已下也然爾雖四位已上或隨其望。其望。古今之例也
 おのが身のかしこきよしを。我身の才あり。勞あるよしをいひて。此度の除目もれめやうにまたのむさ也。それをかかして若き女房たち
 などの其老人のまねをして笑ふ也
 三月三日うら／＼とのごかに
 杜于美詩三月三日天氣新。長安水邊多麗
 人
 「訂」原本には三月三日とありてはもぐなし。
 古本異本あるに従ひつ。此所の意は。三月
 三日は日のうら／＼とのごかにてりたるが

禁中の事也
 し。内わたりなごやむとをなきも。けふはみなみたれてか
 しこまりなし。除目のほどなど。うちわたりはいとをか
 雪ふりこほりなごまたるに。まうしよみもてありく四位
 五位わかやかにこしちよげなるはいとたのもしげなり
 老てかしらしろきなどが。人にとかくあないいび。女房の
 つほねによりて。おのが身のかしこきよしなご心をやり
 てとき聞するを。わかき人々はまねをしわらへど。いかで
 る。たのしむらじこ也。天千へ申すを奏といひ后へ申すを啓するといふ也
 かしらん。よきにそらし給へ。けいし給へなごいひてもね
 たるはよし。えず成ぬることいとあはれなれ」
 三月三日はうら／＼のごかよてりたる。も／＼の花のい
 まさきはじむる。柳などいとをかしきころさらなれ。それ
 もまたまゆにこもりたるこそをかしけれ。ひろどりたる

かかしき。桃花の今咲はつむるもか
 の意。かかしきといふ詞を寄ける此草
 子の文法也
 けいのは今の今咲はつむる。朝飲云。桃。夜雨怕温曾泣之長新婦曉風吹不旨之口先吟。紀綱言。尋文類聚云。桃花生玉潤柳葉暗金流。花
 まゆにこもりたる。柳のやま／＼めぐる。糸に比して。いこのまゆに籠りになごらへていふ也。綜藝集云。宵柳の眉にこもれる糸なれば春
 のくるにぞ色まさりける。此うた新干載集にいれり
 花がめにさしたる。後編「欠しけれあだにち
 るなご花をゆにさせれどうつるひにけり
 貫之
 櫻のなほし。一和御説櫻直衣面白裏赤花云
 々々。直衣はつねになうしといへり。大
 た白きしらのあやを用ゆ。或は平絹云々
 裏は平絹也。染立等桃花葉葉に委し
 いたしうきして。桃花葉葉云一和御説出給
 有。櫻之時替之。但衣取替也云々。これ直
 衣のさきなるべし。鞋は衣のうへに替す
 弄花抄に有
 さりむしのひたひつき。花のあたりなれば
 縹などの顔つきやさしく飛かふさま
 まつりのころ。賀茂の御形の事也。四月中の
 四の日の。勅使の事路次の次第など江次第
 に委。延喜式大政宣式云。凡賀茂二社四月
 中西祭り寮内親王向社。史一人。左右史生
 各一人。官學一人。向三寮所。延喜式。山城
 國司預後。祭日二申。祭二勅使。令。奉。御井
 有。走馬。下。界
 何こいちはせん。面白きにたへて心せんか
 たなき心
 あなくちばふたあひ。一和御説云。宵柳葉は露
 宵時。露。二露は露花と露花して露るな
 り

にくし。花もちりたるのちばうたてぞ見ゆる」
 おもしろくさきたるさくらをさかきりておほきなる花
 がりにさしたるこそをかしけれ。櫻のなほしにいたしう
 ちきまて。まろうとにもあれ。御せうどの君達にもあれ。そ
 のまきに近く居て。こちかくあて。ものなごうちひたるいとをかし。そのわ
 たり。とりむしのひたひつきいとうつくしうてごびら
 りくいとをかし」
 まつりのころぞいみじうをかしき。木々のこの葉まだ志
 けうはなうて。わかやかにあをみたるに。かすみゆきりも
 へだてぬそらのけしぎの。なにとなごうるにをかしきに。
 すこしくもりたる夕つかた。よるなど。志のひたるほど、
 びすのどほうそら耳かとおほゆるまをたごく。いひささ

ほそひつふたに 兩點 河海抄云。絹織也。
 [改訂] 青朽葉二藍 春注は青色目なれど木
 文のは黄色なり。青朽葉は經期黃緯香色、
 二藍は經紅緯藍。
 心なごにけしきば、りついか 染精のぬは
 ざるを紙についでいめる。祭の用意に取
 せもてあつふさま
 すそこ 末酒上の方を白くしてすそを紙にも
 織にもこくそめたる
 けいしくつなごの 此草紙の奥にも高きけい
 しなをへはきこれほご存
 [増] けいしくつなご二品と。和名抄に屋字
 ツリケノアサダとありくつはつれの香々
 さうそきてつれば 襲束したてたるさま
 祭の日のさまなるべし
 ちやうざさいふほうし 昆音なり。東寺の長
 若などあり。彼賣女の終束して物々しく
 ありくさま
 れりさまふこそなかしけれ 江次第。賣賣
 祭の路頭の次第に。女車六兩賣女在此中
 云々。かやうの賣女などに出るさまにや
 木いかに心もさなからんさあり。祭の日
 もし失禮もや心もさなさま
 さもしてつくるひ 彼賣女の終束して
 ありくさまなるべし
 [改訂] ちやうざ 定者なり。法會の時の行道
 ぶつに香爐を執りて前行する役備なり。
 「長者」と釋するは當らず。摩勝寺供養記
 に、次打三金鼓、明師發音。定者隨音徐
 行。さある是なり。

きついたらん何ごちかはせん。まつりちかくなりて。あ
 のそめいろ
 をくちは。ふたあるなどのものごもおしをきつ。ほそび
 つのふたにいれ。かみなごにけしきはかりつ。ゆき
 らがひもてありくこそをかしけれ。すそごもらご。せきざ
 らなどつねよりもをかしう見ゆ。わらはごのかしらにか
 りあらひつくるひて。なりはるななへはころび。ちみだ
 れかへりたるもあるがけいしくつなごのさすげごせ。け
 らさごせごせごせごせごせ。うつしか其日にならんといそ
 ぎばしりありくもをかし。あやまうさごりてありくもの
 ごもの。うぞぞたてつれば。らみしんごやうごごらふ法
 師などのやうにねりごまよふごせをかしけれ。ほごく
 りつけておやまはの女あねなどのごごして。うくるひあ
 りくもをかし。

ことごとくなるもの

「訂」異本又一本には。ことごとくなるものを。
 「おなご」ことなれどもきこいことなるも
 のことあり
 法師の詞 俗人の詞とはよるづかはるべし。
 「俗」は俗に對しては必無常の法理を演說する
 を禮儀とすべしと釋名釋義の論へり
 をご女との詞 歌よむにも女の哥はよのつね
 の男のよむにははるべし云々
 [増] 男女は天性音聲の異なるものこと
 げすのことばは心も下あり。是も上高の詞
 ごとごなるべし。徒然草に昔は車もたけ
 る火かかげよごせいひしか。もてあげよ
 かきあげよごせいひをかをし侍るもいやし
 さま似たるにや
 [増] げすは下衆。下衆の言辭は白から數人
 さま異なるものこと
 おもはん子をほうしに。こより異事なる物さ
 いふに付て。ふと思へる事を言出たること。
 思ふ子を法師になすは異端の事なればこと。
 但やうの事を段段言交へられし事更に其
 執權に合せたる事のみならず。只思ひう
 らに任せたる事さひさひ見るべきにや
 さるはいさたのもしきわさな。一子出家すれ
 ば九族天に生ずさいへり。隨に菩提に入は
 頼もしきわざを俗人の破戒無惑の心からは
 水の端のやうに思ふこと
 いゆるをも。寝るをも安からずそしりいふご
 こと。次の詞にそれをも安からずいふごい
 るに付けて見るべし
 みたけ 河海抄云。御書は金峯山を宣化天
 皇の三年に命峯山に藤王権現あらはれ給ふ
 こと云々。吉野のつれのみたけなり。千日精
 造してまゐる所

法師のことば。をごと女のことば。けすの詞にはかなら
 らむじあまりしたり
 おもはん子を法師になしたらんこそはいと心なるしけれ。
 さるはいとたのもしきわさを。たゞ木のはしなごのやう
 に思ひたらんこそいごいとほしけれ。さうだものゝあし
 きをくひ。いぬるをも。わかまは物もゆかしからん。女など
 のある所をもなごかみたるやうにさしのぞかずもあら
 ん。それをもやすからずいふ。ましてけんじやなどのかた
 はいとくるしけれ也。みたけ。くまの。かへらぬ山なくありく
 ほごにおそろしきりも見。さるしあるごごえ出せぬれば。
 こい。かしてによはれごきめくにつけてやすげもなし。い
 なくわづらふ人にかへりて。ものゝけてうするもいとく
 るしけれは。こうじてうちねふれば。ねふりなごのみして
 どどがむるもいと所せくいかにかおはんご。これはむか

くまの 新宮本宮那智を熊野三所と申す。いづれも難所の山路。一段に遠玉之男。事

熊野権現靈誠殿の本地はあみだ。兩所権現は藥師觀音。若一王子は熊野長士也。轉して日本第一大靈驗熊野三處權現といへり。飛騨大

さつは本地千手觀音。さつは山なく、いたらぬ山なく。源氏浮舟卷に「いづくにか身をばよせんしら雲のうらぬ山もなくぞゆく」[増]「うらぬ山なく」

おそろしき見。法圓三藏の渡天の時山中にて黒獅子にふりあひし類。熊野山童子の千尺夜及にあひ給へるたぐひをおもふべし

いささこゝろせういかにおもはん。俗人の事より法師の上は世人にもてまわかれて。所せばく人のおもはくもままに心づかひせられてくる

しげなるさふくめたる詞。[増]「漢」いかに思ふらんといふ所せし。句を上下に返して心得べし

これはむかし事いまやうは。法師のあたりに聴ておこなひをつしめし上古の事なり。當世やうはなべて法師の左法みだりなれば一向に安

げ。と末世濁惡のさまをいふ。大進なりまさかいはに

これより又一段別の事。大進生昌。孝及愚翁の勳物云。長保元年八月九日自三藏曹司行啓。平生皇子時中宮前

大進云々。前ハ但馬守後ハ正四位下權守經。文章生。贈三位顯村二男中納言惟仲弟。中宮大夫。中宮亮大進少進などきさきの御

かたの事をおこなふ官人。[改増]ひんがしのかどよつあし云々。東の門は四足門に改造してさふなり。四足門附圖参照。大臣以上の者に許さる。門

なれば生昌は六位にて此の門なれば改造して御成門とせらるなり。みやのひんがしのかどよつあし云々。中關白道隆公の御むすめ一條院の后宮。教皇親王一品宮女二宮などの御母。清少納言の主君。生昌が家へ行啓の由勳物に有

んやのあればいりなんや。禁中などのやうに御座の宿直人も居れば只入んと思ひてさ。やは助字

しのことなりいさやうはやすけなり

大進なりまさかいはに。宮の出させ給ふに。ひんがしのかど

はよつあしになしてそれより御こしはいらせ給ふ。北の

門より女房のくるまもぢんやのねはいりなんやとおひて。かしらつきわろき人もいたくもつくるはず。よせ

てあるべきものと思ひあなづりたるに。ひらうけの車な

どは。門ちひさければさはりてえいらねは。れいのえんだ

むしろをきしてさほるをいふ。車なからえいらね事を腹立

うしきてある。いとにく。ばらだ。まけれどいか。ば

せん。殿上人地下なるも陣にたちそひ見るもねなし。御前

にまゐりてありつるやうけいすれば。こゝにも人は見る

まじくやは。なごかばさしもうちとけつる。あらはせ給

ふ。されどそれは皆めなれて侍れば。能たて侍らんに

しこそおどろく人も侍らめ。さてもかはかりなる家に。く

るまいらぬ門やはあらん。見えはわらはんなどいふほど

にしも。これまゐらせんとて御視などさしいる。いでいと

あろくこそおはしけれ。なごてか其門せばくつくりてす

み給ひけるぞといへは。わらひて家のほど身のはどにあ

はせて侍るなりといらふ。されど門のかぎりなかくつ

くりける人もきこゆるはといへは。あなあそろしとあど

ろきてそれはうていこくがことこれこそ侍るなれ。ふるさ

とんじなど侍らずは。うけ給りたるべくも侍らざりけ

り。たましく此みちにおかりいりければ。かうだにわき

まへられ侍るといふ。この御みちもかしこからざめり。え

んだうまきたれば。みなおちいりてさわぎつるはといへ

びらうけの事。桃露葉云。極細毛赤色。長保元年八月九日自三藏曹司行啓。平生皇子時中宮前大進云々。前ハ但馬守後ハ正四位下權守經。文章生。贈三位顯村二男中納言惟仲弟。中宮大夫。中宮亮大進少進などきさきの御かたの事をおこなふ官人。[改増]ひんがしのかどよつあし云々。東の門は四足門に改造してさふなり。四足門附圖参照。大臣以上の者に許さる。門なれば生昌は六位にて此の門なれば改造して御成門とせらるなり。みやのひんがしのかどよつあし云々。中關白道隆公の御むすめ一條院の后宮。教皇親王一品宮女二宮などの御母。清少納言の主君。生昌が家へ行啓の由勳物に有んやのあればいりなんや。禁中などのやうに御座の宿直人も居れば只入んと思ひてさ。やは助字

かりつるやうけいすれば。車なからえいらね事を腹立

うしきてある。いとにく。ばらだ。まけれどいか。ば

せん。殿上人地下なるも陣にたちそひ見るもねなし。御前

にまゐりてありつるやうけいすれば。こゝにも人は見る

まじくやは。なごかばさしもうちとけつる。あらはせ給

ふ。されどそれは皆めなれて侍れば。能たて侍らんに

しこそおどろく人も侍らめ。さてもかはかりなる家に。く

の五位に叙したるを命婦といふ。おもは従者。かくつきたる名。源氏空輝の巻に民部のおもさなどいふもあり

【訂】原本にはおもさをおとりに伴れり。按るにこはおもさある方よろしければ。今異本并に万葉抄に従ひて改めつ

あさがれひのまに 年中行事哥合註曰。あさがれひは天子の朝の御膳の名御膳を供する所にて侍り。かれひははれたる飯にて侍りや云々。朝餼清涼殿の南にあり。猶禁抄に委

藏人たまたか 勅物云。源隆長保二年正月廿七日藏人隆興守從四位下源忠男あつまりてかりさわぐ 内裏の犬を狩には藏人瀬口などあつまる云々。禁抄抄云。犬狩藏人承仰下知。所業瀬口瀬口帶弓箭

【増】うしろべたし うしろめたしといふに同ト。めさへは往來する言

たきぐちなぎとして 藏人の下に侍るもの云。禁抄抄云着布衣一旦暮候。運所勅使等公役隨仰奉仕云々。藏原抄云堪武勇之輩可補之云々。員廿人云々

頭辨 誰ともしらす。但與に行成辨をいへる所有

【訂】三四日になりぬひるつた。こは三四日になりぬひるつたさあるべき所。下に「あはれがりなごする夕つかた」にあるにむひ合せて見るべし。必るも脱たるなるべし。又下文に「あらぬものいひなしてやみぬるつとめて」とあるも皆昭應の文法なれば。かたぐるもすを添て解すべし

猫をおどしていひしに犬は騒ぎ思ふ。猫シレモノ犬をさしていふに。まことかどてしれものはしりかゝりたれば。おびえまどひてみすのうちにいりぬ。あさがれひのまにうへはおはします。御らんじていみしうおどろかせ給ふ。ねこは御ふどころにいれさせ給ひて。をのこどもめせは藏人たつたかまありたるに。此おきなまらうちてうじて。いぬ島につかはせ。たゞいまとおほせらるれば。あつまりてかりさわら。うまの命婦もさいなみて。めのとかへてん。いどうしるべたしとおほせらるれば。かしこまりて御前にも出ず。いぬばかり出て。たきぐちなぎとしておひつかはしつ。あはれいみしくゆるぎありきつるものを。三月三日に。頭辨。柳受してせられたはふれなるべし。の、花かざしにさへせ。さくらこしにさへせなどしてありかせ給ひしをり。かゝるめ見んとはおもひかけけんやとあはれがる。あもの、をりはかならずむかひさふらふに。さうくしくこそあれなどいひ

なにその犬の 翁丸とばふらで何の犬ぞき清少なごの思へるさま

よるづの犬ども 友の犬もなしむさま

みかはやうと いやしきもの云。源氏すまの巻にある詞云。禁抄抄に御聞人と云々あり

たいたがされふま 【増】藏人忠隆。同買房の

いらいふ心云

いらいふ心云 幸の字なり。やうくにしてないふ心云

あはれま 翁丸といふを略してよびつけたる詞かすぐにいふ也。翁丸かとうたかひたる詞也

かゝるいぬやは 彼おきな丸か外にかやうの犬はここの比見ゆす也

右近ぞ見しりたるあと 右近内侍とある同人なるべし。榮花物語第五浦々の別の巻に。此中宮御子内親王を生給時。御湯殿には内よりのおほせ事にて。右近内侍ぞまかりた

て三四日になりぬ。ひるつかた犬のいみしくなくこそすれば。なにその犬のかくひさしくなくにかあらんときくに。よるづの犬どもはしりさわぎとふらひにゆき。みかはやうとなるものはしりきて。あないみし犬を藏人一人たいたがされふま。死の字

りたるとてうじ給ふといふ。心うのこぞや。おきなまらなり。たぐたかおねふとなんうつといへば。せいしにやるほどに。からうじてなきやみぬ。しにければ。門のはかにひきすてつといへば。あはれがりなどする夕つかた。いみしげにはれあさましけなる犬のあびしけなるがわな、きありけはあはれまらるか。かゝるいぬやはこのころは見ゆるなどいふに。おきなまらとよべとみへにも聞いれず。それぞといひ。あらずといひ。くちうち申せば。右近ぞ見しりたる。よべとてしもなるを。まづとみのことゝてめせはまら

正月一日三月三日 是より別の事也。前にも元日上巳の事はいひしかど。こゝは又五節供のありさまをつかいていふ。

五月五日はくもりくらし 黄梅の時節なり。ち。さすがに降ざるを愛したる。雨少しふりて菊の 三休時云。菊爲三重陽。雨開。事文類聚云。重陽日陰雨。鶴島前泥拍社。龍山會上水平。おほひたるわたなど。菊のきせ緒。源氏幻卷六。九日わたおほひたる菊を御らんて。弄花云。此古事可動。世修問答云。一條冬真公御説。菊に結を替する事。いつの比より始るとも見え侍らす。只菊をもてあそぶのあまり寒霜をふせがんとこのころさしとおほえ侍る。

「増」藤井高尙云。菊のきせ緒は寒霜をふせがんの料にはあらず。匂ひ香をうつしとるためなり。此事松の落葉にいへり。

よろこびそする 是より又別段。葵慶さて昇進などの後。拜賀の事なりと年中行事符合の註にあり。

うしろをまかせて 醫をひく事なるべし。日本紀神功皇后紀に引の字をまかせてつづたり。保は下屬の尻也。むかしはつづたるを。替する時頗ひあるによりて。切はなして替云々。

やうになりなき。なをあはれがられてふるひなき出たりしほどこそよにしらすをかしくあはれなりしか。人々にいばれてなきなどす。

正月一日。三月三日は。いとうらゝかななる。五月五日はくもりくらしたる。七月七日は。くもり夕かたハはれたるそらに。月いとあかく。ほしのすがた見えたる。九月九日は。あかつきがたより雨すこしふりて。菊の露もこちたくそれたる事。ほち。おほひたるわたなどいなくぬれ。うつしのかももてはやされたる。つどめてはやみにたれど。猶くもりてやいもすればふりあちぬべく見えたるもをかし。

よろこびそうすることをかしけれ。うしろをまかせて。しやくどりて。御前のかたにむかひてたてるを。はいしよたうしざわらよ。

五段

しやくどりて 笏なるべし。冠式四十一云。凡五位以上通用笏白木笏。前職後直六位以下官人用。木前推後方。名目録云。段賀祭殿時用之。笏コツノ型アリ。日本子細アリ。テシヤクといひ替ふ云々。釋名云。笏也。君有教命及所問。書其上。備忘也。御前のかたにむかひてたてるを。懸案此をの字衍文歟。御前にて拜賀の人を又拜賀するといふやうにきこゆる。おほつなし。訂は助辭也。此をば文にも歌にもあり。然して替俗言の目も同。清水演道は此をわがの意にせいへぞ甚非之。

はいしよたうし 拜舞踏。よろこび申す時拜舞する事。拾芥抄云。再拜置。笏立左右左取。笏小拜立再拜云々。堀川百首慶賀の狂。いしはきを松のさえたに折かけて左右左までやふしまるぶらん。後。宗監註云。兵衛の官の人の四位によろこび申す云々。

さわらよ 例の書すたる文也。

いま内裏の 勅物云。今内裏一條院長保元。六月十四日内裏勅。十六日行幸女院御所。也。同年十月十一日行幸新造内裏。この新造をいまだいりさいふなり。

北のちん 殿殿陣をいへり。朝平門北西と。芥にあり。

勅中將 勅物云。勅中將成信。

定證僧都 勅物云。長保二年三月十七日。以定證僧都。勅物云。長保二年三月十七日。以定證僧都。勅物云。長保二年三月十七日。以定證僧都。勅物云。長保二年三月十七日。以定證僧都。

「訂」近臣按に。奥本定證僧都云々。今本百四十八段うちとくまどきもの末に。いれるは。既之。季吟もうたがひおけり。此所に入るをよしとす。

山しなてら 興福寺をいふ。藤原不比等の建立。元亨轉書に委。

よろこび申 定證興福寺の別當に補せられて拜賀の事。

近衛ついに 成信朝臣左近衛中將なれば。百寮副要抄二條長基公説云。近衛府は君をちかくまもり奉る武勇の職也。左右衛門左右兵衛をば外衛といふ。是は宮門の外を警固する職也。近衛は門内を警固する。なご其えだあふきは。前江成信の給ひしたはふれの詞をうけて。此度定證に其枝はもたせ給はぬ。いふ。

改増。えだあふきは。枝扇にて。親骨の上部に。下向に枝を出して。腰に。材料に作りたるものなり。親骨は木竹等にて造る。附圖参照。

このくれ山 万葉集。古能久禮山。家持。このくれ山。万葉集。古能久禮山。家持。このくれ山。万葉集。古能久禮山。家持。このくれ山。万葉集。古能久禮山。家持。

木の晴山 清少納言云々。是は。奥之。是にや。

小倉山城。大和春日にあり。押ならす。いわずれすの山。入雲抄に。みかさ山。このくれ山。わすれ山。いりた。

遊城地名にあらず。清少の撰れるなるべし
わすれ山 未勅但八雲御抄にわすれ山。〇
奥にありこれに〇

〔増〕古今六帖に「みちのくあふくま川のあ
なたにや入わすれすの山はさかしき」
のせやま

〔増〕古今に「都いでいけふみかのほらいつか
川かは風塵し衣せ山」
ひはのやま

濃按ひえのやまの寫し誤り歟
かたさり山 八雲にもありて國未し知。臨に附
おきけるにひさは方去さいふ名に付て人に
所をさり退きたるやうなれば。だばふれい
へる山

いつはた山 五輪山御體之
〔増〕いつはた山とてへる山は接近してある
山にや。新古今別に伊勢の歌「忘れなんよ
にもこしちのかへる山いつはた人にあはん
さすらん」〇〇後拾遺新上家隆「いへる山い
つはた秋さ思ひこし雲の雁も今やあひみ
ん」なごよめり

のちせの山 若狭なる後瀬のやまさうたによ
めり
まこの山 鳥籠山沓江之
わか名もちすなごみかこの 古今集御遺書。
あめの帝あふみのうれめに給へるうた「大
上のまこの山なるいさや川いささこたへて
我名もちすな」あめの帝は天智天皇と古
今日録にあり。清輔袋双紙には聖武天皇可然云々
あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

るべし。たむけ山。みわのやまいとをかし。おとば山。
待かね山。玉さか山。耳なし山。すゑのまつやま。かつ
大和之 美濃御山瀧列之 梓山城と八雲にあり 飛騨
らぎ山。みの、おやま。はくそやま。くらる山。さびの
あかやま。あらし山。さらしなやま。をはすて山。をし
は山。あさやま。かたし山。かへるやま。いひせや
ま

も則不知 鹿背山山城之 未勅
ちやま。かせやま。ひはのやま。かたさり山こそ。誰に所
おきけるにかとをかしけれ。いつはたやま。のちせの山。
〔増〕山山城之 近江之
かさざり山。ひらのやま。どこの山はわが名もらすなど
みかどのよませ給ひけんいとをかし。いぶき山。あさく
らやまよそに見るらんいとをかしき。いはた山。おほひ
れやまもをかし。りんじのまつりのつかひなど思ひ出ら
るべし。たむけ山。みわのやまいとをかし。おとば山。
大和 山城

大和 山城
待かね山。玉さか山。耳なし山。すゑのまつやま。かつ
大和之 美濃御山瀧列之 梓山城と八雲にあり 飛騨
らぎ山。みの、おやま。はくそやま。くらる山。さびの
あかやま。あらし山。さらしなやま。をはすて山。をし
は山。あさやま。かたし山。かへるやま。いひせや
ま

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

あさくら山 筑前に朝倉山あり。攝津に朝暗山あり。〔増〕筑前の方よりし。六帖に「むかしみし人をそ我はよそにせし朝くら山の雲はるかに」
りんごのまつりのつかひ 石清水の臨時祭三月申午日也。江次第第六日臨時祭越三天慶四年四月廿七日「平將門亂逆報喪也。又曰舞人自ら上退到竹道
東二次右祖進舞三采子。舞人自ら下退大比禮後使舞人退出。是即此まつりの試樂にも當日にも舞人まひをはりて。大比禮といふ物をうたひ侍る事

〇増訂枕草紙春曙抄卷之一

六段

七段

八段

あるによりて。おほひれ山さいふにりんごのまつりの使ひなご思ひ出るさいふなるべし
音羽山 山城山科にも清水の上にもあり。ひえのやまにもあり
くらわ山 位山飛騨之 ぎびのなのかま。吉備中山備中。あらし山 山城之
いもせ山 録音山。八雲御抄に伊紀國とあり

ゆづるはのみね 霧津の國なり。標の嵩さい
ふにおなし
あみだのみね 山城今の豊國神社の上にあり
公任朝臣「今よりはあみだの峰の月かけを千世の坂までたのむべき哉」
いやたかのみね 録ルノ 金葉集に。大嘗會法華經御申國顯高山あり。又玉葉集に。寛平四年大嘗會法華經御申國顯高山あり。これらの山の峰をい
へるにや

そのはら 曾原信記之
なしはう 大和に奈志原あり又梨原もあり
兩所同國之
うなぬこがはら 未勅六帖二山上憶良「名
にしおへいづれもかなし朝なくなて
あふしうなるこがはら」

つばいち 樺市之。具谷に近き今たばいち
さいふ所とぞ。其外の所々發尋せ。源氏玉
つちの君長谷にまうで給ふにも樺市といふ
所に四目さいふ巳の時ばかりにける心ち
もせていきつき給へりとあり。長谷の近所
にて觀音の灯明の事など沙汰する所とみえ
侍り。花鳥餘情云。小右記云。正暦元年九
月八日參長谷寺。午時至樺市。令と交。易御
明灯心器等云々

原は
竹原大和之 瀬原山城之 朝原大和葛下郡
たかはら。みかのほも。あしたのばら。そのはら。はぎ
に紀伊云々 粟津原近江之
はら。あはづのばら。なしはら。うなるこがはら。あべ
原津の國之 篠原八雲加賀云々。沓江ニ也
のばら。しのばら」

市は
長市大和之
たつのいち。つばいち。やまとにあまたあるなかに。長
谷寺にまうする人の。かならずそこにとままりければ。觀
音の御えんあるにやと心ことをるなり。あふこの市。し
かまの市。あすかのいち」

「増」万十二「紫にはひさすものをつげ市の八十のちまたにあへるこやたれ」とあり。弘長云。宜長翁は津島市にて地名には非るべしといはれたり長谷寺に 河海云。長谷十一面観音之利生道場也。十一面二丈六尺。文武天皇御宇。皇道立入道三立之清道仙人是也。神龜四年。聖武天皇。公家被遣立堂一字云々。未勅大和物語に。おふさのむまやあり。自所にや道而可憐。増「イ本にはなふささあり。さて大和物語にいはれたる三河國小島のおふさのむまや。活本にはさもたなし。おふさの市さあり。あすかの市。飛鳥市八雲御抄に大和云々。

九段

いかなるその心を いかに深き心を見えて 賢きといふ名につぎけんこふ ないりその淵 未勅八雲にも出て國は見えず。爲尹千首「つれなくい身をしようめんさか かつよのそなたの月よないりそのふち」 あをいろの淵 未勅八雲同前 藏人などの身にしつづく 六位藏人青色の袍 着る心にや。青色といひ麴麴の袍也。是天子の御衣のちろしを藏人ハ着するさ。藏原抄云。六位藏事又藤三紫色。至藤原一者着之。鹿嶋一申三下御服之儀也。時雖下藤原之云々。職事とは藏人の心。いふら 稻淵大和也。増「續古今集二源具氏」しをふる深きいかにあふこさは猶いなふちの淵まされとや。後表一。ながくなるいなふちの淵にさり給ふなるべし。など見たり。

淵は

入雲にも見ええず かしこふち。いかなるそのこの心を見えて。さる名をつぎけ んどいとをかし。ないりそのふち。たれに。いかなる人の 淵にないりそと敷しやうなれん。 あをいろの淵こそまたをかしけれ。藏人をしへしならん。例の書拾し文法云。 人などの身にしつづく。いさふち。かくれのふち。の 入雲同前 未勅 ぞきのふち。玉淵」

十段

水うみ 近江の湖水。金吾のうみ。越中の布 施のうみ等あり。 評「活本にはわたりはの前にみさいまはの一段ありて前後せり。 しらすかの渡 志賀須香渡三河云。 増「源順集に「行かよふ舟はあれどしらす かのわたりはあともなくそありける」

海は

水うみ。よさのうみ。かばくちのうみ。いせのうみ。 わたりは 入雲に越中云々。 しかすかの渡り。みつはしのわたり。こりすまのわたり

十一段

そすまのわたり 未勅八雲御抄にも見ええず 出すべきに非ず。 増「源順集に。こりすまの渡は。即ち須賀の邊なるべし。さらは上文の水のくれ山の顛にて。こりに 出すべきに非ず。 字云云。帝王所御日山陵。帝の御 墓云。 うくひすのみまき。延喜式廿一階殿寮に。 遺陵近隣さまく侍れど此名見え。八雲 にも。しらすせ給はす。但仁徳天皇を百舌鳥 野の陵に葬れり。此百舌鳥にうくひすの訓もあればにや。増「万葉抄に云。大和に鶯の園といふ所あり。其邊に聖仁天皇の御陵あればそのとにや かしはらの 延喜式治部式云。柏原陵平安宮御宇桓武天皇。在山城國紀伊郡下畷。 あめのみまき。是も延喜式に見えず。若あめのみまきの御陵にや。しらすは天智天皇の山科の御所なり。

みまき

うくひすのみまき。かしはらのみまき。あめのみ まき」

十二段

近衛御門 陽明門をいふと拾芥に見えたり。 神樂の早歌に。このあのみかにに申すおと 一つとあるも。醍醐皇按抄に陽明門云。 二條一條よし。二條院の二條の北塔河の 東。天層の母后の御領と拾芥にあり。一條 院は。一條の南大宮の東二町。藤原公の院。 又法住寺大區爲光の家云々。 せめぎのいみや。正親町の北。忠仁公の家と拾芥にあり。又藤原の后もおはすゆゑにせめぎのいみやといふにや。 せかろん。原本せかろんといはるし。今其本に徳へり。清和院なり。正親町の南。京極の西。清和の母后の御在所と拾芥にあり。 ずがのうのん。拾芥。勸修寺小路の南。鳥丸の西一町。道真公の御所。或ハ藤原是善の家也。當時歡喜寺と號す。北野祭の日神氏此所に來て批 把を取て神に供す云々。 せいせいあん。本は冷然院なりしを。火災によりて紫の字を改めて冷泉院といへり。拾芥に大煩御門の南。堀川の西。嵯峨の帝の御宇に。此院累 代の後院。弘仁亭云々。 宗雀院。源氏にては。すさくわんさよめり。拾三條の北。朱雀の西四町。四條の北西坊城の東云々。増「活本朱雀院なし。 せうわん。洞院にや。 小野宮。大炊御門の南。鳥丸の西。惟高親王の家。定頼これを傳領す。清和公も傳領之云々。 ころばい。紅梅殿なり。拾五條坊門の北。町の西。北野御子の御所。或ハ天神の御所云々。

すくは

近衛御門。二條一條よし。せめぎの宮。せかろん。す がはらのん。れんせい院。朱雀院。どうるん。小野宮。 こうはい。あがたのるど。どう三條。小六條。こいでう」

十三段

近衛御門 陽明門をいふと拾芥に見えたり。 神樂の早歌に。このあのみかにに申すおと 一つとあるも。醍醐皇按抄に陽明門云。 二條一條よし。二條院の二條の北塔河の 東。天層の母后の御領と拾芥にあり。一條 院は。一條の南大宮の東二町。藤原公の院。 又法住寺大區爲光の家云々。 せめぎのいみや。正親町の北。忠仁公の家と拾芥にあり。又藤原の后もおはすゆゑにせめぎのいみやといふにや。 せかろん。原本せかろんといはるし。今其本に徳へり。清和院なり。正親町の南。京極の西。清和の母后の御在所と拾芥にあり。 ずがのうのん。拾芥。勸修寺小路の南。鳥丸の西一町。道真公の御所。或ハ藤原是善の家也。當時歡喜寺と號す。北野祭の日神氏此所に來て批 把を取て神に供す云々。 せいせいあん。本は冷然院なりしを。火災によりて紫の字を改めて冷泉院といへり。拾芥に大煩御門の南。堀川の西。嵯峨の帝の御宇に。此院累 代の後院。弘仁亭云々。 宗雀院。源氏にては。すさくわんさよめり。拾三條の北。朱雀の西四町。四條の北西坊城の東云々。増「活本朱雀院なし。 せうわん。洞院にや。 小野宮。大炊御門の南。鳥丸の西。惟高親王の家。定頼これを傳領す。清和公も傳領之云々。 ころばい。紅梅殿なり。拾五條坊門の北。町の西。北野御子の御所。或ハ天神の御所云々。

御の除けの久にふるさいふに付て清少のおもへるめ
にぞちとせもあらまほしけなる御ありとせなるや

はいせんつかうまつる人のをのこもなごめす
す 御膳の事すみて膳の女房などすべり
し御膳を膳人などにわたさんごてめしよす
る

ほどもなくわたらせ給ひぬ 主上の御膳す
て又中宮の御たへ渡御せよ。禁抄に。
立著之膳、二本膳、二本所とあるさま
めはそらにのみにてた。清少の膳するに
心もなくて只目をあけて君の膳を見尋る
ま

ほどききめはなちつべし 君の膳を見て
は前に干させもあらまほしさまもり奉りし
中宮にも目をなつべしと。干させも
いへる事を遠ざきといふにや

訂ひさつたつ 原本にはひさつづいさ
り。今異本によりて改めつ
おもひめぐらさて 原案なくとて
なにはつても何も 難波津にさくや此花冬
り今ハ春へさ吹や此のはな。此書を古今序
に手習ふ人の始めにもしけるさあれば。童
もしれる哥なれはさやうの事にて何にて
もか。れよと大納言殿のせめ給ふ

増源氏若衆の巻に「まだなにはづつたには
か。しうもつづけ給はず」とあり
上らふ二つ三つ 中に上議の女房達の先書て
清少にも是にかけ給せよと
さしふればよひは 此書古今の調書に。給
殿の前の御前に花がめに標の花をさいせ給
へるを見てよめるさあり。忠仁公の哥と。
御むすめの後の御さかりを悦びてよみ給へ

るなり。今清少も花瓶の標の中宮の御まへ
にあるに付て思ひよせたるうへに主上の御
せにてかく書なれば。君をしと書かへたる
誠に面白く侍にや前の詞に中宮の御ありさ
まに侍ふ人ふと思ふ事なき心するといひ
主上の御事を目はそらにのみにて只おほし
ますをのみ見奉ればなどありしも心をつく
べし

手のおしきよき折にあはざらんをも
殿上人どもの遠慮するさまを御覽じて。手
跡の善悪の折にあはねをも御かまひなし
となり

只いまの關白殿の三位中將
中宮の御父中關白道隆の御手なるべし。圓
融院の永観二年正月七日叙從三位右中將如
元と公卿補任にあり。一條院の正暦元年に
關白し給へば只いまの關白殿と中宮の御詞
なり

しほのみついつもうちの
萬葉の哥なり。いつものうちのとはいつも
くといはん序なり。是は戀の哥なるをた
のむはやと書かへて天子をとこしなへに頼
み奉る心をのへ給へるなりはやは者也なり
〔訂〕演按この歌萬葉になし。萬四ノ五丁に「川
上のいつもの花のいつものいまもませ我せ
子ときしけめや」と云歌あり。此歌を少
し轉じたるにや

わかからん人ばさもえかく
清少此時卅歳にも過たるにや。長保三四年
の比の事を榮花物語にかきし所に。中宮の
御妹淑景舎の御事をいふとて「五せらの所
々のありさまなどいひかたるに付ても。清

清少の書たる古哥なり
としふればよはひの老ぬまかへあれど花をし見れぬ
物おもひもなし。といふことを君をしみればとかきな
たるを。御らんじてた。此心はへどもゆかしかりつる
ぞとおほせらる。ついでに。ゑんゆうゑんの御時。御前にて
さうしにうたひとつかけと殿上人におほせられけるを。
いみしうかきにく。すまひ申人々ありける。さらに手の
あしきよき。哥のをりにあはざらんをもしらじとおほせ
られければ。わびてみなかきける中に。只いまの關白殿の
三位の中將と聞えける時
三位中將の書給ひし古哥なり
しほのみついつもうちのいつものく君をばふかく
おもふはやわが。といふうたのすゑを。たのむはやわがと
かき給へりけるをなんいみしくめでさせ給ひけるとおほ
せらるゝも。すゝろにあせあゆる心ちぞしける。わかから
ん人のさもえかくまじきことのさまにやとぞおぼゆる。

少納言など出合てせうの若き人などに
もまさりてをかしくほりかなる云々。此
時分にも若き人にもまさりてとあるは少年
れびたる事しられ侍り
宰相の君 中宮の官女の上臈と見えたり。
おくに宮小路の左大臣の御孫とあり。左衛
門佐重輔の女なり
さやけにいくおほせ事をばえなく
中宮の仰らるゝ事をさやうにけにいくい
ぬなど何の由もなきやうにもてなすべき事
かはといふなり
中にも古今あまた あるが中にも古今はよ
くおほえぬべき事ぞとの儀なり
村上の御時 六十二代天曆の帝の御事なり。
延享帝第十四の皇子。御母は皇后宮程子。
昭宣公の御むすめなり。慶保四年五月廿五
日にかくれさせ給ひて六月四日に村上の山
陵に葬り奉りしゆ。村上の帝と申なり
せんようでんの女御
宣徳殿女御芳子榮花物語に委ふるせり
小一條左大臣
師尹公の御事なり。貞信公の五男。母は源
頼子。寛平の御むすめなり

れいとよくかく人も。あいなくみなつゝまれてかきけ
がすなり
給ひて。歌どものもとをおほせられて。これがすゑはいか
にも本来と有
にとおほせらるゝに。すべてよるひる心にかゝりておほ
ゆるもあり。げによくおほえず。申いでられぬ事はいかな
る事ぞ。宰相の君ぞ十ばかり。それもおほゆるのは。まいて
はとなり
五つ六つなどはたゞおほえぬよしをぞけいすべけれど。
さやけにいくおほせ事をばえなくもてなすべきといひ
くちをしがるもをかし。あると申す人なきをば。やがてよ
のみ給へばまことに驚し歌なりしとなり
みつゞけさせ給ふを。さてこれはみなありたる事ぞかし。
などかくつたなくはあるぞといひなげく。中にも古今あ
またかきうつしなどする人はみな覚えぬべき事ぞかし。
村上の御時せんようでんの女御ときこえけるは。小一條
の左大臣殿の御むすめにおはしましければ。たれかは志

一には
〔訂〕演云一には此はイチニハとよむべし。
第一にはの意なり。春曙抄ひとつとよめる
は非なり

きんの御こと
琴は七絃なり。河津云。字ハ神農作也云々。
元ハ五絃宮商角徵羽是也。加文武絃合七
絃也。琴操云。長三尺六寸六分象三百六
十六日。前廣後狹象三尊。上圓下方象天
地。五絃象五行。
御ものいふなりける日
禁秘抄云。御物忌之時。惣不出。御他殿會中。
諸事於三殿中。有之云々。又云。以御造。簡三
分計指。御冠纏。御放水鳥時付。左御袖。書紙
白紙也云々。物忌とは。迦毘羅衛國の桃林
に住鬼神の名なり。此鬼神の邊へは惡鬼よ
らす。其故に物怪惡夢の時。此鬼神の名
を書て柳の枝忍ふ草などに付て冠にも襪に
もつけてこもりおほすと。猶河津抄に

ごいしえてかすをおかせ 女御の覺えたま
はは所々もあらは。其數をとらせんとて恭

りきこえざらん。またひめきみにおはしける時。ちゝおと
どのをしへ聞えさせ給ひけるは。一には御手をならひ給
へ。つきにはきんの御ことを。いかで人にひきまさんとお
ぼせ。さて古今の歌二十卷をみなうかへさせ給はんを。御
がくもんにはせさせ給へとなん聞えさせ給ひけるとときこ
皇の聞召てなり
しめしおかせ給ひて。御物いみなりける日。古今をかしく
てもてわたらせ給ひて。例ならず御きちやうをひきさて
させ給ひければ。女御あやしとおほしけるに。御さうしを
帝のなり
ひろげさせたまひて。そのとし其月なにのをりその人の
よみたるうたはいかにととひきこえさせ給ふに。かうな
帝の古今を心見給ふと心得給なり
りと心得させ給ふもをかしきものゝ。ひがおほえもし。忘
れたるなどもあらば。いみじかるべきことゝわりなくお
ぼしみだれぬべし。其かたおほめかしからぬ人二三人は
かりめしいでて。ごいしえてかすをおかせ給はんとて。き

石にて敷とれと女房達に聞えつけさせ給ふなり
 御前にさふらひけん人さへこそ 中宮の御物かたりをきく清少のおもへる心をかけるなり
 さかしてやがて末までなどは 女御の鉢なり。賢げに一首をみるし申させ給ふ事ばかりしかりなり上臈まきさまをいへりいかでなほすしおほめかしくひが事見付てをやまん 此の字は助字なり。女御のおる覺なる所を見付てなりとおかんと帝のおぼしめすなり
 御さうしけうさんして
 〔訂〕原註には。境算なり。世にけきんといふ物なり。とあるは非なり。こは夾筆とかくなり。巾三四分長四五寸に竹を以て札を作なり。一寸ばかりを残して先を割りたるものなり。多くは巻物などに用ゐるなり。見かけたる處に印にさし扱むなり。江次第巻四に委し
 なほ此事さうなくて 此古今の事を上巻ばかりこゝろみて残りを其まゝにてさしおか入はいかゝと御思しめすなりさうなくては左右なくてなり。其まゝのこゝろなりことなほぞ見給ひ合る 明日までさし給はし給はし女御の異本をも見合せて内稽古もあらんと帝のおぼしめしてなり
 おぼとなぶら 切燈籠を近くともしてなりうへわたらせ給ひてのち 村上帝の女御の御かたへ古今をこゝろ見に渡御有てのちに殿に申たてまつり 帝のかやうに心見給ふと師尹公へ人々申たるなり
 すきしく 物に深く敷寄て熱心なる心

こえさせ給ひけんほど。いかにめでたくをかしかりけん。御前にさふらひけん人さへこそうらやましけれ。せめて申させ給ひければ。さかしてやがてするまでなどはあらねど。すへてつゆたがふ事なかりけり。いかでなほすこしおほめかしくひがこと見付てをやまんとねたきまでおぼしける。十巻にもなりぬ。村上の御調なり不用なりいらざる事なり御退風のさまなりうしにけうさんして。みとのごもりぬるもいとめでたしかし。いと久きうありておきさせ給へるに。なほこのことさうなくてやまないとわろかるべしとて下の十巻を。あすにもならば。ことをもぞ見給ひあはするとして。こよひさだめんと。おほとなぶらちかくまありて。夜ふくるまでなんよませ給ひける。されどつひにまけきこえさせ給はずなりにけり。うへわたらせ給ひてのち。かゝることなんとみ給ふ事なり
 人々殿に申たてまつりければ。いみじうおぼしさわぎて。

二〇 師尹公の御事を批判の御ことばなり
 いかでさおほくよませ 村上帝は何としてさやうに古今をこゝろくよませ給ひけん
 御氣根を御感の詞なり
 むかしはえせものも 中宮の御物かたりを承りし女房の申之。むかしはさやうの女御なごにかさらず。下つたも物おぼえなごのつたを敷寄たりしと
 おひさきなくまめやかに 是より中宮の御前の人々思ふ事なげなるに付て人のむすめのなまじひの縁につかんより宮づかへさせまほしき事をいふ
 いぶせくあなづらしく なまじひの男なごもたる人はむさらしくあなづらはしきさぞ。宮仕へする心よりいへる詞なり
 内侍などにも 掌侍も。今には掌侍四人掌前二侍。相當五位などなり。禁裏抄には掌侍六人正四人權自上古二有之此内以二内侍以爲三宮當二種日二爲三二也下界
 げにそもまたさる事ぞかし 實にこれも尤ぞと。宮仕人は人にも見られて心にくちらぬもあればこぼし敷事にも男の思ふも理ぞと
 上臈部 公卿をいふ。位は三位以上。官は宰相以上をいへり
 女房のすんざ 傍置の女房のつかふ従者なり

御さうしけうさんして。みとのごもりぬるもいとめでたしかし。いと久きうありておきさせ給へるに。なほこのことさうなくてやまないとわろかるべしとて下の十巻を。あすにもならば。ことをもぞ見給ひあはするとして。こよひさだめんと。おほとなぶらちかくまありて。夜ふくるまでなんよませ給ひける。されどつひにまけきこえさせ給はずなりにけり。うへわたらせ給ひてのち。かゝることなんとみ給ふ事なり
 人々殿に申たてまつりければ。いみじうおぼしさわぎて。

なまめ 長女。八雲抄に下女也
 「増」和名抄にナサメは尊の字をかけり。長女
 之。さあり。下女中の長たる女さいふ意こ
 たびしかはら 稱名院御説にたひしかはら
 は百姓之云々
 「増」灌頂云。たびしかはらは。機瓦之殿しき
 もの。意之。元朝家集に「みぐらん玉の
 ひかりを頼むかなすにもあらぬたみしか
 はらな。さあるに同じ。かびは古語相過へ
 り
 黒川直頼云。此説よろしたびしかはらつづいし
 の約言也。たはつづの約言なり。つづいし
 は機瓦。故にたひしかはらは機瓦也。さて
 人かす入らぬほどの殿しきものを機瓦に
 たさへていふはつづのここと。こは數な
 らぬいやしきもまでこの意
 このばらなどはさしもあらすやあらん
 殿原には若隠る。事も有ればさしも見ぬ
 ともあらんされどそれを密仕して侍るほど
 は大かたみるにてあらんこ
 内侍のすけ 典侍之。相當從四位。掌同三尚
 侍。なご命に有。禁秘抄に典侍四人也。此職
 尤重公卿侍臣也。大臣子無。例大臣孫少々
 有。例など有
 すりやうの五せちなどいひだす 受領は國の
 守也。十一月中五日常寧殿にて帝王節の舞
 臺を御覽あるに。受領よりも五節を出す事
 あるを云之。河海云五節は嘗の年は公卿より
 二人。受領より二人四所之。代給には公
 卿二人受領三人五所之。五節の事江次第年
 中行事歌合註等委

する人をは。あはあはしうわろきこと思居たる男こそ
 いとほくけれ。ゆにそもまたさる事ぞかし。かけまくもか
 しこきおまへをばじめ奉り。上達部殿上人四位五位六位。
 女房はさらにもいはず。見ぬ人はすくなくこそはあらぬ。
 女房のずんざども。そのさどよりくるものども。をさめ。み
 入前に註
 ろばやうど。たびしかはらといふまで。いつかはそれをば
 仕へすればさやうの下人にも耻ぢくれず見らるゝと
 ちかくれたりし。どのほらなどはいとさしもあらずやあ
 らん。それもあるかぎりばさぞあらん。うへなどいひてか
 見られし人は心にくちす思はんもこわりと
 しつぎするたるに。心にくからずおほえん ことわりなれ
 ぞ。内侍のすけなどいひて。をりをりうちへまのり。まつり
 の祭路次の次第に内侍車といふ事もあり 面目らしき心
 のつかひなどに出たるも おもだしからずやはある。さ
 一たび典侍などやうの官女にて後に縁に付居たる人
 てこもりたる人はいとよし。すりやうの五せちなどい
 だすをり。さりともしたうひなび。見しらぬこと人にとひ
 れば五節の事もよく知おこなへ心にくささ女には宮仕させたまふこ
 きくなどはせじと。こころにくきものなり」

十四段

すまじき物 助過てつきなき物をいふこ
 「増」灌頂云。すまじきは荒廢をはたらかし
 ていふ詞にて器の原を心得べし
 「改訂」すまじきは「折にあはすして善く
 ない」又時節はついで興ない」などの意な
 り。諸注皆當らず。
 ひるほゆる犬 犬は夜のまもりをこそ用ふ
 べければ
 春のあたる 綱代は冬のほど宇治田上河あど
 に水魚をさる物之春は冷き
 「訂」春のあじろの次に万歳木にはしほすの厨
 さいふ一旬あり
 黒川春村云。河海抄卷九に。清少納言
 草子。すまじきもの。おうなのけさう。
 しほすの月夜云々。わくみゆれども本文に
 此文なし
 三四月の紅梅のきぬ 表紅うら紫のきぬ
 之。十一月より二月まで用る由一禪の御説
 也。三四月は時過し
 火おこさぬ火桶すびつ 鴨長明無名抄に
 「火おこさぬ夏のすびつの心ちして人もすま
 めす冷しの世や。さよみしを冬のすびつな
 らば猶冷しからん童女の難したる事ある
 も此双紙の心歎
 はかせのうちつゞき女子 花鳥餘情に博士
 は博達之士さいふ心云々。職員令云。大
 學寮博士一人掌下教三校經業二課。試學生
 がたいがへにゆき 方違ははづくにても
 ゆかんと思ふたの金神などにあたり又は
 臨時に天一神太白神などのふたがれば。其

すまじきもの
 ひるほゆる犬。春のあじろ。三四月の紅梅のきぬ。ちこ
 のなくなりたるうぶや。火おこさぬ火をけすびつ。うし
 にくみたるうしかひ。はかせのうちつゞきによしませ
 たる。かたがへにゆきたるにあるじせぬ所。ましてせち
 方違に懸せぬは猶冷し
 おんはすさまじ。人の國よりおこせたる文の物をなき。京の
 しるしなき。京よりの文にも物なくは冷しかるべけれと
 をもさこそはおもふらめども。されどそれはゆかしきこ
 どもををかきあつめ。世にあることをきけはよし。人のもど
 にわざとさよゆにかきたてゝやりつる文の返事見ん。今
 はきぬらんかしとあやしくおそきとまづほどに。ありつ
 りし文
 る文のむすびたるも。たてふみも。いときたなげにもちな
 しふくだりて。うへにひきたりつるすみさへきえたるを
 おこせたりけり。おはしまさるりけりとも。もしは物いみ

方へはゆかて先こかたへ行て。其方をたがへて。さて其心ざしたる所へゆく事。拾芥抄に委。中河の方たがへも内裏より源氏掃木巻。天一神ふたがりたれば。おはしまさざりけり。彼やりつるかたの人の留守なりと使のいふ。[訂]万葉本。おはしまさざりけりとも。の十一字なし。もしは物いみ云々。御物いみさ御の字あり。物忌にこもりつ。物いみさてさりいれず。物忌にこもりつ。しみ給ふさて文をさりいれぬといふ。さなり。さなりなりさむべし。しなりさいふ心。むかへにやりし人のきたりしよとおもひたる心。車は直合りにいれうしかりひき出て。車は直合りにいれしき心。又家ゆすりて。一家うちつきての心。むかしは女のもへ。むかしは女の宮つかへすかがりやて。さるべき人の宮つかへすかがりやて。役置の歌かたへばかよはでしかるべき宮へ人などつたりひつきていつかは又なたへはおもひかへらんとおもふも本意なく冷ト。[訂]いつしか。異本にわはつかしさありいへしおこせたる。乳母の今夜はえかへるまよきとて迎への使をたすかへしたるこ。女などむかふるをこまして。乳母をよびにこめさへあるにましてもふ女をよびに

とてとりいれずなどもてかへりたる。いとわびしくすま。又かならずくべき人のもとに車をやりてまつに。入くるおどすれば。さなりりと人々出て見るにくるまやどりに入て。ながえほうとうちおるすを。いかなるぞとへはけふはおはしまさず。わたり給はずとて。うしのかざりひき出ていぬる。又家ゆすりてとりたるむこのこす成ぬるいとすまじ。さるべき人のみやづかへするがりやりみやづかへ人のもへやりて。いつしかとおもふもいとほいなし。ちこのめのどの。ただあからさまどていぬるを。もどむれば。どかくあそはしなごさめて。どくこといひやりたるに。こよひはえまゐるまじとてかへしおこせたる。すまじきのみにもあらず。にくさわりなし。女などむかふるをこましていかならん。まづ人ある所に。夜すこしふけてしのびやかに門をたけは。むねすこしつおれて人出してとばするに。あらぬ

やりて。すは男の心いかならん。むねすこしつおれて。まづ人の來たりつるおかし思ふに心さきめきする心。[訂]原本けんトやあり。イ本けんざあり。後るに下文にもけんざあれば今改めつ。こやすやなどもたせて。獨結難敷などもりまじに持せて。せみごまにしほり出し。陸羅尼神元など牌のこまのやうに讀なり異本にせみごまにあり彼よりましを實聲にだらになごむむま。[訂]弘明云。此註非。せみごまはせまり聲。驗者などの一心になりて新讀する時は。聲追りて苦しげなる大空を發するをいふ。イ本なるせみごまも同意。實聲の體には非ず。あつめてれんじわたる。一門なき集て諸共に断念し居たる。真に斷つかつさて。よりましな立のけさいふ。縣召の除目。ちもくにつかえぬ人のいへ。つきなくすに望むところの受領せぬ事。つきなくすまじ。こさしかならずき聞て。これより彼受領せぬ人の家の冷じき事をいふ。此正月の除目には必任國し給はん。聞傳へて其家人など下づかさを望むもの。來て遂従するまなるべし。物まうでするまにも。彼任國し給ふべき人の物詣にも供して家人ごも下づかさを望むもの。つわしうしありく。

よしなきものゝなのりしてきたること。すまじといふ中にもかへすくすまじけれ。けんさの物のけてうすどて。いみじうしたりがほれとこやすなどもたせて。せみごまにしほり出しよみぬれど。いさかさりけもな。くこほうもつかねは。あつめてねんじゐたるに。男も女もあやしと思ふに。時のかはるまよみこま。かすたねとて。すどりかへしてあれど。けんなしやと。うちいひて。ひたひよりかみまに。かしらさなりあけて。あくびをおのれ打してよりふしぬる。ちもくはつかさえぬ人の家。ことしはかならずとまよて。はやうありしもの。どものはかくなりつる。かたるなかにすむものどもなご。みなあつまりきて。出入車のながえもひまなく見え。物まうでする供にも我もくどまありつかまつた。物くひ酒のみのしりあへるに。はつるあかつきまよ。かどて

はつるあかつきまで 除目の果る曉之。外官の除日は九日より始て臘之江次第にあり。三日おこなはるも事なるに其終りのあかつき迄也。

除日は果て公卿など退きおふこも。さきおふこは河海に隱聲サキチフとよめり隱身の聲して非常をいましむるこも。

なるものどもはさひたにもえさはず。家にあつていかに問もえさる。前司はさきの國にの前司にこそは。前司はさきの國を前の守といふ其心也。必いらふるは下部なごのたはふれてやうに任國をえぬ時は必いなるべし。たさへば今まで紀伊守の任はて。又除目につかえられたれば河内守に成給ふと答ふべきを。司をえれば紀伊の前司にこそはなり給ひたれといふま。

「増」いらふるは。原本いひふるさあり。今異本古鈔本によりて改めつ。いらふるは答ふる。まことにたのみけるもの。

「増」その人の父母兄弟妻子などをさしていふ來年のくにも。四ヶ年の任果て。來年つくべき國をかせへたつるさまで。今年こそはあれ。來年は得給はんさとのむゆな。

「増」文はいかせん。圖書はむかひの人の心なびかすは返すせぬもことわりなればすさまじいばんやうもなしと。いか。

せんさはせんかたなしの心之。うちふるめきたる人。時にあはで世にふるされたる人。時めかしき所へおこせたる也。哥よみしては。しの字たすけいひつけたるに。あつらへつたると。いニさらせたるは。さりもたせたる心なるべし。其日になりて。あつらへんやうもなき心なり。

うぶやしなひうまのはなむけ。塵糞。塵所の三ヶ夜五ヶ夜などに禊儀のおくり物する事也。源氏物語にあまたあり。うまのはなむけは。馬儀之。旅行の人に物おくることす。雲抄には。糞糞さかきり。河海抄に。御命糞。糞糞。糞糞などいへり。みなくすだまの跡なりと云々。猶風俗通に委。今女わらは端午にもてあそぶさざり花

「増」三代實錄に。陽成天皇七年は。ゆめて見えたり。又明徳往來にも見えたり。年中の悪鬼をふふ。糸所より内裏には。源氏。江次第二日。所進。卯。職人取之。結。付。置。御。懸。懸。角。柱。立。細。木。二。爲。柱。柱。木。出。五。寸。許。可。用。桃。木。又。四。方。可。削。近。代。丸。也。失。歟。尋。問。内。裏。に。か。り。に。か。ら。す。諸。家。に。も。む。し。は。相。お。く。れ。り。源。氏。浮。舟。の。巻。に。あ。り。う。ぶ。や。の。さ。わ。き。せ。ぬ。子。の。出。來。の。心。之。よ。う。せ。ず。は。不。善。也。こ。に。て。は。若。い。な。ご。い。ふ。心。之。た。は。ら。な。る。子。ど。も。の。こ。ら。に。も。此。ど。も。の。字。を。さ。な。き。孫。の。心。も。こ。も。る。べ。し。

右を告しらす音のせむ事。耳をめでての心。たくおともせず。あやしなごみ。たて。きけは。さきおふ

聲々して。上達部などみな出給ふ。ものき。に宵よりさ

むがりわな。きををりつるけすをの。など。いとものうけ

にあゆみくるを。をるものどもはさひだにもえさはず。外

よりきたるものどもなど。殿は。何にかならせ給へるな

ごどふ。いらへ。に。な。の。せん。じ。に。こ。そ。い。か。な。ら。ず。い

らふる。まこと。に。た。の。み。ける。もの。は。い。み。じ。う。な。け。か。し。ご

おもひたり。つとめて。に。なり。て。ひ。ま。な。く。を。り。つ。る。もの。

やうく。ひ。ど。り。ふ。たり。づ。す。べ。り。出。ぬ。ふる。さ。も。の。よ。さ

もえゆきはなるまじき。來年のくにも。手ををりて

かぞへなどして。ゆるぎありきたるもいみじういとほし

うすさまじけなり。よろしうよみたりとおもふ哥を人の

もとにやりたるに。返しせぬ。けさうよみはいかがせん。そ

れだにをりをかしようなどあるかへりごせぬは心おとり

す。又さわがしうときめかしきところ。うちふるめきた

る人のおのがつれと。いとまあるまに。むかしおほ

えてことなる事なき。哥よみしておこせたる。物のをりの

あふぎいみじと思ひて。心ありとしりたる人。いひつけ

たるに。其日になりて。思はずなる。なごかきてえたる。

うぶやしなひ。うまのはなむけなどのつかひに。ろくなど

どらせぬ。はかなきくすたさうづらなど。もてありく物な

ごにも猶かならずとらすべし。思ひかけぬこと。にえたる

をはいと興ありと思ふべし。これはさるべきつかひごと

心ときめきしてきこるに。たになるは。まこと。に。す。さ。ま。じ

きごか！

むことりて四五年まやうぶやのさわぎせぬところ。かど

かなる子どもあまた。ようせすは。うまごなど。も。は。ひ。あり

きぬべき人のおやどちのひるねしたる。かたはらなる子

共の字。さびしく冷しと。

孫をもつべき人の心。

古めきたる哥なる。祭物見などに持へ。イニ必うしてんさおもふ人に。イニさらせたる。心に。外に。か。ら。の。こ。も。に。接。ワ。ア。ン。シ。ナ。禮。記。に。あ。り。彼。使。者。を。え。ん。さ。お。も。ひ。し。ひ。う。ぶ。や。し。な。ひ。う。ま。の。は。な。む。け。な。ご。の。つかひに。ろく。な。ご。ど。ら。せ。ぬ。は。か。な。き。く。す。た。さ。う。づ。ら。な。ご。も。て。あ。り。く。物。な。ご。に。も。猶。か。な。ら。ず。と。ら。す。べ。し。思。ひ。か。け。ぬ。こ。と。に。え。た。る。を。は。い。と。興。あ。り。と。思。ふ。べ。し。こ。れ。は。さ。る。べ。き。つかひ。ごと。心。と。き。め。き。し。て。き。こ。る。に。た。に。なる。は。ま。こと。に。す。さ。ま。じ。き。ご。か！

十五段

れおきてあぶるゆ 腹おきには湯あぶる事
よからぬ物なればすまじき事
まはすのつごもりの長雨 元日までも晴まし
きかきつきなく冷しき事
一日ばかりのしやうとんの 織に一日の精
進を懈怠はつきなき心
八月のしらかされ 自重は四月朔日更衣の
衣なるに八月にはつきなき事。寶治百首
に後成痴哥「夏くれれば衣がへして山がつの
卯木垣根もしらびされなり
たゆまるゝ物 懈怠せられ退屈せらるゝ心
さうじの日のおこなひ精進の日の勤行は懈怠
すまじき事なればかへりて物うくたゆまる
るなるべし
日はほきいそぎ 日敷造くかされたる月び
は退屈せらるゝ心

十六段

家の北おもて 南面を晴の房とするゆゑ北
面はさまでつくろはぬ心
あはしくしき女 淡々心ふかいらぬ物
はあなづりやするべし
にくき物 此一段清少の筆にまかせたるす
さびながら 自他的心づかひになるべき事
おぼし。心をつけて見侍るべし
いそぐ事あるなりになびこさる 急用あ
る折に長物贈する客人
のちになどいひても 只今は急用あれば後
に緩々かたらんなどいはんをさ

十七段

すゞりにかみのいりて
【訂】原註に紙と紙と雨説ありしたれど紙
の入るとはいかゞあらん。こは落葉の入り
たることかみべし。雪大船に爲家船の雪
「するすみにまつはれかいるおちかみのく
くにもものうらさきもうし。さあるは壁さ
いふ題にてよまれたる哥云。よくこいの意
にかなへり
れいある所にはあらで 常に居る所には
者のあざる
からうして 幸の字云。やうくにてなご
云こゝろとおなす
ものいけにこらす 困也。日比物のけ調伏
し草臥たるにや 座するさびしくねふる
云。ねふるこゝろは能羅尼などむ登のねふ
たげなる云
なんてう事なき人 無河原事也。さした
る學問故實もなき也。いせ物語になでうこ
さなきさへるは。講すべきなき心にて
ほめたる徳云々。此草紙の心さばはる
なるべし
いつかはわかかなる人などのさはしたらし
若き人などのさやうのふるまひはせす
也。若き人もすまじきにはあらねども若
人は物に恥かしげなくふたしなみなるもの
なればいふ也
かもさたまらずひろめきて 座するさびさ
しく居るこりたる也。傍若無人のさま也
いひかひかきものいきはにやとおもへど
いやしきものいかなるかとおもへど
との心也

○増訂枕草紙春曙抄卷之二

どものこゝちにも。おやのひるねしたるはよりどころな
くすさまじくぞありし。ねおきてあぶるゆははらだし
くさへこそおほゆれ。しはすのつごもりのなが雨。一日は
かりのしやうじんのけだいとやいふべからん。八月のし
らがさね。ちあへず成ぬるめのは
乳のたらの事
たゆまるゝ物
さうじの日のおこなひ。日はほきいそぎ。寺にひさしくし
もりたる

人にあをづらるゝ物
イニの一句なし
家のきたおもて。あまり心よきと人にしられたる人。とし
一句なし
おいたるおきな。又あはしくしき女。ついでちのくづれ
にくきもの
いそぐことあるをりに長ごとするまらうと。あなづらは
しき人ならば。のちになどいひてもおひやりつべけれど

も。さすかに心はづかしき人いとにくし。すゞりにかみの
いりてすられたる。又すみのなかに石こもりてざし
どきしみたる。にはかにわづらふ人のあるにけんさもど
むるに。れいある所にはあらで。ほかにあるたづねありく
ほどに。まちどほは久しきをからうしてまちつけ。よる
こびながらかちせさするに。此ごちものけにこうじに
けるにや。あるまゝにすなはちねふりごゑにたりたるい
どにくし。なんてうことなき人の。すゞるにえがち物い
いふなるべし
たういひたる。火をけすびつなごに手のうらうちかへし。
しはおしのへなどして。あよりをるもの。いつかはわかや
かなる人などのさはしたりし。年老たる事。うたてき心
こそ。火をけのはたにあしきさへもたけて。ものいふまゝ
にあしすりなどもするらめ。さやうのものは。人のもとに
きて。あんとする所をまづあふぎしてちりはらひすてよ。

あもさだまらずひるめきて。かりきぬの前下さつしきさまにまく

りいれてもあるかし。かゝることはいひかひなきもの分際

きばにやとおもへど。すこしよろしきもの此等清少のまのあたり見し事なるへし式部大夫す

るがのぜんしなごいひしがさせしなり。又さけのみて。ああまき

りさくちをささり。ひけあるものはそれをなやて。さかづ

き人にとらするほどのけしきいみしくにくしとみゆ。又助

のめなごいふなるべし。身ふるひをし。かしらふり。くちわ

きをさへひきたれて。わらはべのこうどのにまありてな

どうたふやうにする。それはしもまことによき人のさしさやう

給ひしより。こゝろづきなしとおもふなり。物うらやみし此一章實に人の思ふべし給ひしと也

身のうへをけき。人のうへいひ。つゆばかりの事もゆかし

おりさかまほしがりていひしらぬをほえんじそしり。又

わづかほきよわたる事をほ。われもとよりしりたる事の

やうにこと人にもかたりしらべいふもいとにくし。物き

式部大夫 式部丞の叙爵したる也。式部丞

は相當六位なるか玉位にありたるをいふ

也。職原少の式部の所丞に云當省井氏部丞

即之三省丞。必可給。舊者所任也云々

あかき口をさくり。イニあめきあり。さ

けのみてわめく事にや。物ウツキ。暗いへ

くちわきをさへひきたれ。群たる人にある事

そ口するまなるべし。群たる人にある事

也。わらはべのこうどのに。そのかみの童謡な

るべし。こうどのに。國府殿にや。國司など

をいふべし。増「源按。うたふは説にてわらはべの國府へ

まありてうたへことする如く。わけもなき

とにあらそふはまひしれたる人のまある

べし。又かうとの守殿か國の守をいふか。

意は位高き人の職つかしからずかゝるふる

まひをせしと也。まごによき人の。前に式部大夫駿河の前

司みでいひがさせしといひしなうけての

いひしらぬをばえん。忽也おのがえし

わづかにきわたる事をば。此頃すこし聞

ふれたる故實古語などを。

しらべいふ。蜀云にや其事を穿鑿する事な

るべし。

からすのあつまりて
恐もにくき物の一つ

さるまじうあながちなる所に。さやうの人

慶すすまじき所なれどもむりなき程なれ

ば。あながちにくくしてせせたるに。其

人は何の用意もなきがにくきと

なごわほして。たてえはし若なるにや

そよるといへせたる。鳥帽子の物にさばる

聲也。もかうのすは。囀聲也。木瓜さもかく

「増」源按万葉抄に伊與等に囀聲のつきたるを

云也。船のものに木瓜あるをいふさの義は

非也。へりある義なれば。こはしき

西宮記云。遣尋常御殿殿改以鏡色細布爲端

幅額あり。こはき物のうちおける。こはしくしき物

の引かづきて落る音する心也。イこはトの

は。御起か。やならひきあけて。やうくはそろく

引揚て也。幅額の縁こはしくしてても靜に

上て出入はならぬ物を。いづれも用意なき

なにくしと也。たほめかし。たほめかし。原註にたほ

めかし。たほめかし。原註にたほめかし。たほ

名のぶんのりて。かほのもどにどひありく。はかせさへみのほど

るけれ。ねふたしとおもひてふしたるに。蚊かのはそこゑに

しうあくれば。さうじ藤子なごもたほめかしとほめくこそし

くし。すこしもたぐるやうにてあくるはなりやはする。あ

ちおかるよいとしるし。それもやをらひきあけて出入す

るはさらにならず。又やり戸などあらくあくるもいとに

に。物につきさばりてをよるといはせたるいみしうにく

せたる人のいびきしたる。又みそかほしのびてくる所に。

我のりたるは かのきしむ車をかりて のりたる心なるべし 才狂也人をもごき理を在て我さいまぐる 才狂也人をもごき理を在て我才狂をあらはさんとす心之

増「源」云。さいは才。まぐるは捲。才を以て人の言を押し捲る意なり。弘義按。活本にはさえまんとくさあればもしは源臣の説の如くにも聞ゆれども。なほいまだしき心ならず。こはさいはさいの管俣にて差枉れの意なるべし。然らば人の物語りするを我獨才子がりて勝手に自説の方へ差枉て尤もらしくものいふとにや。されどなほ考ふべし

ふさいでいひくたし 云朽す也。其物語は早聞ふるせしなごいひますさまこらうたがりて 勢也。いたはりいさほしむ事之

でうどやうちちらし 調度手道具などをいふ之。やの字は調度や河やさいふ心なるべし。一脱調度屋にてうどとひひなの屋なごいきたなし 藤ごき事之。従者のおこせごも態そられしておきぬを。れごき従者のまもふさまにて

いままおりの 新巻のものい。もさより侍ふ者にさしこえて。物敷へだてなる事之。後見などするがにくきと

わがしる人にて 只今相しりかたらふ夫婦ましてさしあたり 只今日の前に二道やくる時之事

さしもあらぬやうも有かし さしあたりた

にあるこそいとにくけれ。 きしめて音する 車にのりてありくもの。みよもきかぬにやあらんといとにくし。我のりたるはそのくるまのぬしさへにくし。物がたりなどするにさし出て我ひとりさいまぐるもの。すべてさし出はわらばもおどあもいとにくし。むかし物がたりなどするに。我しりたりけるは。ふと出ていひくたしなどするいとにくし。ねずみのほしりありくいとにくし。あからさまにきたる子 活本さえまんとくさ

どもわらばへをらうたがりて。 面白き話 をかしきものなどどらするに。 それに聞たる心 ならひてつねにきてるいりて。 居入 やうどやうちちらしぬるにくし。 私の里亭 家にても。みやづかひ所にても。あはでありな 従者 んどおもふ人のきたるに。 従者 そらねをしたるを。わがもどに 従者 あるもの 従者 のおとしよりきては。 従者 いきたなしと思ひが 従者 ほに。 従者 ひきゆるがしたるいとにくし。 従者 いさまありのさしこ 従者 えてものしりがほに。 従者 さしへやうなることいひうしろみ

る事は事によりてさめられたらぬと。 少の心がへ鏡を照たる所あり。心をつくべし

はなひて誦文する人 奥本はなひててうちすんといのる人さあり。尤面白きにや誦上斬るも。文をさなへてまなふ心之。拾芥塵山環云休息万念急々如律令まがしく。まごに事がましく心之

増「曲」事がましく。 俗に氣味ヲロクなどの意

めこの男 そあれ 乳母の夫こそにくいはあれこの義之世俗におていふもの之

訂「め」この男 より以下。事をおこなひなごするよ。小一條院をば今内禮云々。ふかせ給ふいみしうをかし。に至る活本には此抄十の巻みやつがへ所の次にありりやうとて 領也偏に我物とするさまんあやしけれこれがおがを 乳母が夫の娘舞奇怪なれども其まがを誰いひあらはず人もなげればさ

事をおこなひなごするに かやうなるにりて乳母の夫はにくさのなりさふくめたる詞

訂「原本」 なごするにさありて。源臣はよき註したり。弘義もに草体の似たる文字なれば筆誤ならん見て私に改めたり。然るに今黒川氏藏の活本を見るに。たしかによさあり。因て之に従ひつ

たるいとにくし。わがしる人にてあるほど。 わがしるひたる女の事 ばやう見し女 をいひ出て の事はめいひ出しなどするも。 過てほどへにけれどなほ にくし。 ましてさしあたりたらんこそ思ひやられる。され どそれはさしもあらぬやうもありかし。 はなひて誦文す る人。 大かた家の男しうならでは。たかくはなひたるもの いとにくし。 のみもいとにくし。きぬのしたにをどりあり きて。 もたぐるやうにするも。又犬のもろこゑにながく となき あけたるまがしくにくし。めこのどのをどここ にあり。 女子のあたりへはおていのみまいらぬ心 そあれ。 女はされどちかくもよらぬはよし。をのこごをば たゞわが物にして。 立そひりやうしてうしろみ。いさゝか も此御事に たがふものをはさんし。人をはひとよもおも ひたらず。 あやしけれこれがおがを心にまかせていふ 人もなげれば。 所えいみじきおもちして。まをおこなひ などを イ するよ

小一條院をば今内裏と云 拾芥云。小一條

は近衛の南洞院の四師忠公の家一云三山吹殿清和天皇誕生の所。貞信公家云々。いづくにても大内裏の外に臨時に天子のおはします所を今内裏といふ。榮花物語に堀河殿に圓融院おはせしなむ。いま内裏といひし事あり。こは一條院の御事也

〔訂〕小一條院をば云々。此の一段は他より誤りて入りしなるべし。此所に用なしは黒川置頼翁の説なり。此段弘恭の按にも本文のにくきものさあるに打合はれば他より入たるなるべしと云てありしか。是も活本には省きて上にいへるが如く此抄にては十の巻に入れり。因て今改むべきなれども。しばらくもこのまゝにさし置きつ

たがさほの大貳 高遠 小野宮開白實頼公の御孫。參議齊敏卿の男。太宰大貳正三位也。禁秘抄云管絃は一云院十一箇圓融院被三傳申。然而大貳高遠は御師範一初段たがさのさいさ。二段をのへにたての白玉椿玉柳下尊藤原抄委

わが身にせりつみしなどおほゆる事こそなけれ 心に物のかなはぬなごやうの戀へなしとの心也。宣樂抄云「せりつみし昔人もわがこや心に物のかなはざりけん」文選の山巨源にあたる絶交の誓叔夜が書注云。芹をほめて甘しめて。其里の長に尋るに。里の長にがして笑。しかもこれをうらみき云々。されば此哥の心は。我心によしと思ひていふ事をうらみれぬをうらみてよめるなるべしと見記

是例の筆すまひ云 小一條院をば今内裏とぞいふ。おはしむす殿は清涼殿に

所の中宮定子のおはせしなるべし 殿は清涼殿にて。その北なる殿におはします。西ひがしはわたどのにて 帝へ中宮の養上の御かよひ云々 右内之

わたらせ給ふつねにまうのほらせ給ふ。おまへはつばなれば前裁などうゑ。ませゆひていとをかし。二月十日の日

のうらくと長閑に照わたるに。わたどのの西のひさしにて。うへの御笛ふかせ給ふ。たかどほの大貳御ふえの師

にて物し給ふき。こと笛ふたつして。たかさごををりかへしふかせ給へは。なほいみしうめでたしといふもよのつねなり。御ふえの師にて其ことゞもなど申給ふいとめでたし。みすのもどにあつまり出て見奉るをりなどは。わが身にせりつみしなどおほゆる事こそなけれ。すけたゞは木工のどうにて藏人には成にたる。いみしうあらしくしうたてあれは殿上人女房は。あらわにとぞつけたるを。うたに

つくりて。さうなしのぬし。さばりうどのたねにぞありけ

〔増〕寵顔を拜してはもの思ひもなしとの意にすけたゞはもくのぞうにて藏人にはなりたる 勅物云長保比此名字藏人不見云々。木工尤より六位藏人に成し者也

あらわにとぞつけたる ありしく遠慮なき故あらはなる心にての異名なるべし。イ本あらははあらはのなごいふ詞之。こそはがしづく詞之。源氏夕顔に。右近の君こそあるにおな

〔訂〕原本あらはにさあり。今改めつ遠慮云。或人あらはにはわの誤にて荒謬とていへり。眞頼云。こは荒謬なることあきらけしむに改むべし

さうなしのぬしをばりうどのたね すけたゞはをうたへるたはれうた。さうなしのぬしは。無左右主にや。荒々しく左右をおもふ遠慮なき人といふ心なるべし。をばりうどのたねとて。尾張人の種也。此すけたゞはさうなしは左右をかへりみるいさまなき氣速なる丈夫といふ意也。イそひに待ひては傍にこそばに待ふ

文こそばなめき人 無禮 輕人さかきか はず消息の詞の無禮なるをいふ也 世をなめしるる心なるべし 鏡子云々にて

さるまじき人のもさ。さやうに尊敬すまじき人へあまり。懇懇なる文詞も尤わろけれど。まづ世をなめしるるに書なしたるこそ。我々の得たるにくきはこわり。論人のもさへ人のやりたる文の詞にても。なめきはにくこそあれと。よく心をつけて見るべし

るとうたふは尾張のかねときがむすめのはら成けり ことをふえにふかせ給ふを。そひさふらひて。なほたかうふかせおはしませ。えきふらばじと申せば。いかでか。さりともしりなんとてみそかにのみふかせ給ふを。あな

たよりわたらせおはしませて。此ものなかりけり只今こそふかめとおはせられてふかせ給ふ。いみじうをかし

〔訂〕上の小一條院より此所に至る一段。活本になし。なまをよじすべし。にくきものに入べき談に非ず 是より又立かへりにくき物をいふ也 文こそばなめき人こそいとゞはくけれ。世をなめめにか

きなしたる詞のにくきこそ。さるまじき人のもどに。あま

りかしてまりたるも。けにわろき事ぞ。されどわがえたらんばことわり。人のもどなるさへにくこそあれ。大かた

なまこしうなむわく 従者の主君をそし
るをにくむ

我つふものなど 主の従者をしかる
て。おはするの。の給ふのなごいふもに
しと

こいもに侍るさいふもすをあらせばや
彼従者をの給ふおはするなごいふ主の関の
中に。こいもに侍るさいふ文字をあら
せたまと思ふ事おほきと。清少のにくみ
あざけりていふ詞

あいぎやうなくさ調しなめきなどいへ
たさひ受用もなき事をも調こはからず品や
かにいへば其いはれし人もさのみ度たて
す。きく人も聞にくからで。こもにうらわ
らふと

【増】源按あいぎやうなくさのこはさしを
略せる。此頃よりの俗語。金葉七「た
ちながらきたりさあは下藤衣めきすてられ
し身ぞき思へば」新古今十三「たのめすは人
をまつちの山なりとれなましものいさよひの月」此他にも数首あれど略す。此頃言まじりしはせり

かくおほゆればにや。あまりてうらう 彼詞品めきていへば。いはる人もきく人もにくまでよしとおほゆればにや。あまり物こまにしなめか
していふほごに。かへりてなぶりあざけるなど人いにはるゝまでにあるも亦わるきなるべしと。是彼或つかふ者をの給ふおはするなごいふ人
のにくきにつけていふなり

たゞなる名をいさか 殿上人宰相なご
なたゞ人の其名乗をよぶはばかりと。そ
れをついしますいふはよからぬを。さやう
にはいばで。御調官などをよび。又女房な
も。おもと。きみなごいへばなるこびほむ
るご。御許オホおつげなごかしづき
ふ詞。君は猶かしづく詞

御まへよりはかにてはつかさかひふ 是前
に。只名なる名をついしからずいふはか

たはなるさの詞を釋せる。殿上人公達な
ご。天子の御前ならで。いづれも其官
をよぶと。御前にては名乗をよぶべき
歟

きこしめさんにはなごてかは丸がなごはいは
ん 帝の御召所にては殿上人公達の我事を
丸がなごはいはめ事と。至尊に釋る故
と。是らも皆詞なめきやうならぬ教なるべ
し

さいはざらんにくし 帝の御前にてこそ殿
上人公達も自他の物いひに釋りあれ。外に
ては亦名乗はいはで官をいふべきに。詞な
めき人のさやうにはいはぬにくしと

かくいはんにわらがるべき事は 殿上人
公達に官をいひ。女房をも御許君などいふ
こそよげれと。是も詞の教へなり

ひきいれとてして
源氏繪本に。いきの下に引れさいふに同
ら。詞曲に由めきたるさまと。よき男こそあ
らめ。さしもなき男のさやうなるはにくき
と

いかなる物にかあらん
彼一人車にのりて物云る男をさ。いふな
り。何者はしられども。さまで我一人高貴
めかすさもさの心と

くよひて 赫耀也。我のみ榮耀がましく
一人物見あるらんよと

案るに此獨車にのりてさいふより以下奥の
心づきなき物にもあり

曉に歸る人の 朝の名残はをしまでたし歸
るにさしきたりとも

なごの緒其まゝにて着たりとも。まじり
らむ

いたし。貴人なり
ましてよき人などをさ申ものはさるはをこにて
いとにくし。をこしうなどわろくいふいとわろし。我
かふものなど。おはする。の給ふなごいひたるいとにくし。
こよもに。侍るといふもじをあらせばやとさきことこ
そおほかれ。あいぎやうなくと。ことほしなめきなどい
へば。いはるゝ人も。きく人もわらふ。かくおほゆればにや。
わまりてうらうするなごいはるゝまである人もわろきな
るべし。

殿上人宰相なごを。たゞなる名をいさか。かつましけ
ならずいふはいとかたはなるを。けによくさいはず。女房
のつほねなる人をさへ。あのおもと。きみなごいへば。めづ
らかにうれしとふもひてはむることぞいみしき。殿上人

公達 攝家の子息清華などいふ
さんだちを。御まへよりほかにてはつかささいふ。又御前
にて物をいふごも。きこしめさんにはなごてかは丸がな
ごいはん。さいはざらんにくし。かくいはんにわらがるべ
き事は。ことなることなきをとこの。ひきいれとてして
賢にかやひなる。聖なすすかたき親にや
えんだちたる。すみつかぬすり。女房の物ゆかしうする。
にくげこいはいはめ事と。おもはしからぬ人の。にくげと
したる。ひとり車にのりて物見る男。いかなる物にかあら
ん。やむごとなからずとも。わかき男ごもの物ゆかしう思
ひたるなどひきのせても見よかし。すきかけにたゞ一人
かくよひて。心ひとつにまもりあたらんよ。あかつきにか
へる人の。よべおきしあふぎふところのみもとむとて。く
らければ。さぐりあてんく。とたゞきもわたしあやしな
いづくへゆきけんあやしき事などいふ
どうちひ。もどめ出てそよくとふところにさしいれ
て。扇引ひろげてふたぐ。どうちつかひて。まかり申した

【増】源按あいぎやうなくさのこはさしを
略せる。此頃よりの俗語。金葉七「た
ちながらきたりさあは下藤衣めきすてられ
し身ぞき思へば」新古今十三「たのめすは人
をまつちの山なりとれなましものいさよひの月」此他にも数首あれど略す。此頃言まじりしはせり

かくおほゆればにや。あまりてうらう 彼詞品めきていへば。いはる人もきく人もにくまでよしとおほゆればにや。あまり物こまにしなめか
していふほごに。かへりてなぶりあざけるなど人いにはるゝまでにあるも亦わるきなるべしと。是彼或つかふ者をの給ふおはするなごいふ人
のにくきにつけていふなり

たゞなる名をいさか 殿上人宰相なご
なたゞ人の其名乗をよぶはばかりと。そ
れをついしますいふはよからぬを。さやう
にはいばで。御調官などをよび。又女房な
も。おもと。きみなごいへばなるこびほむ
るご。御許オホおつげなごかしづき
ふ詞。君は猶かしづく詞

御まへよりはかにてはつかさかひふ 是前
に。只名なる名をついしからずいふはか

たはなるさの詞を釋せる。殿上人公達な
ご。天子の御前ならで。いづれも其官
をよぶと。御前にては名乗をよぶべき
歟

きこしめさんにはなごてかは丸がなごはいは
ん 帝の御召所にては殿上人公達の我事を
丸がなごはいはめ事と。至尊に釋る故
と。是らも皆詞なめきやうならぬ教なるべ
し

さいはざらんにくし 帝の御前にてこそ殿
上人公達も自他の物いひに釋りあれ。外に
ては亦名乗はいはで官をいふべきに。詞な
めき人のさやうにはいはぬにくしと

かくいはんにわらがるべき事は 殿上人
公達に官をいひ。女房をも御許君などいふ
こそよげれと。是も詞の教へなり

ひきいれとてして
源氏繪本に。いきの下に引れさいふに同
ら。詞曲に由めきたるさまと。よき男こそあ
らめ。さしもなき男のさやうなるはにくき
と

いかなる物にかあらん
彼一人車にのりて物云る男をさ。いふな
り。何者はしられども。さまで我一人高貴
めかすさもさの心と

くよひて 赫耀也。我のみ榮耀がましく
一人物見あるらんよと

案るに此獨車にのりてさいふより以下奥の
心づきなき物にもあり

曉に歸る人の 朝の名残はをしまでたし歸
るにさしきたりとも

なごの緒其まゝにて着たりとも。まじり
らむ

人のさかむべきにもあらずさ
たくなし 願の字
イニかたくなご書たるもおなす心。思
なる心
増かたくなしは。原本かたくなごあり。
今古本異本によりて改めつ。くごし草
の似たる故に寫し誤りたるにや
とする人は。如此する人はその心。かの
直衣狩衣しごけなくして。名残をのみをし
む人はさ。

しひてそいのし
女の明はてめさきにはやくおきいでま
ひるさま。男のへりやめるさまをい
んてかける詞。

なにわざさなけれどおびなごなばゆふや
名残をしめる箇中のみまおしはるべし
やがてもさしに出ゆき
源氏絶角に。宇治の中君に匂宮のきぬく
に。明ゆくほごのそらに妻戸おしあけても
るさまにいざなひ出て見たまへばさあるさ
まなるべし

ひるのほごのおぼつかからん
是も夕顔にけさのほごひるまのへだてもお
ぼつかなくさいへるさまなり
見おくられて。女の見送る。かやうに名
残をしげなるこそ。女も見おくられ。前
のまぼしのをかためて名残なきには女も見
送るべくもなしとの心
なごりも出ごころあり
かの名残なく出ゆく人はあさも其出てゆき
し所あらはにありと
あけていでぬる所たてぬ人
是も彼名残も出所有さいひしに付ていふな
るべし

十八段

こゝろときめきする物
心のうごきいさむ心。又むれさわをも
いふ
ちごあそぶする所の
見を愛しある所にきはしきを聞て過るさ
ま
らのかみみのすこしくらき
唐鏡也いみつき鏡を哀今少明なれかしと思
ふこゝろなるべし
こゝろに見る人なき所にも。かやうにつく
るひたてたるを見る人あれば勿論心ときめ
くべきに。見る人なくとも
ふさぞおさるる
雨風のおさにも待人のきたるかさ心ときめ
きおさるるべし

る。はくしどはよのつねいとあいぎやうなし。如し同之是も曉か
夜ふかくいづる人の。思ほしのきつよくゆひたる。是も名残なしけなくて
かためずともありぬべし。やがてなごいふ心
とも。人のどがむべきことかはいみじうしどけなうかた
くなし。イセなほしかりぎぬなどゆがたりとも。たれば見
しりてわらひそしりもせん。とする人はおはあかつきの
さまこそをかしくもあるべけれ。わりなくしおはりつさま
きがたけなるを。しひてそゝのかしあけ過ぬ。あな見ふる
しなどいはれて。うちなげくけしきも。男の心な女のおもひやる心
にしもあらんかしとおほゆ。さしぬきなども。開つたさるさま
もやらず。まづさしよりて。よひと夜いひつる。こののこ
りを。女のみいひいれ。同事するさなけれどもなにわざさなけれど。おびな
ごをはゆふやうなりかし。かうしあけ。つまごあるところ
はやがてもろともいいでゆき。ひるのほごのおぼつかな

からん事をいひいれすべし。いひくそろく出ゆくさま見おくられ
てなごりもをかしかりぬべし。戸など其まあけてあるなるべし
とききはやかに。おきてひるめきたちて。さしぬきのことしつ
よくひきゆひ。なほしうへのきぬ。かりぎぬも。袖かいまく
り。よろづふさこころがみ願なるべししいれ。おびつよくゆふにくし。あけていでぬ
る所たてぬ人いとにくし。

こゝろときめきするもの

すゞめのこがひ。ちごあそぶする所のまへわたりたる。まへなごほりゆく事
よきたき物たきてひとりふしたる。からのかゞみのすこ
しくらき見たる。よき男の車とゞめて物いひあないさせ
たる。かしらあらひけさうじて。かうにしみたるきぬきた
る。こどに見る人なき所にて。心のうちばなほをかし。ま
つ人などある夜。雨脚雨のあし風のふきゆるがすもふさぞお
どろかるよ。

かれたるあふひ 賀茂の祭の美々しきま。
ま。物見の優なる事などおもひ出るさまに
ひひなあそびの調度 わらはの時の事思ひ
出へし
えびそめ 細縁云紫色のいさ浅之別に出す

こぞのっばはり
編綴扇之。河海云編綴を見て扇を作り初け
る之。仍夏の扇の惣名也

こころゆく物 世話に氣味よきさいふ心也
増こころゆくまば適意之。心にかなへるこ
そ
訂こころゆくもの活本にはこころゆくもの
のいさすくなく見えたるものさあり
かなんぬ 女のみかきたる双紙なるべし
増瀧按をんなの詞とは。男女のなかを
き付し書卷物の詞之。さてなん詞さかしう
さもいへる也
のりこぼれて 一車にあまたのりた

てうばみ 重食 調食
双六のあそび也
増てうは賽の目の丁之。丁の目又て出れば
つ。勝負の遊戯也

すぎにしかたこひしきもの

かれたるあふひ。ひひなあそびのうと。ふたあゐひ
なにてそめし之 絹のきれ之 後撰集の詞書にもあり 双紙之
ぞめなどのさいでの。おしへされて。さうしのなかにあり
けるを見つけたる。又をりからあはれなりし人の文。雨な
どのふりてつれづれなる日さがし出たる。こぞのかはは
り。月のあかき夜
月むかへは向さなく往事をおもふ物さ詩哥あまたあり

こころゆくもの

よくかいたるをんなの詞をかしうつゞけておほかる。
物見のかへさのりのりこぼれて。そのごともいとおほく。う
しよくやるものゝ車はしらせたる。しろくきよけなるみ
ちのくがみに。いとほそうかくべくはあらぬ筆して文か
きたる。川舟のくだりさま。はらるめのよくつきたる。
てうはみにてうおほくうちたる。うるはしきいどのねり
あはせらりしたる。ものよくいふおんやうじして河原に

おんやうじ 唐語也
おんやうじト唐語也。にも遊馬物たりに
てもよくせざる也
すそのはらへ 咒圓の歌にや。人に咒神を
ふせられぬのるはれたるのの呪神なきや
うにせ解除する也。中世或は咒神を疾病
消除の祓まら部の家を用ゑ類なるべし
これにかかりにかり
呪神也。こゝにわくありし。かしこかくあ
りしなどいふたる也。又此事に應り。かの
等に應り也。彼の呪神ちんじや
増これにつけ。彼れにつけさいふ也
物まうするに
我れき等を神佛に申さする也

びらうげはのどやかに
檜毛の車は束帯などの時乗用する車なれ
ば。しづかなるがよき也
あたるはしらせたる

綱代車。桃花菜葉云。髪之時召之
綱代上白 猶如二半部二立板大八菜 衆如
下簾尋常也。花鳥餘情云。凡車は唐廬。板
檜毛車等は。みな板檜を以てふ。尼扇。
半藤。綱代等は。皆あたるをふけり

馬はむらさきのまだうづきたる

出てすそのだらへしたる。よるぬおきてのむ水。つれづれ
なるをりな。いとあまうむつをしくばあらずうとくもあ
らぬまらうとのきて。世の中の物がたり。此ごろある事の
をかしきもぬくきもあやしきも。これにかより。かれにか
かり。おほやけわたくしおほつかあからずきよよきほど
にかたりたるいと心ゆくこちちす。社寺などにさうで
物まうするに。寺には法師。やしるにてねぎなどやうの
ものゝ。思ふほどよりもすぎてとゞこほりなく聞よく申
たる。びらうげはのどやかにやりたる。急ぎたるばかり
しく見ゆ。あじろは。はしらせたる。人の門よりわたり
たるを。ふと見るほどもなく過て。ともの人はかりはしる
を誰ならんと思ふこそをかしけれ。ゆるくとひさしく
ゆけはいとわろし。うしはひたひいとちひさく。しるみた
るが。はらのしたあしのしも尾のすそしるき。馬はむらさ

「増」毛註云。鬚赤身黒鬣馬也。是むらすきの毛色のと云。唐韻云。鬚。鬣馬也。さもあり。まだらつきたるは斑文の付たる也。

あしけ 蔵毛 白き駒なり

「増」既云。聴ハ青白雜毛馬也。かみななごもいしるき

鬣ふりがみ尾なども白き馬也。身はくろき馬なるべし

ゆふかみさも 黒鬣を云云。躬恒葉に馬の毛を讀たる哥の中に。ゆふかみ。懸すればやせこそすらめものいなのゆふがみト云。おもほゆるかな

さふしき 蔵人所の髪色にかざらず。諸家に召具せらるるもの也

すのトん 本府の隨身小隨身とてあり。これば羽林などの召具せらるる小隨身なるべし

こせれり

河海抄云。小舎人は童子の徳名也。花鳥云。中少將の召具する童を小舎人といふ也

さわらつ

「増」原本さはらさあり今イ本によりて改め

瀧按さわらつはさわやと同語也。らつもやりやうくしき

真々也よき事を云云

うへのがきりくるくて

猫の背の方はみなくらく

説經師 法談などする僧なり

外目 よそ目するとおこな。顔にくげなる僧は顔を見ぬから説事をもわする。ゆふ顔

きのまだらづきたる。あしけ。いみじくくろきがあしかたのわたりなどしるきとてころうすこはいのけりて。かみをなごもいしるき。けにゆふかみともいひつべき。うしのかみ

しかひはおほきにて。かみあかしらがにて。かほのあかみ。麻々きつきたる

て。かどくしけなる。さふしきするじんはほそやかなる。よききのこもなほわかきほどはさるかたなるぞよき。いたくこえたるはねおたからん人とおもはる。ことねりばちひさくて。かみのうるはしきが。すそさわらかに聲をかしうて。かしてまりて物などいひたるぞりやうくしき。

猫はうへのかざりくるくてことばみなしるからん。説經師はかほよき。ほどまもらへたるこそ其とく事のためとさもおほゆれ。外目しつればふとわするべし。にくげなるはつみやうらんとおほゆ。このことばほどよむべし。すこしとしなどのよろしきほどこそ。かやうの罪はえがたの

にくげなる僧は罪えんと思ふこと

さしなごのよろしき程云云

若き程こそ法師の顔よきは顔守らるるなごやうの罪えぬべきかたの詞も書出けぬ。今の年まで後には。罪おそるしきと云

たふさき事だうしんおほかり

此僧はたふさき事もなく。道心もおほきとて。道場をかまへ説經するを聞に行くことさしもあらで見ゆれ

さしもなき事と見ゆること。我つみふかき心にはさやうに最初にゆかでもあれかしと見ゆること。此の蔵人おきたる人の事を問ふこと

蔵人おきたる人 六位蔵人四ヶ年のうち巡番にあがりて地下になりたる人。六位蔵人は殿上する。五位に成ても蔵人をさりては地下になる事

蔵人の五位 蔵人なられども。蔵人よりかうふりえたるを蔵人の五位とて規模とする

職原抄云。六位蔵人四人。重代諸大夫中不抜塔。有。器置之。敷補之。地下諸大夫多以是為。先途。雖五位以後。以。諸人五位。爲。規模。之。故也云々

うすふたあゝ 薄二藍云

花鳥云夏の直衣のいろ云

あをにぶ 青鈍云

弄花抄云花田に背けのまづれる云

えはしに物いみつけ

河海云昔は忍草に物思を書てみすにも冠にもさしける。事なし草云につけて云。又云柳の枝を三寸ばかりに簡に作りて御冠

ことばかき出けぬ。いまはつみいとあそろし。又たふとさしにつけての筆すさび

事だうしんおほかりとて。せつきやうすと云ふ所也。さいをにいきぬる人こそ。猶此つみの心にはさしもあらで見ゆれ。蔵人おきたる人。むかしは御せんなどいふ事もせず。そのどしはかりうちわたりにはましてかけも見えざりける。いまはさしもあらざめる。蔵人の五位とてそれをしもぞいそがしうつかへど。なほなごりつれくにて心ひどつはいとまある心ちぞすべかめれば。さやうのどころにいそぎゆくを。一たびふたよび聞そめつれば。つねに人の五位が心

さうでまほしくなりて。夏などのいとあつきにも。かたひらいとあきやかかへうすふたあるあをにぶのさしぬきなどふみちらしてあためり。えはしに物いみつけたるは。けふ夢などつしむべき日なれど佛事功德の事には参たるまか見せん云々

さるべき日なれどくどくのかたにはさばらずと見えむどにや。いそぎ来て。その事するひじりと物語りして。車たつ

の縁に付らる云々。是は禁中の考へ。此級
人の五位は烏帽子に付し。

念珠かいつまぐるさま
念珠かいつまぐるさま

何れにして其人のせし
何れにして其人のせし

そんで其所にて其備のおこなはれし入
そんで其所にて其備のおこなはれし入

講。あるひは経供養などいひ出てたうさま
講。あるひは経供養などいひ出てたうさま

なくらぶるさま。八講は法華經の要文を
なくらぶるさま。八講は法華經の要文を

問者の問くるを講師の一言答へ講する事
問者の問くるを講師の一言答へ講する事

。一日に八座の故八講といふ。經供養
。一日に八座の故八講といふ。經供養

すさは何の經にても書寫して其ために佛事
すさは何の經にても書寫して其ために佛事

なすなすいふ
なすなすいふ

みいなれてめつらしう
みいなれてめつらしう

前にも一たび二たび聞初つれば。常にさ
前にも一たび二たび聞初つれば。常にさ

でまほしくなりてさあり。聽聞に耳馴てさ
でまほしくなりてさあり。聽聞に耳馴てさ

しくも覺えぬか
しくも覺えぬか

さはあらで。此級人五位がさまにはあらで
さはあらで。此級人五位がさまにはあらで

。この次に車のさまおはせてきたる人
。この次に車のさまおはせてきたる人

々の事いはんさていへり
々の事いはんさていへり

せみの羽よりもろげなる
せみの羽よりもろげなる

うすく清らなるさま。又輝の羽衣さ首夏
うすく清らなるさま。又輝の羽衣さ首夏

の物にあらたよめり。うらのなきすいし
の物にあらたよめり。うらのなきすいし

又さばかりして。それほささいふ聞。侍
又さばかりして。それほささいふ聞。侍

ひなも三四人ばかりめしつれてさの心。
ひなも三四人ばかりめしつれてさの心。

さすがにすいふしもみな
さすがにすいふしもみな

。三四人の人々は説經講聞ばかりにはあら
。三四人の人々は説經講聞ばかりにはあら

で。物のついでなどに立よりたるさま。
で。物のついでなどに立よりたるさま。

ら。さすがに道場をなしたるさま。
ら。さすがに道場をなしたるさま。

はえくしう。榮々屋々を見ゆる人の入來
はえくしう。榮々屋々を見ゆる人の入來

たればひひ有て思ふ心
たればひひ有て思ふ心

ちやうもんするを文さわき
ちやうもんするを文さわき

。説經講聞の人々立さわき講聞する
。説經講聞の人々立さわき講聞する

人の車に目をつくるさまへの字にて事ごと目をつけたる心なり
人の車に目をつくるさまへの字にて事ごと目をつけたる心なり

るさへぞ見れことにつきたるけしきなる。久しくあは
るさへぞ見れことにつきたるけしきなる。久しくあは

ざりける人などのまうであひたるめづらしがりて。ちか
ざりける人などのまうであひたるめづらしがりて。ちか

くろより物かたりし。うなづきをかしき事などかたり出
くろより物かたりし。うなづきをかしき事などかたり出

て。扇ひろうひろけて。口にあてゝ笑ひさうぞくしたるす
て。扇ひろうひろけて。口にあてゝ笑ひさうぞくしたるす

ゝかいまささうり手さささうりし。こなたかなたうち見や
ゝかいまささうり手さささうりし。こなたかなたうち見や

りおどして。車のよしあしほめをしり。何れにして其人の
りおどして。車のよしあしほめをしり。何れにして其人の

せし八かう。經くやうなどいひくらべるほどに。此説
せし八かう。經くやうなどいひくらべるほどに。此説

經の事もききいれず。なにかはつねにきくことなればみ
經の事もききいれず。なにかはつねにきくことなればみ

ゝなれてめづらしうおほえぬにこそはあらめ。さはあら
ゝなれてめづらしうおほえぬにこそはあらめ。さはあら

で。講師の禮堂侍子などに當てしはしめる事。
で。講師の禮堂侍子などに當てしはしめる事。

とめてある人。せみのはよりもかるけなるなほしきし
とめてある人。せみのはよりもかるけなるなほしきし

ぬきすしひのひとへなどきたるも。かりぎぬ姿にても。さ
ぬきすしひのひとへなどきたるも。かりぎぬ姿にても。さ

やうにてはわかほうやかなる三四人はかり。さふらひ
やうにてはわかほうやかなる三四人はかり。さふらひ

のもの。又さはかりしていれは。もどるなりつる人もすこ
のもの。又さはかりしていれは。もどるなりつる人もすこ

に。まやうにはあらで。いまだ説法はほ
どに此三四人の退出と

見しりたるをばかしく思ひ

是より彼三四人のありさまにつけて。説經
に参りての興をいふ。参詣の人々の見知
り見しらぬを見やり思ひたるも逸興と

【訂】原本そここにのちなし今イ本によ
りて加へつ。又一本并に万葉抄にはそのこ
に説經しつ云々あり。活本にはしつのも
もトなし

其人はありつやなど

聽聞など終にせぬ人をそしりたる詞。お
人は参詣せしにや。何ぞ参詣せられんなど
定りていはる。程なるもあまの事と。彼
藏人五位がやうに聽聞なれたるも如何
と。又一向にまわらぬも悪しとの心

さればさては下めつたは
さりさて女の寺まうでに。むかしはちかは
だして参りか。いづらふ事はなかりしと
つはさうぞく
河海云。俊成卿のむすめの説云。市女笠に

しうち身じろきくつろぎて。かうぞのもどもちかきはしら
のもどなどにするたれば。さすがにずおしもみなどし

動之彼人々をいれんて身をよけたるまこと
彼人々をおく

てふしをがみるたるを。かうじもはるくしうかもふな

るべし。いかでかたりつたふはかりととき出たる。ちやう

もんするど。たちさわぎぬかづくほどにもなくて。よきほ

どにて立いづとて。くるまどものかたなど見おこせてわ

れどちいふ事も。何事ならんと覺ゆ。見しりたる人をばを

かしとおもひ。見しらぬは誰ならん。それにや。かれにやと

めをつけておもひやらる。こそをかしけれ。そこに説經

しつ。こゝに八かうしけりなど人いひつたふるに。其人は

有つや。いかゞはなごさだまりていはれたるあまりなり。

なごかはむけにさしのぞかではあらん。あやしき女だに

いみしく聞めるものをば。さればとてはじめつたかたは。か

ちありきする人はなかりき。たまさかにはつはさうぞく

功徳道場に無下にまわらぬは如何と
功徳道場に無下にまわらぬは如何と
功徳道場に無下にまわらぬは如何と

功徳道場に無下にまわらぬは如何と
功徳道場に無下にまわらぬは如何と
功徳道場に無下にまわらぬは如何と

功徳道場に無下にまわらぬは如何と
功徳道場に無下にまわらぬは如何と
功徳道場に無下にまわらぬは如何と

功徳道場に無下にまわらぬは如何と
功徳道場に無下にまわらぬは如何と
功徳道場に無下にまわらぬは如何と

うすき如きたる女をつぼさうぞくといふ
云々。孟津抄云つぼさうぞくといふはなつ
ぼなるこゝろなり

ほたいといふ寺 未考一説菩提樹院にや。
拾芥云。神樂岡の東。上東門院の御願と云
々。但不詳

もさめてもかいる。此許清少の家集にあ
り。千載集にも入り。宇治大納言物語に
も出たり。心は懇求めてもかいる菩提の地
にこそあらまほしけれ。是をわきて湖世に
はかへるまほしきと。蓮の露に菩提院を比
して上求菩提の心をよめり
さうちうか。家業世事を忘て菩提に入しむ
あるなるべし 別註

小しら川 小白河也
小一條大将 師忠公也前に小一條右大臣とい
ひしとおなし八二

〔改訂〕小一條大将。藤原清時此の時権大納
言右近衛大将たり。左大臣師尹の二男春
注誤なり。
〔改補〕小白河殿結縁八講。花山院寛和二年
六月十八日より廿一日迄行はれたり。

露といふに
曉露といふも出て参たれば。露の車ま
とに隨なく立双しと云
みつばかりまては
庭にたておきし車の第一の車第二第三の車
などまでは講のきこゆべしと云
六月十日 みなづさをかあまりとよむべ
し。是寛和二年の六月なるべし。此次に義
朝の出家の事あり
左右のおとを 此時の左大臣は源雅公。
右大臣は藤原の兼家公などにや
〔訂〕あさぎのかたがらとあるよりすしげな
りまでの四十九字活本になし。活本には白
きかたがらもすしげなりとあり。然れど
も今もこのまゝに従ひつ

やすちの宰相
藤原安親卿。山陰の中納言の孫。從四位上
攝津守仲正の三男。永延元年十一月十一日
参議に任ずる由公卿補任に見ゆ。長徳二年
三月六日卒六十七歳
わがやぎたちて
安親卿寛和二年の比は五十七歳なれば。若
人ながら。裝束は若やぎてまわりたまひし
と云

されいたの
藤原實方。小一條左大臣師尹の孫。侍從
貞時の子。母左大臣雅信公の女
ながあきら 未考
是も小一條の家の子見えたり
三位中将は關白殿をそ
中關白道隆公也。大入道兼家公の男。母は
攝津守藤原仲政女。關白院の永觀二年正月
七日に從三位中将如元一條院の永祿二年五

○増訂枕草紙春曙抄卷之二

なる人もの心
なごはかりしてをまめきけさうじてこそありしか。それ
さうぞくにては寺社なごにまわりしと云
も物まうてをぞぞし。説經なごはことにおほくもきかぞ
りき。此ごろ其をりさし出たる人のいのちながくて見ま
しかは。いかばかりそしりひばうせまし
是より又こそ物たりと云
ほだといふ寺に。けちえん八かうせしかさたりまうで
たるに。人のもとよりとくかへり給へ。いとさうくしと
いひたれば。はちすのはなびらに。
今女のうちにて説經ありくを昔人はそしらんぞと云
説經をよめる事
清少の局と云なるべし
散花のはなびらなるべし

もどめてもかゝるはちすの露をおきてうき世に又はか
へる物かは」とかきてやりつ。まことはいとたふとくあは
れなれば。やがてとまりぬべくぞおほゆる。さうちうが家
の人のもどかしさも忘ぬべし
是より又こそ物たりと云
こしらかはといふ所は。小一條の大將殿の御家ぞかし。そ
れにて上達部けちえんの八かうし給ふに。いみじくめで
たき事にて世の中の人のあつまりもきてきくれろから

ん車はよるべきやうもなしといへば。露ごとめいそぞ
おきて。ゆにぞひまおかりける。ながえのうへに又さしか
さねて。みつばかりまではすこし物もきこゆべし。六月十
餘日にてあつき事世にしらぬほどなり。いけのはちすを
見やるのみぞすこしすしき心ちする。左右のおどした
ちをおき奉りてはおはせぬ上達部なし。ふたあるのなほ
しとしぬき。あさぎのかたがらをぞすかし給へる。すこし
昔のちの上達部
おどなび給へるはあをにびのさしぬき。しろきはかまも
すしげなり。やすちかの宰相なごも。わかやぎたちて。す
べてたふときことのかぎりにもあらず。をかしき物見な
り。ひさしのみすたかく巻あけく。なげしのうへに上達部
おくにむかひてながくとる給へり。其下には殿上人わ
かきさんだちかりさうぞく。なほしなどもいとをかしく
てるもさだまらず。こゝかしこにたちさまよひあそびた

月八日に開白し給ふ
さばかりるびすしける中に、外の上
達部は遠黄の帷子をすかし白き袴など涼し
げなる中にも道隆公の立あつはしから
でめでたしきなり

ほそぬりほねなど
細染骨也。扇のほねはさまざまなれど。地
紙はいづれもあかき也

けげん
[増]今の譜なり形は今と異之

よしちかの中納言
藤原義朝は。一條攝政伊尹公の男。母は
代明親王の女。皇子女王也。花山院の寛和
二年に權中納言從二位公卿補任

上達部の御名などかくべきにもあらぬを
義朝の名をあらはせることわりをいふ
也。いづれも花くさあざやかにいづれ
もなければ誰ともわかれぬに。此人の帷子
か着こめて。直衣ばかり着たまへるやうに
て。車など見やり給ひしきまをみるさん
て書出しの心也

見ぬ人なかりけん
句をみるべし

ひまもなかりければ
御衆の車ども隙なくたふ双びたれば。彼還
く來たる車。池あるかたにたたること
人のせうそこつきくしく

人のいひやる消息をよくいひ傳ふべき者あ
らば一人やさはせ給へん。彼後にきたる
女車に物いひ給はんて

いかなる人にかあらんえりて
何者やらん實方の辨ひとりてひきひておほ
せし

やりに給はん事はきこえず
其いひやり給ふ事は清少のかたへきこえぬ
こ

いみしくよそひして
彼消息いひ傳る人のよそほひし用意してゆ
くさまなり

久しくたれば 使者の返事をまちて車の
もとに久しく立てば

返事などよむにやあらん
返事の返きは哥よみておこすならん。又其
返哥用意せよ實方への給ふ

けその人 願置人也
こにて外さまの心也。上達部のみなら
ず。外さまの願置まで彼女車を見やりし
双紙の地也

かへり置きいたるにや
實に返事聞てかへるにはあらず。彼返事を
待つたれて使のたいかへるを。清少のよそ
より見る心より出し詞也

久しかりつるほどに さばかり久く待せな
から。たさひ哥の不足なりさもよひかへす
まどき事さの心也

ちかくまわりつても心もさなく
彼使の返事きいてかへるを。人々まちかへ
給へるさま也

まこによりてけしきばみ
義朝のかたによりて使の返事を申さま
也。其よそほひをなすをけしきむさはい
ふ也

あまり有心過てしそこなふな あまり心あ
りがほし過て興をさますな心也。使
の返事をさくいはで心いられせすればの
給ふ也

るもいとをかし。さねかたの兵衛の佐。なかあきららの侍従
など家のこにていますこしいでいりたり。まだわらはな
るきんだちなどいとをかしうておはす。すこし日たけた
るほどに。三位中將とは關白殿をぞきこえし。かうのうす
ものふたあるのなほし。おなじさしぬき。ときすばうの御
はかまに。はりたるしるきひとへのいとあさやかなるを
き給ひて。あゆみ入給へる。さばかりかるびすしける
中に。あつかはしけるべけれど。いみじうめでたしとぞ
見え給ふ。ほそぬりほねなどはねはかけれど。たゞあかさ
かみを。おなじなみにうちつかひもち給へるは。なでしこ
のいみじうさきたるにぞいとよくれたる。まだ講師もの
ほらぬほどに。かけはんどもして。何にかはあらん物ま
るべし。よしちかの中納言の御ありさま。つねよりもま
りて。きよけにおはするさまぞかぎりなきや。上達部の御

名などかくべきにもあらぬを。たれなりけん。すこしほ
るればいづれとなく花くしき也

どふれば。いろあひはなとどいみじく。句ひあさやかに
いづれどもなき中のかたびらを。是はまことになんは
しひとつをきたるやうにて。つねに車のかたを見おこせ

つ。物などいひおこせ給ふ。をかしと見ぬ人なかりけん
句の。是女も車之句

を。後にきたる車の。ひまもなかりければ。池にひきよせて
たてたるを見給ひて。さねかたのきみに。人のせうをこつ

きくしくいひつべからんものひとりどめせは。いかさ
る人にかあらんえりて。おはしたるに。いかさいひや
さよしちかの近邊の人々に談合也

るべきと。ちかくる給へるはかりいひあはせて。やり給は
ん事はきこえず。いみしくよそひして車のもとにあゆみ

よるを。かつはわらひ給ふ。あとのかたによりていふめり。
先使ひのさまを笑給ふ也 使の男車の跡によりていふ也

久しくたてれば。哥などよむにやあらん。兵衛佐返しおも
思せよ也

ひまうけよなどわらひて。いつしかかへりてとさかんと。
返し哥を用

藤大納言 勅物云。爲光七月廿日右大將四十五云々。

按ずるに爲光公は。九條右大臣師輔公の九男。貞元二年四月廿四日任三權大納言。正曆二年九月太政大臣。第三恒繼公。

なほき木をなんすなほにいふべき事を曲解なしたるをあざけり給ふ詞云。彼なほき木にまかれる枝もある物をさし置し詞をかり用ひていへりさてよびかへされつるさきにはいかゞいひつる。

彼使のかへりしな。女車よりよびかへさざりし已前には何と返事せしめて問給ふ。は下め使の只歸りしな。一度返事問てかへりしと見給ふゆゑにかくの給ふ云々。

さしかくも侍らざりつれば。あまり返事を案下煩ひて久しく成しゆ云。使の只かへりしよしを申云。たれが車ならん見しりたりやなどの給ふほどに。

「訂」は中納言の詞なれど。異本に左の如くあり。たれの車ならん見しりたりやなどあやしがり給て。いさ歌よみて此たびはやらんなどの給ふほどに。

こきひとへがされ。女の裝束云。濃紅なりしにすりたるも。あまにひきたる雲のすそ云。かたはらん事よりは。孟津綱渡カヲホ遇同経喜式御流云かたはは頼なる云。おろかなる心云。ほの字すみてよむべし。愚案此女車の返事のなほき木をま

おとしき云かんかちめ 彼女車のかたを云
おとを上達部云でみなそなたをまに見やり給へり。けに
けそうの人々云で見やりしををかしう有しを。かへり事
きしたるにや。すこしあゆみくるほどに。あふぎをさし出
てよびかへせば。哥などのもじをいひあやまちてばかり
こそよびかへさる。久しかりつるほどに。あるべき事か
は。なほすべきにもあらじ物をとぞおほしたる。ちかくま
ありつくも心もどなく。いかんくどたれもとひ給へど
もいはず。權中納言見給へば。そこによりてけしきはみ申
す。三位中將とくいへ。あまり有心過てしそこなふな。どの
給ふに。これもたゞおなじことになん侍る。といふはきこ
ゆることなれ。藤大納言は人よりも。けにのぞきて。いかゞいひつると
の給ふりれば。三位中將いとなほき木をなんかしをりた
めるときこえ給ふに。うちあらひ給へば。みな何となくさ
どわらふこと。女車にもきこえんこと。藤大納言の使に問給ふなり
笑云。女車にもきこえんこと。藤大納言の使に問給ふなり

つるさきにはいかゞいひつる。此詞のなほしてのちの事云々
とひ給へば。ひさしうたちて侍りつれども。ともかくも侍
ざりつれば。さばはるりなんどてかへり侍るをよびてと
ぞ申す。たれが車ならん。見しりたりやなどの給ふほどに。
講師のほりぬれば。みなあしづまりてそなたをのみ見る
程に。此車はかひけつやうにうせぬ。したすだれなどたゞ
けふはじめたりと見えて。こきひとへがさねに。ふたあゝ
のかりもの。すはうのうすもの。うはぎなどにて。しりに
すりたるもやがてひろけなからうちかけなどしたるは。
清少の思ふこと。人のかたはならんことよりは。け
にと聞えて中くいとよしとぞおほゆる。あさぎのかう
むせんはんかうさのうへもひかりみちたる心ちして。い
みしくぞあるや。あつさのわびしきにそへて。しよすまじ
き事のけふすすまじきをうちおきて。たゞすこしきい

げたるを批判云。なましひにたくなしき
曲節あらんよりは。只事にて。げにこき
えたるがへりてよしとの心云
せいばん 勅物云清経法相宗。播磨國人。
清三清水律師。長徳四年權律師云々。興福寺
の法相宗にて。空明僧都の法孫朝日律師の
上座。毘沙門法無双にて文殊の化身と東宮隱尊
にあり
「増」日本紀略云。具保元年三月廿二日乙巳
權律師清経卒年三十八
まへなる車さにも。清少出なんこと我道り
出へき道の車に案内いふ云
まいかんたちめ 老上達部也前にちさな
んたちめといへるにおなじ
やいまいぬるもよし
やいは漸也。まかりぬるもよし退ぬるも
住也。此心は清少の朝座のみ聞て出るを。法
華經の方便品に釋迦如來第三願一の御法を
さき給はんとする時。五千人の増上慢の輩
法座を起て退くに。如來默然として制止給
はて舍利弗に如來増上慢人退亦住矣との給
ひしことになそらへてよしとのいへる云
五千人の中はいちせ
彼まかりぬるもよしとの給へるによりてい
へる詞云。此あつさにはよしとちかも退出し
給はんぞとの心なり。彼方便所の法座をな
ちし五千人の事云
何かめでたからんいごにくし
始申終たちさらぬて何のよき人ならんぞ
云。中納言のまかりぬるもよしと清少をの
給ひし首尾なるべし
其はつかあまりに中納言のほうしに。是寛
和二年六月廿餘日に花山院出家せさせ給ひ

し御供に。義實も法師に成給ひし事。發双紙云。花山院御時中納言義實は外戚。惟成辨は近習の臣にて。各天下の權を執りしかに院ひそかに内裏を出て花山にみゆきして。出家し給ふ。兩人階出て追て登す。院は已に比丘となり給ふ。惟成もさしりなき。又義實に語て云。外戚と有て權を執ておぼしけるに。更に外人となりて世間の業にまどはる事見苦しかるべし。早く出家し給へ。義實これを存する由を釋して同く出家す。人の教訓によりてしたればいかゞ世人思ひけるに。始末尋て過さ云々。飯室に住せよめる哥也見し人もわすれのみする古里に心なかくも來たる春哉。此事榮花物語大か、分等にもあり。岩をまつまのさだに。義實の出家は世にばかりにて老に達ければ。引替あらんや。宋勤

てかへりなんとしつるを。數並出物をしきならべたるやうに車のつごひしことしきなみにつごめたる車のお朝座果たらばくになんるたれば。いづべきかたもなし。あしたのかう果なば。いかで出なんとて。まへなる車どもにせうそすれば。我軍をすゝめらん事をよろこびてちかくたふんうれしさにや。はやとどひきいであけて出すを見たまふ。いとかしかましきまて人ごといふに。上達部なき見給ふおいかんだちめさへわらひにくむを。清少いれずいらへもせで。せばがり出れば權中納言や。まかりぬるもよしとてうちわらひ給へるぞめでたき。それもみよにもとまらず。あつきにまどひ出て。人して五千人の中にはいらせ給はぬやうもあらじときこえかけてかへり出にき。そのはじめよりやがてはつる日までたてる車のありけるが。人よりくとも見えす。すべてたあさましうなるなどのやうにてすこしければ。ありがたくめでたくこゝろにくいかなる人ならん。いかでしらんとどひけるを聞給ひ

〔改訂〕老をまつまの 清水漬臣の考には「おい」は「おく」の誤として、新勅撰集戀、源宗子の「白露のおくをまつまの朝親は見ずぞ中々あるべかりける」さいふ歌を引用させり。

七月はかり。七月のころの殘暑を。是より別の筆すまびに
〔改訂〕三尺のきちやう 三尺几帳は常の几帳より一尺低し、婦人が座側に立て、内外を隔つる具。
いとつややかなるいたの 板縁の清きをいふ
おくのたにおしやりたるぞあぢきなき 几帳は女の形かくすためなればはしにたつべき物を。おくには。あぢきなくまさなきわささ。是忍びたる男を傍輩などに見せつのためなるを。あやしむ詞
おくのうしろめたからんよ。只亦にあらすとあやしく奥を無遺ふ事よ。只亦にあらすとあやしむ詞
うすいろの。おもては紫のうす色に。うらははこき紅のすこしうはらけしたる心。此出たちが。又はこき紅の鏡などいへる文章。此文法おくにも所々あり

て。藤大納言なにかめでたからん。いとにくし。ゆゝしき物にこそあなれ。どの給ひけるこそをかしけれ。さてその二十日あまりに中納言のほうしにたり給ひにしこそあはれなりしか。さくらなどのちりぬるもなほよのつねなりや。老をまつまのどだにいふべくもあらぬ御ありさまにこそ見え給ひしか。
七月はかり。いみじくあつければ。よるづの所あけながら夜もあかすに。月のころはねおきて見いだすもいとをかし。やみも又をかし。有明はたいふもあるかあり。いとつやまかなるいたのはしちかやあさやかをらたふみひとひら人に選てかりにかまへたるまに
かりそめにうちしきて。三尺のきちやうおくの方におしやりたるぞあぢきなき。はしにこそたつべけれ。おくのうしろめたからんよ。人はいでにけるなるべし。うすいろのうらいとこくて。うへはすこしかへりたるならずば。こご

まだせげながらなめり
 彼返びたる男の歸りてまだ紐などひきしめつくるはほほなるべしなり。うちさけふしたるまゝなるべしなり。
 又いづこよりかあらん
 又他の男の外より歸りきたるさま。股上人などのそのお所より返ひきての其歸るなるべし
 紅のいさつやいなるうちきぬの
 ちてつやあるも水紅のさほすにこそあらめさば。白きすしの下にかさなる紅のすきさほりたるにや。つやいかに色の見えささの心なるべし
 あまがほの露おちわさきに文がいんまで此男も返ひ所より歸るさまに。早く後開の文がいんさふまふまふ。餘情面白き聞なるべし
 ふふの下草など
 新粉獨「標麻のなみの下草露しあらば明してゆかん隠はしるも。此香万葉には露しあれば明してゆけははしるも。さ下句あり。然ども此草紙にてはあかしてゆかんといへる心よくかたふべきにや。朝顔の露を見て思ひよりしくすさびなるべし。露を哀さ思ふにや。露が露かほめてふふ

あやのつややかなるがいたくばなへぬを。かしらとめてひききてぞねためる。かうぞめのひとへ。くれなるのことまやかなるすしのはかまの。こしいとながくきぬのしたよりひかれたるも。まだどけなからなめり。そほのかたに。かみのうちたなははりてゆららかなるほど。ながさしはかられたるに。又いづこよりかあらん。あさほらけのいみじうきりみちたるに。ふたあるのさしぬき。あるかなきかのかうぞめのかりきぬ。白きすし紅のいさつやちつややいなる。露にいたくしめりたるをぬぎたれてびんのすこしふくだみたれば。あはしのかしいれられたるけしきもしどけなく見ゆ。あまがほの露おちぬさきに文かんとて道のほども心もどなく。さふの下草など口ずさびて。我がたへゆくに。かうしのあがりたれば。みすのそほをいごよかあけて見るに。おきていぬらん人もをかき。露を

下草を口ずさびなせし心より彼おきていぬらん人も露を哀さ思ふにやさおしはるなり
 ちりびたる 墨紙のちて有し墨運
 男の見しありさふ
 れたふも見えぬるかな 此男に見られたる
 を除める女の心
 こよなきなごりの
 無題コトコト事の外さ。今夜逢語ひあかし給へる名残に。朝露の事の外なること。ざれたる詞
 「増」瀧云水居宣長の説に。こよなくは。必他にむかへてくらぶることの有に。いふ意にて。われよりほこれこよなくまされりなごやうにいふ意。されば俗言に格別さいふによく當れりあり。こよもその意にて後翻なれば。つれの朝よりほかくべつこの意。つゆよりさきなる人の
 此男の忍び所より早くいへるをさかめたる詞なり。露よりさきにおき出し人のもさかしきに我はかく朝露久しくすることなり我もちたる詞にて彼ひるごりたるあふきを及びこしにかきよする

あはれとおもふにや。まはし見たれば。まくらがみのかたに。ほほにむらさきのかみはりたるあふぎひろごりながらあり。みちのくにがみのたうがみのほそやかなるが。花かくれなるか。すこしにはひうつりたるも。きちやうのもどにちりほひたる。人のけばひあれば。きぬの中より見るに。うちをみてなげしにおしかよりたるれば。はぢなどき人にはあらず知たる人なれども。隔心なる男なるべし。する人にもあらねど。うちとくべき心はへにもあらぬに。ねたふも見えぬるかと思ふ。こよなきなごりの御あさいかなとて。すのうちね。なからはかり入たれば。つゆよりさきなる人のもどかしさにといらふ。をかしき事とりたあがれにくくちりしきもなれば。かくいひかはすけしきどもに。くからず。枕がみなる扇を。我もちたるして。およびてかきよするが。あまりちかうよりくるにやと心とさめきせられて。いさすこしひきいらる。どりて見などして。うとく

あまりちかうよりくるにや
男のおよびりて近づきよるにやさ女の
むれさわぐさ
いますこしひきいらる
女のひきいりて用意せらるる心。前にう
ちさくべき心ばへにもあらぬを男をいひし
首尾。い本ひきぞくだらる。さ引しりぞ
か。い心なるべし
霧のたえ見えぬほどに。前に朝がほの
つゆおちぬさきに文か。いんさありし首尾
。さやうに急し文も此女さかやうにたは
ふれてたゆみぬるはげに此男の心うしろめ
たしと。是うちさくべき心ばへにあらぬ
こころなるべし
出ぬる人もいつのほどにか見え
前に人は出にけるなるべしとありし人の事
。此女のことひあひかたらしし男。そ
のなごこのもさより。いつのほどにか出
おこせつらん見えて。後朝の文を萩につ
けてあれど。此なごこのかくてあればえさし出ぬと
我きつるころもかくやと。此なごこの只今出てかへり來たる女のかたも此所のやうにあらんさおもひつらるるもおもはらんさ言少のおし
はかりたる詞

たる詞
おほしたる事などうちかすめうらみなどするに。あかう
なりて。人のことゑと。し。日もさし出ぬべし。きりのたえま
見えぬほどにといそぎつる文も。たゆみぬることうしろ
めたけれ。出ぬる人も。いつのほどにかと見えて。萩の露な
がらあるにつけてあれどえさし出ず。かうのかのいみじ
うしめたるにはひいとをか。あまりばしたなきほどに
なれば。たち出て。我きつるどころもかくやとおもひやら
るよもをかしかりぬべし

梅はこくもうすくもこうはい
〔訂〕原本梅のこくもうすくもさあり。万葉抄
には梅の二字なし。なかくもさあるしき文
法。異本には梅はさあり。はさあるかた
まさりたるやうなれば改めつ。さて意は。
木の花の早く咲くは梅。梅は濃紅梅にて
も濃紅梅にては紅梅がめでたきと
察するにさき
櫻の葉の赤き事
隠の花しなひなが
伊勢物語に。花のしなひ三尺六寸ばかりさ
いへるたぐひなり
郭公の陰にかくるらん
新古今人丸のうた。なくこみをえやば忍は
ぬほとさきす初卵花のかげにかくれて
おどろなるかきれ
飛騨などの垣
あをいろのうへにしるきひさへがさね
どろの垣の青き。卵花の白きをたさへし
。あな色さは幽麗。かりやすとむらさ
きさあくをさすなど一條關の物語
あなくらばなど
宵料葉。ちもて宵丹の黒みあり。うらは宵
さ桃花葉にあり
梅のこくあをさ
葉の濃青也。遊辭類賦云。綠葉青
みのこがれの玉さみえて
梅は花に實をぐしてある物也。詞賦類稿
枝堅金鈴。春雨後花。梅。風。梅。この
時にてかけり。雨のふりたるつとめてなど

宋の花は

梅はこくもうすくもこうはい。櫻の花びらおほきに葉い
ろこきが枝はそくてさきたる。藤の花しなひながく色よ
くさきたるいとめでたし。うの花はまなちどりてなにと
なけれど。さく比のをかしう。郭公の陰にかくるらんと思
ふにいとをか。まつりのかへさ。むらさきのうわたり
ちかきあやしの家ども。おどろなるかきねなど。いと
ろう咲たるこそをかしけれ。あをいろのうへにしるきひ
とへがさねかづきたる。青くちはなどにかよひていとを
かし。四月のつごもり。五月のついたちなどの比はひ。梅の
葉色の濃青
こくあをさ。花のいとしろく咲たるに。雨のふりたるつ
どめてなどは。よになく心あるさまをか。花の中より
みのこがねのたまかど見えて。いみじくきはやかに見え

さいへるも春雨後の心
更にいふべきにもあらず
猶今更こそあたらしくほむべきにもあらず
なしの花世に冷たく
梨花は唐には賞すれど。我朝には梅樹など
やうにはもてあそばされば。まして詩などに
も和國にはつくらはば文つけなごだにせず
さいへるにや

やうきひみかどの御使ひにあひてなきける
ほ
これは長恨歌にある事をいへり。楊貴妃す
てに馬鬼のちりき成て。玄宗皇帝歎きに堪
給はで。臨邛の道士を使として。其魂魄を求
め給ふに。蓬萊に至りて貴妃に尋あひて。
帝の消息を傳しに貴妃泪をこぼせし事を。
玉容寂寞淚闌干梨花一枝帶春雨。白樂天の
つくりし事
桐の花むらさき 白氏文集二云。答桐花
桐の花紫葉青々
もろこしにこもろしき名つきたる鳥 風
鳥也。格物論云。鳳。瑞鳥。太平之世則具其形
鶴頭蛇頸。燕頰。魚尾。五彩色。高六尺許。非二
梧桐。不栖。非三竹實。不食云々

まして琴につくりて
毛詩云。梧桐梓漆。爰伐琴瑟。文選十八器賦
夜琴賦云。惟梧桐之所生。琴瑟之樂。固一
至入。禮記云。制為三。推琴一。中琴記之
かればな。花のこまかに幽なる心にや
【増】弘按。わればな。こまかに幽なる心にや
と云。花の色のからびて。美はしからぬをい
ふ云

五月五日にあふも
拾芥云。説類本草云。五月五日俗人取三椽葉一
個。之。懸。惡氣。今も田舎には端午に。せんた
ん。軒に。つ。さ。す。事あり

かつまたの池 詩詞田池 或は詩説。八聲
には下。鏡。さ。あり。龍。兼。卿。の。祝。哥。枕。等。同。前。清
輪は。美。作。さ。い。へ。り。顯。昭。法。師。は。大。和。と。云。々
【増】源云。万十二。かつまたの池は。我。し。る。は。ち
す。な。し。ま。い。ふ。君。ひ。げ。な。き。が。こ。こ
いはれのいけ 盤余池 八聲に大和云々
にえのいけ 八聲にやまさとあり
【増】にへの池の誤なるべし。夏科日記にも初
瀬。臨。の。條。に。見。え。たり
水なしのいけ
【訂】源云。耳なしの池にや。然らば大和と。万十
六。み。い。なし。の。池。し。う。ち。め。し。云。々。此。耳。な
しの池を。後。に。み。づ。なし。と。誤。り。たる。に。や

むげになくはきてあらばこそ 一向に亦
なくはこそ水なしの池とも名づくべけれ
の心

廿二段

たるなど。あさ露にぬれたるさくらにもおとらず。郭公の
より所さいふ心之橋に子規のやどる事詩にあまたあり
よすボとさへ思へば。猶更にいふべきにもあらず。な
しの花よに。あやしくあやしき物にして。めにかかくは
かなき文つけなどだにせず。あいきやうあくれたる人の
かほなど見ては。たどひにいふも。けに其いろよりしてあ
なく。いなく見ゆるを。もろこしにかざりなき物にて。文にもつ
の詩あけていひがたし 子細あらんて心とめてみる云
くるなるを。さうりともあるやうあらんとてせめて見れば。
花びらのはしにをかしきには。ひこそ心もとなくつきため
れ。やうきひ。みかどの御使ひにあひてなきけるかほに
せて。梨花一枝春雨をおびたりなどいひたるは。おほろけ
ならじとおもふに。猶いみじうめでたき事はたふひあら
じとおほえたり。桐の花むらさきにさきたるは。なほをか
しきを。葉のひろどり。さまうたてあれども。又こと木ども
とひとしいふべきにあらず。もろこしにこととしき

名つきたる鳥のこれにしもすむらん心ことなり。まして
ことにつくりてさまうなるねの出くるなど。をかしと
はよのつねにいふべくやはある。いみじうこそはめでた
けれ。木のさまぞにくけなれどあふちの花いとをかしか
れは。なほさまことにかきて。かならず五月五日にあふも
をかし

池は

かつまたの池。いはれのいけ。にえの池。はつせにまあり
しに。水鳥の隙なくたちさわぎしがいとをかしく見えし
なり。水なしのいけ。あやしうなごてつけけるならんとい
ひしかは。五月など。すべて雨いたくふらんとする年は。此
いけに水といふ物なくなんある。又日のいみしく照とし
は。春のはしめに水なんおほく出るといひしなり。むげに
なくかわきてあらばこそさもつけめ。いづるをりもある

うれめの身をなげ
拾遺集云。豊澤の池に采女の身なげたるを
見て。人丸「わきもこがれくたれ髪をさる
澤の池の玉もさるぞ悲しき。拾遺抄云。人
丸が。ならの帝の豊澤の池に行幸し給ひて
采女の身なげたるを哀みて。人に喜よませ
給けるに。御供にてよめる云。れくたれ髪
さは只髪のみだれたるをいふべき餘中略
抄。此采女の事。大和物語にもあり。帝
の寵愛おそろへしを恨申て身なげたる云
かみみの池。さやまのいけ。こひめまの池
此三所八雲にもかう書ついでて國所見え
待らす

「増」さやまの池は。武蔵國なれども又河内國
にもあり。古今六帖に「武蔵なるさやまの
池のみくりこそ云々
又續日本紀云。天平四年十二月丙戌。熊河
内國丹比郡狹山下池云々
みくりさいふうた。古野可レ勸みくりさは
水草之をくにしるす
「増」みくりは。古今六帖に「武蔵なるさ山が池のみくりこそひけばたえすれわれやたえする」とあり
たまもはなかりそ。河津云。風俗上野野一をたひへ鳴さへきめる原の池のや玉露はまれりそいもすはれやまれりそや

廿三段

せちは 御供なるべし
五月にしくはなし
花鳥餘情云。五月五日の節。天皇あやめの
かつらをいけ給て。武徳殿に行幸あり。内舞
外舞等せちみのごとし。宮内省菖蒲を獻す。
内侍女蔵人観命總を群臣に給ふ。三献をば
りて六府騎射の事あり。建喜式太政官云凡
五月五日天皇觀三騎射并走馬。辨及史等檢三
校諸事。所司各段二御座於武徳殿。是日内外
群臣皆着二菖蒲冠也

なるを。一すぢにつけるかなといらへまほしかりし。大
和さばの池うねめの身をなげけるをきこしめして。行幸
などありけんこそいみじうめでたけれ。ねくたれかみを
と人丸がよみけんほどいふもおろかなり。御まへの池。又
何の心につけるならんことをかし。かみみのいけ。さやま
の池。みくりといふ哥のをかしくおほゆるにやあらん。こ
ひぬまの池。はらのいけたまもはなかりそといひけんも
をかし。ますだの池」
八雲大和云々
風俗のうたひ物の詞云

せちは
五月まきくばなし。さうぶよもぎなどのかをりあひたる
もいみじうをかし。こゝのへの内をばしめて。いひしらぬ
たみのすみかまで。いかでわがもとにしけくふかんとふ
きわたしたる。猶いとめづらしく。いつかことをりはさは
他時にやうの説はなし

ぬひどのより御くすたま
 禮命 延喜式 藥玉 雲圖 五月五日のくすたま
 は。糸所より奉る事 延喜式 御記等に見えたり。
 糸所はすなはち殿の別所なれば。此
 双紙にはぬひどのよりまゐらすといへる
 によ。江次第二部云。絲所在三采女町北。延
 喜式 殿別所也。五月五日秋。藥玉一是也。拾芥同。
 河海曰御記曰延喜十三年五月五日丙午絲所
 供二奉藥玉一如。常禮。去年九月茶黄二以。禮
 玉一。御註前例也。下。禮圖抄同。

むすびつけなごしたる。
 唐衣汗衫などにつけし。
 春こまにさくさくして櫻を
 毎年のあやめをめぐらしげにいふことわり
 二。櫻も毎年みれども猶めぐらしうするこ
 二。

いみしきわざしたるこ
 藥玉をもちてよるこびおもふ心

したりし。そらのけしきのくもりわたりたるよ。きさいの
 たるべし
 みやなどよは。ぬひどのより御くすたまとていろくしの
 糸をくみさげてまゐらせなれば。みちやうたてまつるも
 延喜式
 やの柱の左右よつけたり。九月九日の菊をあやどすし
 のきぬよつよみてまゐらせたる。おなじはしらよゆひつ
 けて。月比あるくすたまとりかへてすつめる。又くすたま
 は菊のをりまであるべきよやあらん。されどそれはみな
 みさげし糸を
 いどを引とりて。物ゆひなどしてしほしもなし。御せくま
 きて御祝儀を進する
 あり。わかき人々はさうぶのさしらしさし。ものいみつけ
 なごして。さまよ。からきぬ。かさみ。ながきね。をかしきを
 女の装束
 花の藥玉のさり。村邊の粗糸
 りえだども。むらごのくみしてむすびつけなどしたる。め
 づらしういふべき事ならねどいどをかし。さて春ごとよ
 大つたにの心
 さとて櫻をよろしうおもふ人やはある。つちありくわ
 其分際くはしたがひて
 らはべの。はごくにつけてはいみしきわざしたると。つ

廿四段

つれにたまをまもり 調練のくすたまを
 愛し見るさま
 「増」源云。新古今。つばねならびに住待ける
 頃。五月六日もるもにあかして。あした
 にながきれをついて。紫式部につかはし
 ける上東門院少将。なべてよのうきにな
 かる。あやめ草けふまでかいる根はいか
 みる。かへし紫式部「何ごさあやめはわ
 かで今日も猶たもにあらるれこそたえせ
 れ。」かいるたぐひをいふべき
 むらさきのかみにあふち
 其花其葉の色に懸たる色のかみについ
 て。又白き紙をあやめのれのやうにせし
 文の中にいれなごしたる
 人よりの文に。葛漕の根をいれておこせし
 にも。よるしき返事せんさ勢に談合するさ
 ま
 見せかはしなご
 「訂」原本見せかはしなごあり。今源臣本。勢
 村本のイ本とあるによりて改めつ
 人のむすめやんこそなき所々に
 人のむすめもさへにても。やこそなき御
 かななどにも。文やり給ふ人も御仲にはこ
 こなまめかしく見ゆること
 木は
 「訂」万葉抄には。花の水ならぬはそあり
 かつら
 桂日本紀。賀茂の祭にあふひ草に添る物と
 かしイ柳あり
 傳字雲梯の字。柳の字にまがひたるゆゑに
 や。いづれかまことならん
 そはの木 曾波木と延喜式大倉人寮に右

ねにたもとをまもり。人に見くらべ。えもいはずけうあり
 と思ひたるを。そはへたることねりわらはなどひきど
 られてなくもをかし。むらさきのかみにあふちの花。あを
 きかみにさうぶの葉。ほそうまきてひきゆひ。又白き紙を
 ねにしてゆひたるもをかし。いとながきねなど文のなか
 にいれなごしたる人どもなごもいとえんなる。返り事か
 うんといひあはせ。かたらふどちば。見せかはしなごする
 をかし。人のむすめやんこそなき所々に御文きこえ給ふ
 人も。けふは心こそにぞなまめかしうをかしき。夕ぐれ
 ほどに郭公の名のりしたるもすべてをかしういみ。
 木は
 五葉松云。イ柳
 かつら。こえふ。かき。たちばな。そはの木。はしたなきこと
 の紅葉を云云
 ちすれども。花の木どもちりはて。おしなべたるみどり
 になりたる中に。時もわかずこきもみちのつやらさてお

「増」そはの木。和名抄に楓の字をあてたり。
 若葉の赤きものこといへり
 はしたなきことすれども
 曾波木の事はいへり。其本立のはしたなき
 物ながら若葉の紅葉のめづらしきこと
 やどり木 宿木。寄生之三光院御祝の
 字をもやどり木といふ。こま木に寄りた
 るを云云。花鳥には木の聖殿といふ物云。
 飛騨生の類云々
 さかさき 河津雲梯とは眞寶木。眞坂樹日本
 紀にかかり。天照太神の岩戸をささ給ひ
 し時八百万の神達。天香久山の坂樹をれ
 下取て祈り給ひしより。神の縁木とす。樹
 は本字にあらず。本朝の作字云々。眞寶木と
 云々
 臨時のまつり 賀茂の臨時の神は十一月。
 八幡の臨時の祭は二月。奥委
 御神樂の折なご 内侍所の御神樂に。人長
 神をさきてかなづる事あり。探物の哥にも
 勿論さかきあり
 ちえにわかれて 六帖「いづみなる」は
 の森の楠の木の手枝にわかれて物をこま
 へ
 かつはよつはの
 古今序「此殿はむべもさみけりさき草のみ
 つばよつばに殿づくりせり」北畠親房抄云。
 幸種は樟の水をいふ。みつばよつばは三
 棟四棟を尊。屋の棟あまたある心なるべし
 「増」樟は最も棟梁に用ゐる木なれば。其用あ
 るをめで。此歌の詞をかりていへるなるべ
 し
 五月に雨のこま
 「増」新芽のころ風吹けば飄々として雨のこま

もひかけぬあを葉の中よりさし出たるめづらし。まゆみ
 いふもこまらに今めかしこの心やどり木とて別に木はあらざり
 さらにもいはず。そのものどもなけれやどり木といふ
 名いとあはれなり。さかさき臨時のまつり。御神樂のをりな
 ごいとをかし。よに木どもこそあれ。神の御前の物といひ
 はじめけんもとりわきをかし。くすの木は。こたおほか
 る所にもことばまじらひたてらす。おどろくしきおも
 ひやりなごうとましきき。ちえにわかれてこひする人の
 ためしにいはいれたるぞ。たれかはかすをしりていひはじ
 めけんとおもふにをかし。ひの木。人ぢかからぬ物なれど。
 みつはよつはのどのづくりもをかし。五月に雨のこま
 ねおらんもをかし。かへでの木。さよやかなるにも。もえ出
 たるこづるのあかみて。おなじかたにさしひろごりたる
 葉のさま。花もいと物はかなけりて。むしなどのかれたる
 やうにてをかし。あすはひの木。此世ちかくも見えきこえ

の如くきこゆるをいふなり。
 あすはひの水 明日檜木にや。世俗にあすならふさいふ水
 なり。檜の木に似て材木につかふ物な
 たれたのめたるに。あすはひに誰に頼め
 したる。
 れすもちの水 櫻和名
 やまなしの水 河海「世の中をうしさいひ
 てもいつくにい身をばかくさん山なしの
 花」イ本山たらば古今「我こひを忍び
 れては足引の山楢の色に出ぬべし」榮雅抄
 云山楢は世俗に飯柑子といふ草之云々。草
 ならば水の種類には如何にや
 それしも葉がへせぬ
 楸の木をしもこの心「いつさなく葉がへ
 ぬ山の楸柴に人の心をなすよしもいな」類
 河次郎百首に仲實の哥云。楸古哥尋ねし
 しらべし
 「増」眞頼云此所は楸の木と云。白檜の字に
 非す。しらべしは裝束抄にもあり
 三位二位のうへのきぬ 白檜にて染るにや。
 延喜式第十四雜染色式にさましくあり。可
 し考。但清少納言の比はさもあるべし。此比
 の袍はふしがれにて染る紫の由。但ふし
 がればくさく早く朽るにより。近ごろ故
 實の女工ありて。下を芳蘇をよく煎じて染
 て。うへを五倍子の枝若は葉を煎じて染る
 が色もよくさからぬといへり。五倍子の
 木なれば和楸の皮にて染るよし。桃華
 葉に見えたり
 えさのなみこ

吉野の金峯山之千日精進してまゐる
 ず。みだけにまうでうかへる人などしかもてありく
 枝さしなどのいと手ふれにくけにあらしくしけれど何の
 心ありてあすはひの木とつけけん。あぢきなきかねこと
 なりや。たれたのめたるにかあらんとおもふにしらま
 はしうをか。ねずもちの木。人なみくくなるべきさまに
 もあらねど葉のいみしうこまかにちひさきがをかきな
 り。あふちの木。やまなしの木。楸の木は。ときは木はいづ
 れもあるをそれしも葉がへせぬためしはいはれたるもを
 かし。しらかしなどいふもの。ましてみやま木の中にもい
 どけどはく。三位二位のうへのきぬそむるをりばかり
 ぞ葉をだに人の見るめる。めてたきこと。をかしき事にと
 りいづべくもあらねど。いつとなく雪のふりたるに見ま
 がへられて。そこのをみこと。いづもの國におはしける
 御事をおもひて。人丸がよみたる哥などを見るいみじう

「訂」活本万葉抄にはすきのをに作る。さて此
 の尊のこと并に入丸の歌は此所に無用な
 大かた誤文なるべし。遠臣も此段さきか
 し誤あるならんといはれたるなり。今諸本を校
 考するに二三字の異同あるのみにて。大方
 解しがたければ。下文の「鳥むしむるかに
 こそほえれ」さあるまでの數句はしはら
 く本のまいにさしおきつ。なほ考ふべし
 出雲の國におはしける御事をおもひ入丸が
 拾遺。人丸「足ひきの山路もしらす白檜の
 枝にも葉にも雪のふれいばさあり。此哥の
 事にや
 しはすの時日にしも時めきてなき人の
 十二月の玉祭りに。盆に荷葉をしくやうに。
 様なくひ物にしくなるべし。報恩經云。十
 二月晦日午時來。正月一日卯時歸。この外
 にも盆の來る日あり。彼經に委
 よはひのぶるはがため
 花鳥云。盆間は楸はよはひ。則はよはひとも
 よめり。楸はよはひをたむる心也。河
 海云。内膳自宵門。供三御備固具。藤原大
 根一杯瓜車。二杯押餅。一杯糰餅。一杯猪突
 以代代之鹿。以上七杯之内。
 精進物供。第一御盃。魚類供。第二御盃。或
 祝舞。鹿突有鹿赤。云々。いまも元日の餅が
 いみにゆづり葉をかきり侍り
 もみぢせんよや。六帖。旅人にやどかす
 のいゆづりは。紅葉せん世や君を忘ん
 葉もりの神。後篇「柏木に葉守の神のま
 しけるをしらぞなりした。りさるる。此
 此哥大和物語にもあり。葉守の神は河海云樹神也。其後云。葉守の神なべての木を守るにあらず。只柏木のみ守る。弘仁式三綱柏の所に
 見云々。豈に餘古人餘の木に詠之如何

世に傳る事にも時節の景につけても
 あはれや。いふ事にてもをりにつけても。ひとふしあはれ
 どもをかしどもさくおきつる物は。草も木も鳥むしもお
 ろかにこうおほえね。ゆづりはのいみじうふさやかにつ
 やりきたるは。いとあさうきよけなるに。おもひかけず
 るべくもあらず。くきのあかうきらくしう見えたるこ
 そいやしけれどもをかしけれ。なべての月ごろは露も見
 えぬ物のしはすのつごもりにしもときめきて。なき人の
 くひ物にもしくにやとあはれあるに。又よはひのぶるは
 がためのもにしてつかひためるはいかなるにか。紅葉
 せし世やといひたるもたのもし。かしは木。いとをかし。は
 もりの神のますらんもいとかしこし。兵衛のすけそうな
 どをいふらんもをかし。すがたなけれどすろの木からめ
 きてわろき家のものとは見えず

兵衛の佐とうなど 八雲御抄に兵衛佐を柏水と云々。大和物語に其少將兵衛の佐なりける時、柏木の森の下草とよみし事あり。意經抄にも兵衛
すがたなけれどするの木 櫻橋は杖もなく。させる姿もなきもの。歌詠云併櫻葉水風涼云々。四洲の曉景に。孤山寺に望て白雲天の作りし
句云

廿五段

こと所の物なれどあふむ
山海經云。黃山有鳥其狀如鴉青羽赤喙人
首龍首名三鸛也。文選鸛鳴賦云。惟四城之
鸛鳥。懸自然之奇姿。體金精之妙質。含火
熱之明輝。性辨寒暑。分下暑少賦の心はあ
ふむは四城の鳥にて。やたらうつくしく。ち
み有てよく物をもいへば。山や湖への官人
に仰せて。此鳥をさらしめて。籠にこめつれ
ば。聲悲み形もつめて。さく人も泪をお
さす事をつくれば。此賦の心にていさ哀也
さいへるにや。續文選を見るべし

鳥は

こところの物なれどあふむいとあはれ也。人のいふら
んことをまねふらんよ。郭公。くひな。しぎ。みことどり。ひわ。
ひたき。山ごりは友をこひてなくに。かゞみを見せられは
なぐさむらんいとあはれなり。谷へだてたるほどなどい
どこころるし。つるはこちたささまなれども。なくこそ
雲るまできこゆらん。いとめてたし。かしらあかきすゞめ。
いかるがのをどり。たくみどり。さぎはいと見るもみら
るし。まなこるなどもうたてよるづにやつかしからぬぞ。
ゆるぎのもりはひとりばねとあらそふらんこそさかし
けれ。

夫木集に寂蓮「おもひかね樂なりくぶる山
ささかなはまびしやひたきなくなり
また源師光「もししきにすみさだめよひ
たきどりなるやさにもにはに見ゆめり
山鳥は友をこひて
これは「山鳥のなるのはつかに似かたきな
ふへみこそなによりけめさいふ書の鏡を
清少の述たるにや。昔爾爾より壁面白き山
鳥を奉りしに帝御給へども鳴ざるを。ある
女御此鳥友をばなれてなかなめりさおも
ひ給て。鏡を籠にたてそへたれば。鏡の氣
色にて鳴事を得たり。此事後續の無名抄の
既なるを。入雲御抄に。是に異説あれども此鏡の軍兵のになひ侍るべし
谷へだてたるほどいさめぐるし。是も彼「山鳥ののしたりなのさいふ書の鏡などにつきていへるにや。意經抄にも此後續の註云山鳥の尾のした

り尾のさいはれたるを山鳥の尾のしたり尾のさいふべきなりと古人申けるさや。尋へだてて。夜は離離不す鳥と。さればひさりぬる心にも
よめるなるべし云々
なくこそ雪のまて 國語活法云。相鶴經云。壁間天放頭赤。食於水故以長云々

【増】毛詩云。鸛鳴九阜一聲聞乎天
いかるがのをどり 疾風雄也。鶴和名集云。鏡似鶴而白喉者也
【増】俗にマママンシといふ
壁はいと見るも見るし 霜衣雲鬢背玉鬢など時を作りて。いさぎよき物なれど。清少の心はかりたきにや。山谷漁雅の時。白鷺不鳴
壁土瀧など。心のつたなきためしにいへるたぐひにや
ゆるぎの樂にひさりはれじ 万木林近江之。梧桐論云。鸛鶴林檎樹出物魚鮮而食。夜爾寄其鳥二百千高詩云々。たがしまやゆるぎの樂の寫
すらも鳴はれどあらそふ物を 六帖

はことどり。水ごりはをしいとあはれなり。かたみよあかは
りて。はねのうへの霜をばらふらんなどいとをかし。みや
ことどり。川ちごりは友まどはすらんこそ。かりのこゑはど
ほくきこえたるあはれなり。かもはねの霜うちばらふ
らんとおもふよをかし。鶯はふみなどよもめでたき物よ
つくり。聲よりはじめて。さまたかたちもさはかりあてよう
つくしきほどよりは。このへのうちになかぬそいとわ
ろき。人のさなんあるといひしを。さしもあらじと思ひし
に。十とせはかりさぶらひてきしにまことさらにお

○増訂枕草紙春曙抄卷之三

さるは竹もちかく
禁抄云。中殿東庭竹滿二云々彼中殿灯扇
竹葉聲さいへる是也。中殿は清涼殿なり
こうばいもいさよく
禁抄抄云。天徳四年十二月十八日。紅梅於
中殿長角あり。其外仁徳殿燈籠などにも
紅梅うゑられし事侍り

春かくゆゑこそあらめ
夏秋までもかく物を。春の鳥さ定たれば。
春かくべき故あるやらんさ也
年たちかへるさ
拾遺集「あらたまのさしたちかへるあした
よりまたるゝ物は露のこゑ 素性
人をも人けあう
鶯は世にもてはやさるゝ鳥なればこそ久し
く鳴。夜あかすむご云難をつけてそしりも
すれさいはんごでのごさばあり

まつりのかへさ見るとて
宇治拾遺に。賀茂祭の供に。下野武正。素戔
行。出け其請さな。法性寺院。雲野にて
御覽下ける事あり
うりんかん 雲野に今うらひさいふ所其器
跡之。河海云。雲林院は淨和の離宮也。仁明
天皇に遷分し奉給ふ。次に常陸親王傳領。
本堂は彼親王の室也。其後御願寺として。
云層に賀茂親王別當に稱せられなごして。
神に尊敬ありき。御記にも本堂千手觀音有
御願二云々
御記云。千葉分庭立云々

ともせざりき。さるは竹もちかく。こうはいもいとよくか
露の來りよふたよりもありさ
よひぬべきたよりなりかし。まかててきけは。あやしきい
への見どころもなき梅などには花やかにぞ鳴。夜るまか
ぬもいざたなきこゝちすれどもいまはいかゞせん。夏秋
の末までおいごゑになきて。むしくひなどようもあらぬ
ものは名をつけかへていふぞくちをしくすごこち
する。それもすゝめなどやうにつねにあるとりならば。さ
もおほゆまじ。はるなくゆゑこそはあらめ。としたちかへ
るなどをかきしきことに哥にもふみにもつくるなるは。な
は春のうちならましかは。いかにをかしからまし。人をも
人けなう。世のおほえあなづらはしうなりそめになるを
いそしりやはする。とびからすなどの止ば。見れきい
れなどする人世になしかし。されはいみじかるべきもの
とぞいられはどおもふよ心ゆかぬこゝちする也。まつり

六段

らうくどう
真々勢をほめたるごさば
あいぎやうつきたる
愛敬ある心之愛らしきさま
いみしうあかくかれ あまりに戀にたへて
の心
すべといふもあつこ
露の久しくなくを離したるに對して一しほ
ほめていふ詞
よるなくもの 露に露の夜なかつを離した
るにつけていふ。郭公にも限らず水鶴秋
虫などの類すべといふなるべし
「増」夜なくものはいづれもめてだしさいふに
對して。ちごものみ云々の一句を添て結
びたる文法いと面白し。是清少の文の力あ
る所也
あてなる物 費アテ
けたかくきよげなる心
うすいろにしらびされ

○増訂枕草紙春曙抄卷之三

の かへさ見るとて。うりんかん知足院などのまへに車をた
てたれば。郭公もしのほぬよやあらんなくよ。いとようま
ねびよせて。木だかき木ごもの中よ。もろこゑよなきたる
こそさすがよをかしかれ。郭公は猶さらよいふべきかた
なし。いつしかしたり顔よもきこえ。哥よ卯花はな橋など
よやどりをして。はたかくれたるもねたけなる心はへな
り。五月雨のみじか夜よねさめをして。いかで人よりさき
よきかんとまたれて。夜ふかくうちいでたるこゑのらう
くじうあいぎやうづきたるいみじうこゝろあくがれせ
んかたなし。みなづきよなりぬればおとせすなりぬる。
すべといふもあろかなり。よるなくものすべといづれも
いづれもめでたし。ちごものみぞさしめなれ
あてなるもの
うすいろよしらがさねのかさみ。かりのこと。けづりひのあ

薄色は薄き紅など也。白重汗衫は童女の初夏の衣服也。うすいろにこれをかかれたるがてやかなる也。

かりのこ。河海云。鴨子四宮紀細流云。かりのこ。

「増」古事記仁徳上にあり。万二鳥垣立嗣之願の兒云々あるは鬼の兒也。冠辭考のあまこぶやの條に委し

けづりひのあまづらに。削氷夏月の暑きにくひ物損せしめためたりに水なくはへおく事云。江次第甘新任大臣大雲云。益香物。暑月削氷甘瓜等云々同夏列見の首書云。野嶋又加削氷。列見延引及二暑月一時如之云々。あまづら。甘葛。千歳薬汁今の世の糖砂糖のやうに食物に和して用る物云。順和名云。千歳薬汁本草云。味甘平無毒。厚脣骨二長二肌肉。一名糖葛。和名同未豆耳。本草云。甘葛煎之。あたらしきかなまり。慈喜式主附云。土師鏡形五十口。順和名にも鏡の字をかなまりとよめり。宇治拾遺物語に水飯を餠のひなまりにもる事あり碗の類云。

はたおり。きりくす。促織ハタオリ蜂蟬同唐には促織一名蟬也。古今註にもしるして同物云。こいにも其形は似て聲ははれり。蟬蟬はつりりさせとなき。促織は機織音に似たり。更に同物にはあらず。

ひなむし。細流蟬也とあり。爾雅云。蟬蟬。促略也。似三蟬。一身狭而長。有角黃黑色。生於土中。甲下有翅能飛。朝生夕死云々。愚案ひなむしはかげろふも同物にや。童謡抄にかげろふはくさうさうはうのちひさきやうなる物と云々八雲抄に夕に軒などいみだれとぶ物云。夕ぐれに命かけたるといへり。

「増」和名抄に蟬比乎無之。朝生暮死虫也とありおにの云々。

「増」漢書。蓬萊草云。入雲云鬼の子分のむし。これ地草子によりていへる也。傍註の寂蓮が歌も又この草紙にすびりてよめるに

まづらよいらてあたらしきかなまりよいらる。すゑさうのず。藤の花梅のはなは雪のふりたる。いみしううつくしきちでのいちこくひたる」

むし

すゝむし。松むし。はたおり。きりくす。てふ。われから。ひなむし。はたる。みのむし。いとあはれなり。おのうみ。おや。はあや。これもおそろしき心ちぞあらんとて。おや。のあしき。ぬひき。せて今秋風ふかんをりにぞこんずる。さてよといひてにけていにけるもしらす。風のおどきしりて。八月はかりになれば。ちよよ。どはかなけになくいみじくあはれなり。ひくらし。ぬかつき虫又あはれ

廿七段

て其原は別にゆゑあるべし考べし。わかつき虫。叩頭虫和名に虫の細微者。爾雅云。叩頭虫。河海云。額突は稽首也云々。此虫かしらなつきて禮拜するやうなれば名づくも。

さる心に道心おこして。常不輕なごつきありくも例の清少の筆すさびなり。

常不輕をつくる事。源氏物語。元亨尺書。勝尾の野如上人の傳にあり。

はへこそにくき物。蟬也詩小雅にも蟬人にたさへにくき物。僧著蠅賦などおもふべし。

「増」春海云。ほさめきは音のあることにて。なりはためくさいふはためくに同ト語なるべし。ほさめきをなごるはわるし。

よろづの物に居。詩小雅に止于樊。止于棘。止于榛云々。僧著蠅賦に返氣毒香無遠不到この心にかよふへし。

かほなごにぬれたる足して。僧著蠅賦に尋顔撲面云々。和漢其心通するにや。

夏むしいさを。八雲御抄云。夏虫は惣名也。火に入をいふ。後欄に夏虫の聲より外になごもよめり。又聲を夏虫といふ常の事云。童謡抄云。夏夜火にさびる虫を云。本文宵蛾拂燭といへり。

「訂」イ木万歳抄には。夏むしいさをかしらうたげ。火ちかうさりよせて物語などみるにさうしのみ。なごさびありくいとをかし。」

「訂」イ木によれば宵蛾也。又本文のまゝならば螢也。異撰の夕殿螢飛思消然とあるを思へるにや。蠅こは宵蛾なるべし。

弘云。ほたるのこは上にあり。此所は宵蛾をいふ云。

七月ばかりに。暑より例の清少の筆すさびなり。

也。さる心に道心おこしてつきありくらん。又おもひかけずくらき所なごにほとめきたる聞つけたるこそをかしけれ。はへこそにくきものうちにいれつけれ。あいぎやうなくにくき物は人々しうかきいつべき物のやうにあらねど。よろづの物に居。かほなごにぬれたるあしきてるたるなごよ。人の名につきたるは必かたし。夏むしいさをかしくらうのうへとびありくいとをかし。ありはにくけれどかるびいみじうて。水のうへなどをたぐあゆみありくこそをかしけれ」

七月ばかりに。暑より例の清少の筆すさびかたいとすしければ扇もちわすれたるに。あせのか

すこしかへたる 汗の香をうつしそめた
る心

【増】万歳抄云。こいに虫のつゞきに風の事な
いひ出しは。樂天詩句に秋風編々秋虫鳴と
あるより思へるにや。又蟻は本草に能知雨
候とあれば。かく蟻のこよりつゞけしに
や。又下文九十八段に風の段あればそこに
入べき詞にやいか

にげなきもの
似つかはしちらぬ事
しいかみたるかみに
源氏行幸巻に。わりなうしやかみとあるを
細流にちみたる云々。イホしちらみだ
るかみとは白髪風にや。しやかみを可用
月のいさあききやかたなき車に
月明なる夜は心してよき車こそ似合べけれ
その心。イあひ乗たる可し用
又さるくるまに
さやうの形もなき車に。よき色なる牛を
かけたる

【増】漢接。物をつまむこそ字鏡なごにつか
さあれば。推をつまみてくらふさまさとい
ふべけれ。こいはたは落推をひろふとい
ふなるべし。あげまきなどのしひるふさ
まの似つかはしけれ

【増】下祭のくれなぬ云々。万歳抄に刀自得選
のたぐひ。内侍更衣などにむかへていふ
此比はそれのみこそ
さやうのたぐひおほしきなり
ゆけひのすけ

すこしかへたるきぬのうすき引かづきてひるぬしたる
こそまかしけれ

にげなきもの

かみあしき人の白きあやのきぬきたる。しづかみたるか
みにあふひつけたる。あしき手をあかき紙にかきたる。け
すの家に雪の降たる。又月のさし入たるもいと口をし。月
のいさあかきにやかたなき車にあひたる。又さる車にあ
めうしかけたる。老たるものよはらたかくてあえぎあり
歩む。老女に不似合
く。又わかき男もちたるいと見ざるしきに。こと人のもと
にゆくとてねたみたる。老たる男のねまごひたる。又さや
うにひけがちなるをどこのしひつみたる。ばもなき女の
梅くひてすがりたる。けすのくれなるのはかまきたる。此
比はそれのみこそあめれ。ゆけひのすけのやからかりぎ
ぬすがたもいとやしけなり。又人におちらるうへへの

きぬはたおどろしく。たちさよふも人見つけはあ
なづらはし。けんぎのものやあるどたはむれにもどがむ。
六位蔵人うへのはうらばんとうちいひて。世になくさら
ひたらす。目をだに見あはせで。おちわなく人のうちわ
たりのほそどのなごに志のびて入ふしたるこそいとつき
なけれ。そらだき物したるきちやうに。うちかけたるはか
まのにおもたけにいやしう。さらしくしけんもとおしはか
らるゝなどよ。さかしらにうへのきぬわきあけて。ねず
みのかのやうにて。わがねかけしたらん程にけなきや
かうの人々なる。此つかさのほどはねんじてどりてよ
かし。五位の蔵人も

左右の衛門佐を云々。花鳥餘情云。親賢と
書てゆけひさあり。親は矢をいりしこ
をいふ。左右衛門は弓箭を帯するつかさな
るによりゆけひといへり
やうかりぎぬすかた
夜行狩衣姿云。夜行とは衛門府は内裏の御
門を守る故。夜の遊行をつとむる。則詠
に夜行沙塵塵忙云々
人におちらるうへのきぬはたおどろしくし
弓箭を帯して御門を守り。非常をいましむ
るつかさなれば人に恐れらる。衛門佐
は相常從五位なれば其袍赤色にて目録く色
なればおどろしくいふ。源氏浮標
の巻云。真清もおなと佐にて。人よりこそ
に物思ひなきけしきにて。おどろしくしき
赤ぎぬ髪いと清げんさあるも親賢佐の事な
り
【増】漢云。古へは正左右衛門各々その司る
所を守りしに。淳和天皇の比より檢非違使
の職を置たまひしより。諸官此職に接せら
る。故に宮城諸門閉禁中外檢遊行などな
役とする。その装束は近衛式にくはし
六位蔵人うへの判官
六位蔵人とは親賢の尉などの六位蔵人を録
たる。彼浮標の巻に右近のせうもゆけひ
になりて。こころしき隨身したる蔵人
なりといへる此類。うへの判官とは。彼
蔵人の衛門尉の檢非違使のせうになりたるをいふ。こ
原抄に委。又蔵人ならで昇殿の判官は源義經
うちわたりのほそどのなごに。禁中の蔵人。源氏に弘敷殿のほそどのいへるたぐひなるべし。さやうの所に居したる女房のもさへ。彼人にお

ぢらるゝ判官ゆげいのすけなごのまのびり居たるがにげなき事をいふ
きら／＼しからんことおしはからるゝなごよ
からんに。ましてかくおもたげにあら／＼しきはいやしき心の心をふくめたる詞云

「増」わかれかけたらん程ぞ
眞云。是は檢非違使なる故に忍びて女の許に行て。うへのきめを人に見認められぬ爲に。わざと繕れて轎などにかげし也
にげなきやからの人々なる 人におちらるゝ身の忍びありきしたるをにげなき云
五位の職人も 六位職人のみならず。五位職人は可い然殿上人さはいへども猶かやうの忍びありきは思はずべき事そ也。職原抄云。五位職人三
八五位殿上人中名家譜録殊異記元器用所補也云々

人ごあまたぬて
清少ごさきの女房途也
見やすからずよびよせて
めやすからずさ同心也。見にくき事云。彼
ほそごの、前行かふものごもに女房の物い
ふは見よからぬ事なれば見やすからずよび
よせてさいふ云
ふくろにいりたるゆみ矢たては
判官の人々の門後或は舞樂の道具なるべし

けしきばみやさしがりて
やさしき氣色にうちみみなどして。只なら
すさいひて通るさまなり

むなぐるま 人もらぬ車也。月夜には樂
車にて月見ありくこそ然べけれ。むなしき
車は似合す云。拾遺集物名にむな車「豊
嗣のまたもこなたにつなぎ犬のはなれてい
らんなるまつほご

もてあそび うつくしみ愛しむる事云

そより別の事云
ほうどのに人ごあまたるて。ありくものごもみやすから
ずよびよせてものなごいふに。きよけなるをのこ小舎人
わらはなどの。よきつゝみぶくろに。きぬごもつゝみて。さ
しぬきのこしなごうち見えたる。ふくろにいりたるゆみ
矢たてはこたちなどもてありくを。たがごごどふに。ついで
めて何がしどの、といひて行はいとよし。けしきはみや
めきたる心云
さしがりてまらざるもいひ。きよもいれでいぬるものは
いみじふぞにくきかし。月夜にむなるまありきたる。き
よけなるをこの。にくけなるめもちたる。ひけらるゝ
くけなる人の年おいたるが。物がたりする人の兒もてあ

そびたる
是より別の事云
どののりづかさこそなほをかききものはあれ。下女のき
づかさばかり浦山まき物ばなし。よき人にせさせまほし
きわざ也。若くてかたちよく。なりなごつねによくてあら
んはましてよからんかし。年老て物の例なごまりて。おも
なきさましたるもいとつき／＼しうめやすし。どののり
づかさのかはあいぎやうづきたらんをもたりて。さうぞ
く時にしたがひて。からごぬなどいませめかしうてありか
せはやごこそおほゆれ。をどこは又ずるじんこそあめ
れ。いみしくび／＼しくをかきしき君達もずるじんなきはい
どまら／＼し。辨なごをかしくよきつかさとおひえれ
ども。したがさねのしりみじかくて。するじんなきぞいと
わろきや

是より別の物たり云
まきの御さうし
立置云
頭

そのりづかさ、 判官の掃除さしあぶらな
ごの御する女官云。前註。禁秘抄云。主殿
司美藤委也。公人内可い神州之職云々。
女官は。女官をいふ云々

「訂」活本にはさう／＼しとあり。弘云。まら
らばまらけてみゆる云。見ばえなきと云。
白痴の儀に非ず
辨なごは。辨官はをかしくよき官とおもへ
ごも云。左右大辨中辨少辨すべて七人あ
り。百寮訓要云。陣の右筆諸事奉行する器
也。執柄三家の人などは近比いたくならず。
但其例はおほし。名家の人儒家殊に執する
官云

おもなきさましたる
おもてづよく物にうてぬさまする云。若き
物はうわ／＼しげなるに。年老てさやうな
らぬ心云
もたりて 持て入。そのもりづかさのほ
よきをむすめなごにもちてこの心云
いらぬ心云
女官も小袖に唐衣着る事禁秘抄に有
びいしくをかきしき君達

君達とは攝關の御子息華族なごを申す云
まら／＼し
「訂」活本にはさう／＼しとあり。弘云。まら
らばまらけてみゆる云。見ばえなきと云。
白痴の儀に非ず
辨なごは。辨官はをかしくよき官とおもへ
ごも云。左右大辨中辨少辨すべて七人あ
り。百寮訓要云。陣の右筆諸事奉行する器
也。執柄三家の人などは近比いたくならず。
但其例はおほし。名家の人儒家殊に執する
官云

まきの御さうし
立置云
頭

應御曹司 中宮殿の事。禁中にて中宮定
子のおはす所
頭辨 行成卿は一條院の長徳元年八月廿九
日補職人頭二年四月廿四日任三權左中
辨一職事補任

大辨見えばうち捨擧りて
大辨は辨内侍の忍びたる男なるべし。今清
少のいふ心は。行成のいかにむつまじく
らひ給ふとも。大辨が見え来らば辨内侍は
行成を打捨てゆかん物をささかしらす
増大辨誰とも知らず。職事補任云左大辨藤
良忠。永延二年二月廿七日補之。永祿元年
七月十三日任参謀辨知元。又云右大辨藤
右國永祿二年五月十四日補。これらの人な
るべし。勲物なしと万歳抄にあり
それさなせそつたらふ

たさび大辨見えたりとも我を見捨てさかた
らふと敵れての給ふ詞
いみづく見えてをかしき筈なごたてたる
よそめにもいみづく申と見えて夫婦さし
さ見えたる事はなくてさの心
行成の浅はかならぬ心を清少の見知たれ
ば。なべての人ならぬ中宮へも申せし
女はおのれをよるこふもの。これ藤原が
詞にて。史記にあり。智伯といふもの藤原
をよく見知てめしつかひしに。藤原子とい
ふ者智伯をころしければ。藤原が云。士為三
知し者一死。女為三説し者一容。今智伯知
し我。我必為三智伯一報而死といひて。藤原子
をいばんとて士はおのれをまける人のために死ぬといふ詞を後にしての給へるなるべし

べん行成卿ある女房と物がたりしゆふ
辨の。人と物をいとひさしくいひたち給へれば。さし出て
それはたれぞといへば。辨の内侍なりとのたまふ。なにか
はさもかたらひ給ふ。大辨見えはうちすて奉りていなん
物をとていへば。いみしくわらひて。たれかかゝることさ
を誰か清少に聞かせし
へいひきかせけん。それさなせそと。かたらふなりとの給
ふ。いみしく見えて。をかしますやなどたてたる事はなく
て。たゞありなるやうなるを。みな人さこのみしりたるに。猶
かくふかき御心さまを見しりたれば。おしなべたらずなど
御前にもけいし。又さまろしめしたるを。つねに女はあ
のれをよろこぶもの。ためにかはづくります。士はおのれ
をされる人のためにしぬといひたるといひあはせつゝ
申給ふ。とはたあふみのはまやなきなどいひかはしてあ
るに。十九夜につづく

清少の詞
行成の答
中宮の御方の女房
清少の詞
行成の詞
中宮にも見知せ給ふと。典に心ある詞
行成の清少
和名に遠江を止保太阿不三とよめり
行成をほめたる詞
中宮にも見知せ給ふと。典に心ある詞
行成の清少
和名に遠江を止保太阿不三とよめり

にげなきもの

いひあはせつゝ申給ふ 此古語男女の事に用ひてよくかなひたれば今清少中の事にいひあはせての給へり也
さほたあふみのほまやなき 遠江の濱や無之。奥に遠江介則光といふ人を清少のつらひし事あり。されば今行成卿のかくはの給へども。此遠江の濱あれば。まさに我にはうけひきかたしとの心にいふ也。清やなきさほまやはなき。此はまればこのころにや猶尋ねべし

わがき人々は只いひにくみ 若き女房達など清少と行成との中をそれみ
にくむさま
けすさま
気色の冷しく近付にくき心也。是も行成卿をそしる詞也

たい口つきあいぎやうづき 是より以下の人相はすなはち清少の機嫌をいへるなるべし
まいておとがひほそく 只にも行成をそしるにかやうにの給ふゆゑ
まして細く愛敬なき人は敵にしてそれむ也

御前にさへあしうけいする 中宮へも行成を説する事あり也。前に行成のこゝろをなしたるならすなど御前にも啓し。又さまろしめしたる書しは。こゝに人々のいかに悪く申上ても中宮はうけさせ給ふまじき事をいはんさて
まもなるをもよびのほせ 清少の中宮の御前にあられば。よびのほせて中次させ給ふ也

にげなきもの

わかき人々はたゞいひにくみ 見ゆるしきことどもなど
つくるはずいふに 此きみこそうたて見にくけれ。こと人のやうに
ぎきやうし。うたうたひなどもせず。けすさまじ
なごをそしる。さらばこれかれに物いひなどもせず。女は
はたてさまにつき。眉ひたひにかひかゝる。はなよこ
さまにありとも。たゞ口つきあいぎやうづきおとがひの
した。くびなごをかしけりて。こゝろくからさらん人なん
おもはしかるべき。とはいひながら。猶かほのいどにくけ
なるは心うしとのみの給へは。まいておとがひほそくあ
いぎやうかくれたらん人は。あいなうかたきにして御前
にさへあしうけいする。物などけいせさせんとて。其は
じめいひそめし人をたづね。まもなるをもよびのほせつ

行成の事之女にもの給ふ事なれなる也
行成の詞目
行成の事之女にもの給ふ事なれなる也
愛相ある事
其外の人相はかまはぬといひながら
旬行成の中宮へ申上る事あるにはもよび申次せし清少
を頼れし也

里なるには文かきてもみづからおぼして
清少の里亭にある比は。行成の文にても頼
みのみづからおぼして留守居などに申お
かひい。

おそくまわらばさなん
清少此事を啓しに遅くまわらば。我まやう
に申すも早く啓しに清少のまわらばやうにせ
よ。留守居などに行成の給ふ。

万事あるにしがひて用て。必き定めぬ
そよきに古より侍れば。我のみならずも
申次せ給へ。九條殿遺誠云。隨有用之
勿求美麗云々。衣冠馬車の事なら
れど此遺誠の心にて。何事もてなしたる
こそよきはすれといへる。

さてはかりなしは
彼論語に過則勿改改といへるはいかなる
事ぞ。かやうの折こそ思ひ出給はめこそ

さあらんはえ思はす
前に行成の詞に願のいさにくげなるは心う
しとの給ひし故。さやうにくげならん
は思はすとの給ひしゆふに見えまらせぬ
こそ。

けににくもぞなる
さやうに見にくはにくならんもあやな
ければ。我に願をな見えこそ。

冬のなほしの
直衣の色。夏より秋は二あね花田色。冬春
は白き襦の直衣等。されば春若用し給ふ
うへのきわかにて

よのつれの東帯には袍に下廻あり。是は袍
に下かされを除て。指貫なるべし。是を衣冠
さいふ。今行成も此裝束なるべし
殿上のさのみすがた

行成今頭辨なれば。殿上の貫首にて。そのか
し給ふべし。そのみすがたは直衣着給ふ新
もあり。

そのものも何もうづもれ
衾などをさめもやらず。押埋れたるうへに。
麻箱おはしまして。

けしきな見せ
こいにかく二所おはします氣色を。殿上人
にしらすな女房に被仰之。いふ事をきこ
しめさんさてなるべし

ふたりながらいざ
清少も式部も御供にまいれと被仰之

なほめでたき事ども
帝后の御ありさまのめでたき事を。清少と
式部といひあはせて

の肩に侍る比は行成の來ても申次を頼まるい
はねにもきていひ。里なるには文かきても。みづからもお
ぼして。おそくまわらばさなん申たるとまうしにまら
せよなどの給ふ。其人のさぶらふなどいひいづれど。さし
もうけひかずなどおぼはする。あるにまたおひさだめず

何事もめてなしたるを。こそよき事にはすれとうしろみ聞
ゆれど。わがもとの心の本性とのみの給ひつゝあらたま
らざる物は心なりとの給へは。さてはかりなしとはい
かなる事をいふにかとあやしがれば。わらひつゝ。中よし

など人々にもいはる。かうかたらふとならは何かはつ
ふは助て顔を見せぬ顔を見せよ。清少の詞之卑下の詞
る。見えなどもせよかしとの給ふを。いみしくにくげなれ

は。さあらんはえおもはじとの給ひしによりて。え見え奉
らぬといへは。けににくもぞなる。さらばな見えそとて。
自然清少を見給ふへ折にも

おのづから見つゝ。かほをふたきなどして。まこ
とに見給はぬも。まこゝろにそらごとし給はざりけりど

おもふに。三月つてもり比。冬のなほしのきにくきにやあ
らん。うへの衣かちにて。殿上のとのあすがたもあり。つと
より行成に見付られし物語。中宮の御方の女房なるべし。鹿の間

めて日さし出るまで。式部のおもとひさしにねたるに。
おくのやり戸をあけさせ給ひて。うへのかまへ宮の御前
出させ給へれば。おきもあへずまごふを。いみしくわらは

せ給ふ。からきぬをかみのうへにうちきて。どのものも
なにもうづもれながらあるうへにおはしまして。おんよ
りいでいるものなど御らんず。殿上人の露しらす。よりき

て物いふなどもあるを。けしきなみせそとわらはせ給ふ。
帝后たちへらせ給ふ。奥にてすがほにて行成に見られし事をいはんてなり

さてたゝせ給ふに。ふたりながらいざとおほせらるれど。
清少の詞。今かはなごつくるひてこそとてまあらず。いらせ給ひて

なほめでたき事どもいひあはせてるたるに。南のやり戸
のそばにき帳のてのさしいでたるにさはりて。すだれの
すこしあきたるより。くろみたるものゝ見ゆれば。のりた

九十一

なほ事どもいふに
猶よつた事も式部と語ふ。又直事
なほしき事。さしたる事もなき事
れ事なるべし

もろさにもたる人は
式部が事。式部はかくさまにむきてゐた
れば行成に頼も見せざりしと

なごかは見せの給ひしに
我がほを見まじきといひながら。いかさま
やうにつらく見給ひしと。前にさら
ばな見えそなごの給ひし事あれば

またうへのおはしつる折から
最前帝のおはしつる折よりかくれて見し
な。清少のしちざりしと
つばねのすだれうちかつぎ
清少の局の内へも行成の入給ひしと

やすき物なるべし
かゞるたるなめりとおもひて。見もいれて。なほ事どもを
いふに。いとよくえみたるかほのさしいでたるを。のりた
かなめり。それはさいふ調。清少の見遣し。のりたかなめり。
しどわらひさわぎてき帳ひきなほし隠るれど頭辨にこそ
おはしけれ。見えたてまつらじとまつるものを。いと口
をし。もろともぬるたる人はこなたにむきてゐたれば。か
ほも見えず。たぢいでいみしくなごりなくも見つるかな
どのたまへは。のりたかと思ひ侍れば。あなづりてぞかし。
なごかは見じどのたまひしに。さつくとどはといふに。
行成の調。女はねおきたるかほなんいとよきといへは。ある人のつ
ほねにゆきてかいはみして。又もし見えやするとてきたり
つるなり。またうへのおはしつる折からあるをええらご
りけるよとて。それよりのちはつばねのすだれうちか
きなごし給ふめり

殿上のなだいめん
花鳥餘情云。なだいめんは名調をいふ。殿
上の御さのわたる侍臣等に名をよばれて
名の事也。此次に瀧口のさのお申あり。
そのお申さいふも名調と同じ
うへの御局の東面に
中宮の上の御局に清少なごまわりめて名對
面をきくなるべし
耳おさなへて

「増」耳おさなへては。耳におさをなし
てさいふ意にて。今も童などのあまりに物
さわがしきことの有なりは。指にて小耳を
おさへ又はなせば。そのことさだかにき
こえぬを戲にする。そのものおさのかま
びすしきをかんその心もなきにおの心
やすき人ののりする名はふと耳にさまる
べし

又ありともよくきかぬ人
日比さやうの人有ともよくしちざりし人の
名のりなるべし
たき口の弓ならし

殿上の名調果て瀧口のさのお申あるべき
まなり。源氏夕顔巻に云。かう申すものは瀧
口なればゆつろつきんしくうちならして
さあり。河津云。亥一刻侍臣名對面延喜九年
よりおこる。同亥一刻侍臣奏之。後瀧口武士
名對面事有
また人々さぶらばればにや

瀧口ごも故障有て候せれば名調仕らぬよし
か表する
いかにさへばさる事
いかに候せぬと隠人の同へは。其故障の子
細を瀧口のことわり申なるべし

是より別段。名調之亥一刻にある事
殿上のなだいめんこそ猶をかしけれ。御前に人さぶらふ
をりば。やがてとふもをかし。あしおとどもしてくづれ出
るをうへの御つばねのひんがしおもてに。みよおとなへ
てきくに。まゐる人ののりにはふとむねつおるらんかし。
又ありともよくきかぬ人も。此をりにきよつけたらん
はいかゞおほゆらん。なのりよしあしきよにくよごだむ
るもをかし。はてぬなりときくほどにたまぐちの弓なら
しくつと言そよめきいづるに。藏人のいと高くふみこほ
めかして。うしどらのすみのかうらんたかひさまづき
どかやいふるまひに御前のかたにむかひて。うしろぎ
まに誰々が侍るとどふほどこそをかしけれ。はせうたか
うなのり。また人々さぶらばねはにや。なだいめんつかう
まつらぬよしそするも。いかにとどへは。さばることど
も申に。よごごてかへるを。よごひるはきかずとて。君達の
其故障の由を隠人きき上げて。是も隠人なるべし

まさひろは
源方弘左馬権頭時明男爲三伯父前和泉守致
明子誠源殿一イ文

方弘は楚忽の人なればそれ名諷せずさ敷
へば其故障の子細をもきかて必立べきさ
若君達のかまへてせしん

みづし所のおもたな
御厨子所御膳間。後涼殿の西の廊にあり。
朝御朝夕の御膳などを供する所也。四位の
殿上人別當たり。民部大輔五位を預さずさ
拾芥に有凡河内躬恒延喜の御厨子所の預な
るよし家集に見えたり

香をおき
方弘が香を楚忽に御膳備に置之
【訂】原本香をきてとありておもたなし。今異
本によりて補ひつ

はらへいひのしる
香におももの棚がれしとてはき拂ひ。誰わ
ざぞぞ別當預りなどののしるこ

いさほしがりてたが香にか
主殿司など方弘をいたはりて。香の主をい
ひかくしてしらすといふこ

よるなぞさおぼめかんはあしかりぬべけれ
ど
夜は隠によぶべきなれば片文字は覺えぬや
うならんはあしかるべし。然どもそれらみ
づからよばずさ禁中にては主殿司。其外
の所にては侍か職人所の者をしてよばせよ
かしと。攝家などにも職人所あればこ

はしたもわらはべなぞは
是らは下すながら名をいひなれてよぶもよ

をしへければ。いみじうはらだしがりて。かんがへてた
開留の放溜口の笑之君達に笑をこめてさへさいふ之是亦方弘が物たり
きふちねさへわらはる。みづし所のおものだなどいふも
のに。香をおきてはらへいひのしるを。いとほしがりて。
たが香にかあらんえまらずと。どのもりづかさ。人々のい
ひけるを。や。まさひろがきたなき物ぞや。どりに來ても
も猶さわる。こ。是より又にけなき物をいふこ
いとさわがし。わかてよるしきをこの。けす女の名を
いひなれてよびたるこそいとにくけれ。しりながら。何
どかや。かたもじはおほえでいふはをか。みやづかへ所
のつねねなどによりて。夜などぞさおぼめかんはあしか
りぬべけれど。どのもりづかさ。さらぬどころにてはさふ
らひ。藏人どころにあるものをるてゆきてよほせよかし。
手づからはこゑもしるきに。はしたもわらはべなぞは
されどよし
わかき人どちではこえたるよし。ずりやうなど おどなだ

しとこ
からめきたるは
【訂】源家。からめきたるは。源兵少
衛に。さしちね鳥のからこまになくさい
へるも植登こ

よるづよりは牛飼堂のなりあしくてもたるこ
そあれ
何よりも牛飼わらはの悪き所持こそ悪くあ
れとこ

こどもははされどしりにたちて
牛飼堂ならぬものも悪きはよかられど。そ
れはあさよりゆき苦しからずとこ

くろきはかまのすそこなる
すいてくろき傍なるべし。もこは末端に
て黒くすいたるこ

かりきねは何もうちなればか
狩衣のえり袖なども着馴てしはたれしを替
たるさまと

はしる車の方などに
車は走るに供はしづかにゆくが。しかも衣
服も古めきたるは。やさひ人のやうにて我
者とは見えぬと

やれなご時々うちしたれど
使人の衣服の破れたる事などは時々ありと
も着馴てなりあしからず罪なく見ゆらんは
さもあるべしとこ

そこにある人にて
其家につかふる人にて使者にて見るにも客
などの來ても。よき童のあまたあるはよし
とこ

ちたる人はふときいとよし。あまりやせからめきたるは
心いられたらんとおしはからる。よるづよりは。うしかひ
わらはのなりあしくてもたるこそあれ。こどものどもは
されどしりにたちてこそいけ。さきにつとまもられい
もの。きたなけなるは心うし。車のしりにことなる事なき
をのこどものつれだちたるいと見ゆるし。ほそらかなる
をのこずるじんなど見えぬべきが。くろきはかまのすそ
でなるかり衣は何もうちなればみたる。はしる車のかた
なごにのどやかたてうちそひたるこそわがものとは見え
ぬ。なほ大かたなりあしくて人つかふはわろかりき。やれ
なご時々うちしたれど。なればみてつみなきはさるかた
なりや。つかひ人などはありて。わらはべのきたなけなる
こそはあるまじく見ゆれ。家にゐたる人もそこにある人
とて使にても。せうらうとなどのいきたるにも。をかきさわ

つちになるものなどして
此詞心得たし字のたかへるにや多本を勸
〔増〕真云。地に居るは下人のと
之。下人は當時はその家人に對しては地上
に勝つものをもいふ例之
さばきてたるも
〔訂〕源按。上文よりの文法を考れば。これも
變のとこ。さばきて垂もあるべし。もしは
たる。の。一文字おとし。か
しもさたる物
格シト。杖權。すは杖杖などいふ。し
もさめきたる物之
車さめていだきいれまほしく
清少の車をさめてかの子をいだきいれた
きと。前に人の家の前をわたるさある首
尾なり
びらうげの車。別に註
はしすはうの下すたれ
端蘇芳下簾。したすたれのはしつたをす
はうにそめたる
さいのいさしるき
〔増〕源云。解しがたし。万歳抄にさいのいさ
しるきとものいみなどつてかざしもつ
意なるべしとあれど。是又解すべからず誤
字あるべし
弘按。さいはさくの筆談にや。さらば笏のい
さあたらしくて白きを肩の上の領にさして
歩行するとなるべし
つばやなぐひ
壺胡蘇平胡蘇とあり。矢をいれる。物之

らばのあまた見ゆるはいとをかし」

人の家のまへをわたるにさふらひめきたる男。つちにを
るものなどして。をのここの十ばかりなるが。かみをかし
けなるひきはへても。さばきてたるも。又いつく六つはか
りなるが。かみはくびのもどにかいくよみて。つらいとあ
かうふくらかなる。あやしき弓しもとだちたる物などさ
しあけらるる
さけたるいとつづくし。車とめていだきいれまほしく
こそあれ。又さていくに。たきもの。香のいみじくかへ
し。前二あせの。へたるさあり
あたらしき
ろうきよけなるはしすはうの下すたれのにはひいときよ
けにて。しちにたちたるこそめでたけれ。五位六位などの
下がさねのしりばさみて。さうのいとしろきかたにうち
おきなどして。とかくいきちがふに。又さうぞくし。つばや
ならひおひたるずるじんの出いるいとつぎくし。くり

廿九段

くりや女
厨女みづしをんなをいふなるべし
なにがしこの人やすふらふ
それどの人さまび尋るさまと
音聲の瀧
山城の北大原にあり
〔増〕類聚名所に紀伊國宇都郡下音無川と同
所とあり。拾遺集よみ人しらす。こひわび
のれをだにきかん聲たていづこなるらん
おとなしのたき
ふるのたき
布留瀧。大和にあり
法皇の御覽下
宇多法皇
那智瀧。紀伊國之
さいろきの瀧
鳥瀧。大和にあり
常なる飛鳥河きのふの瀧ぞけふはせなる
此瀧の瀧にてかけり
いづみ川。泉川。和也
寛弘抄云。いづみ川は崇神天皇の官軍。
更那羅山をさけて。進みて輪瀧河に至て。
武埴安産河を挾ていさみて各別瀧。故に時
の八其川を改て挑川といふ。今泉川といふ
は誤也。委日本紀
みいさ川
〔増〕古今六帖に貫之
「もしきの大宮ちかき耳さ川なかれて君な
き。わたるかな
おとなし川
〔増〕拾遺集二に元輔

や女のいときよけなるがさし出て。なにがしどの人
さふらふなどいひたるをかし」
たきは
おとなしの瀧。ふるの瀧は法皇の御らんじにかはしけん
こそめでたけれ。なちのたきはくまのにあるがあはれな
る也。とるるの瀧はいかにかしつかましくおそろしから
ん

川は

あすか川。ふち瀬さだめなくばかなからむといとあはれな
り。おほる川。いづみ川。みなせ川。みよと川。又なに事
をさしめのかしくきくけんをかし。おとなし川おもは
思ひもよらぬ名と
ずなる名とをかしきなり。ほそたに川。たまほし川。ぬ
き川。さばた川。さいはらなどのおもひはするなるべし。
なりのりその川。なとり川もいかなる名をとりたるにかと

「おさなしの川」さつひに流るるいはでも
の思ふ人のなみだに
きかまほし。よしの川。あまの川。このしたにもあるなり。

七夕づめにやどからんと。なりひらがよみけんもまして
をかし」

【増】蘇我抄云。美濃の國に伊豆實用といふ
所あり。伊豆を喜していへり
さいばらなどの。實川も澤田川も備馬樂の
律のうたひ物なれば。樂摩曲案抄云。備
馬樂は昔諸國より御調物を大蔵省へ納し時
民の口すさびにうたひける哥なれば備馬樂名付る。馬を備すさけるは御調物を貢る馬をかり置りて云々
ばらさは御調物を貢へる馬をかり置りて云々。余が備馬樂入殿に委しくいへり
弘云。此歌よろしさいばらさは神樂歌のさいばらさいふより移りて云々
備馬樂。實川。ぬき川の。せいやはらたまくら。やはらかにぬる夜はなくて。おやさくる云々
同。澤田川。さばだ川。袖つくばかりあさくれど。はんあさくれど。くにの宮人やたかはしわす
なざり川。名取河奥州云々

【増】古今六帖。此下界河内國野の南枚方の北にあり
七夕づめにやどからんと。古今類聚云。惟谷のみこのさもに時にかかりける時に天の川といふこころの河のほとりにありて。洞などのみける
ついでに。みこのいひけらく。狩して天の川原にいたるさいふ心をよみて盃はさせといひければよめる。在源平朝臣「時くちし七夕づめに宿
いらんあまのかはらに我はきにけり」伊勢物語にもあり七夕づめさは七夕寮也と牡丹花の御書にあり

卅一段

あさむつ橋。備馬樂に淺水あり蘇我抄
に飛騨にも山前にも名波に入云々
ひさつはし。津國之難波わたりの一橋とよ
めり但非名所一歎獨探和名ヒトツツシ
【増】古今六帖
つこの關のなにはの浦のひさつはし雪をしあ
へばあつちめもせず
うたづめの橋
【増】源按。散木集經部ふかを見ぬ
ふみみつさきにつけてもうたづめのはし
たなきまでゆる。袖かな
此歌いづくも其所はしるべかられども。
此枕草紙によりてよめるにや。うたづめう
たづめいづれ一つは誤なるべし

あさむつ橋。あがらのはし。あまびこの橋。はまの
はし。ひとつ橋。さの舟橋。うたづめの橋。とらも
のはし。をがみの橋。かけはし。せたの橋。木曾路のは
し。ほりえの橋。かさぎのはし。ゆきあひの橋。その
はをつの浮橋あり。入雲に下野云々
のうさばし。やますけの橋。一すぢわたしたる棚橋心せ

卅二段

【増】河百首に祭呂
我妹子にあふみなりせばさりとばかりかふみも
みてまじとるきの橋。此歌によれば近江國なるべし
ながの橋。小川橋新撰。名所集に陸奥とあり。入雲御抄には氣樂と云々
かけはし。史記。漢書。樓道今謂之關道
ひさぎのはし。入雲抄天の川也云々。淮南子烏鵲填河成橋度三織女云々。【増】古今六帖「中空に雲もなりけんかさぎのゆきあひの橋に
あからめなせ。鶴の橋。入雲抄に津の國云々。夫木に周防又土佐といへり。いづれ。
ゆきあひのはし。是もかさぎの橋と同。孫遊式云。雄漢鶴之會橋云々
やますけの橋名を問たるな。イ本山菅の橋一すぢわたしたる棚橋心せばければ名を問にをかしと云々。【訂】原本「一すぢわたしたる棚
橋心せばければ」の十六字なし。今異本並に万葉抄に從ひて加へつ

ほければ名をさへたるをかし。うたづめの橋
【増】古今六帖
東路のいさめのさは初秋の長夜をひさり
あすわが名ぞ
さほちの里。大和の十市里にや。一説入雲
御抄云。さほちの里は只違き事云。袂衣に
縫帳をさほちのさといふあり
【増】拾遺集雜賀
くればさく行て。たらん途ここのさほちの
さは住うかりけり
ふしみのさは。非徒抄頼阿云。後拾遺都人
くるればかへるさよめるは山城の國云。菅
原や伏見里は大和云
ながのさは。入雲云。大和。無字にもさ
さうぶ。鳥居云
こも。藤。蘇我抄。蘇和名
あふひ。葵也。二葉草もも葉草ともいふ云。
賀茂の神山などに生て御形の日の神事を用
ひる云。世に向日葵などいひて花をもてあ
そぶ草とは別云
おもたか。御湯

卅三段

【増】古今六帖
いさめの里
【訂】原本「一すぢわたしたる棚
橋心せばければ」の十六字なし。今異本並に万葉抄に從ひて加へつ

草は
さうぶ。こも。あふひいとをかし。祭のそり神代よりして
さるかさしとなりけんいみじうめでたし。ものいさよも

心あがりしけんさおもふに
面高さいふ故心あがりしけんを思えて
名面白き也。曲禮曰。凡視上於面二則
眩呂氏曰。上於面二者其氣隨知其不
下也。八雲に實九里云々。和名云。三稜
草ミクワ
こたに。源氏宿木巻に。こたになど引さ
せ云々。河海に水燭。葛の類之云々。古今
の物名に「ちりねればのちばあくとにさ
めるは苦丹とけるな。飛鳥井榮雅の
にさ同前の由の給へり
あやふ草はきしのひたひに
則云。觀身岸額離根草
いつまで草
「増」細河百首に公實
「かべにおふるいつまでくさのいつまで」信
れすさふべきまの原の里
事なし草。河海草の一名の由見ゆ。此枕
双紙には。此次に別に忍草を出されたれば
又一種あるにや尋ねし
「増」古今六帖に
「こりすまの松にはいさし年ふれさなし草
ぞおひしけりける
「八にのみいはれの池のあやなくにこさか
草のやさにさそはん
「君みてしほのふるやのひさしにはあふ
さなしの草をひける
「君のみながふるやの葉なれば人を忍ぶの
草ぞ生ける」六帖にあり。忍草とは垣衣と
かけり。雪の類也。宿の新垣などに生るこ
つばな。葉花。津渚の花にや。童蒙抄にあり

なればこ
いとをかし。おもだかも名のをかしき也。心あがりしけん
とおもふに。みくり。ひるむしろ。こけ。こたに。雪まのあ
を草。かたはみ。あやのもんにても。こどもよりばをかし。
あやふ草はさしのひたひにおふらんもけれたのもどけな
くあはれなり。いつまで草はおふる所いとばかなくあは
れ也。岸のひたひよりこればくつれやすけなり。まこと
のいしほいなごればえおひずやあらんとおもふぞあはるき。
事なし草は思ふことなきにやあらんとおもふもをかし。
又あしき事をうしなふにやといづれをかし。しのぶく
さいとあはれなり。屋のつま。さし出たる物のつまなど
あながちにおひいでたるさまいとをかし。よもぎいとを
かし。つばないとをかし。はまの葉はましてをかし。ま
ろこすけ。うきくさ。あさぎ。あそつら。とくとといふ物
は風にふかれたらん音こそいかならんこおもひやられて

卅四段

さちと同所にあり。八雲にはちばなとあり
まるこすけうき草
イ本此次にこまあられきたかせとあり。
次の番の題はこいふ所にしるべきを衍文なる
べし
ならしは。楳栗は木也
別にならばなごいふ草あるにや尋べし
おほきなるさちひさきと
杜子美詩。點溪荷葉疊青錢。こいへる風情
にやイ本蓮は万の草よりも世にすぐれめで
たし。妙法蓮花のたごにも。花は佛に奉
り。みはず。につらぬき念佛して往生極樂
の縁とすれば。又花なき比みどりなる池
の水に紅に咲たるもいとをかし。されば萃
屬紅と詩にもつくりたるにや云々
やますけ。世にせうがひげといふ草也。童蒙抄云。夢門冬さかけり。万葉第四「やますげのみならぬ事を我によりいはれし君は誰とれらん。
八雲抄云。山すげは實ならずといへり。又みなるさ。普通の山すげにあり云々
ひかけ。花鳥餘情云。日蔭草をばさかりこけともいふ。和名云。蘿ヒカケ。女羅也云々
別物也
はまゆふ。童蒙抄云。漬木綿とは芭蕉に似たる草の三熊野の道に生る。皮のうすくて。くまなるさ也。入丸も油のはまゆふも。へな
るさよめり

をかしけれ。なづな。ならしはいとをかし。はすのうき葉
のらうたけにて。のどかにすめる池のおもてに。おほきな
るとちひさきとひろごりたよひてありくいとをかし。
とりあけて物おしつけなどして見るもよにいみじうをか
し。やへむらら。山すげ。やゆる。ひかけ。はまゆふ。あし。く
ずの風にふきかへされてうらのいとしろく見ゆるをかし

集は 古今 後撰

古万葉集。万葉集の事。
清輔袋双紙云。此集未代之八冊云古万葉集。
源順集にも古万葉の中に云事あり。是有
新編万葉集若くは菅家万葉集等之故歟。新編
万葉集は。延喜御時抄に出之云々。五巻也。
又云万葉集者或稱二種大臣二諸兄也。稱家持云々
古今。むかしは本々まさらざるを定家卿貞應嘉祿の奥書の兩本を証本に定させ給へり。内にも貞應本を二條家には用らる。延喜の御時賈之以
後撰。天曆五年十月。製置五人撰之。此本も朱雀院の詮議の本。籠永の青表紙の本などありしか。定家卿の貞應二年の本。天曆二年の本等を
証本と用ふ。袋双紙云。鶴守道高云。古今後撰拾遺を號三代集。以往相三加万葉集二號三代集二而拾遺出來之後集三万葉集二用云拾遺云々是也

哥の題はよのつれの題のみならず。藤原
にむべき物とも見ゆ
くす 葛也
こま 駒也
あつらひ 常盤草

哥の題は

みやこ。くす。みくり。こま。あられ。さよ。つはすみれ。ひ
かけ。こも。たかせ。をし。あさぢ。しば。あまつら。なし。
なつめ。あさがほ

草の花は

なでしこ。からのばさら也。やまどのもいとめでたし。をみ
なへし。きぎやう。菊のところくうつろひたる。かるか
や。りんどうは枝さしなごもむつかしけなれど。こと花み
な霜がればてたるに。いと花やかなる色あひにてさし出
たるいとをかし。わきととりたてし人めかすべきにもあ
らぬさまなれど。かまつかの花らうたけ也。名ぞうたてけ
なる。かりのくるはなごもじにはかきたる。かにひの花色
はこからねど。藤の花にいとよく似て。はると秋とさくを
かしけなり。つはすみれすみれおなじやうの物ぞかし。お

【訂】草の花は
弘云此段万歳抄には。上の集はの前に出た
なでしこのはさら
唐摺子名聖夢あり
なみなへし 女郎花文集
女倍之新撰万葉
酒の所々つろひたる
古今集秋下 平良文
「秋をおきて時こそ有けれ菊花うつろふから
に色のまされば
りんどう 龍膽也。古今の物の名に。花ふみ
ちらす鳥うたんとさよめり。基俊の悦目抄に
「りんどうの花を手向るき法師の煙いむこふ
はたふさかりけりさ誹諧哥によめり
かまつかの花 即ち此草紙に鷹の来る花と
書よしいへり。世に鷹來紅さいふ物にや
【増】藤原。藤原の意にて形状をもて見たて
の名なるべし。万歳抄に俗に云葉鶴冠と
あり
かにひの花 古今の物名にあり。雁群や。
よのつれのがんひは藤にも似す。春秋にも
さかす。但異本にかるひの花とあり是は藤

絆にはあらで別の物にや
【改訂】かにひ 岩非の字の古音今は雁皮の
字を用ゆる落葉の灌木にて皮を以て紙を
造る雁皮紙さいふ。仙翁花はその漢名。

おいていけばおな
【訂】原本おいていけばおし。とあり今異本に
よりてなもトを補ふ
眞云。こは異本なるおなトとある方より
し。意は董の老て衰ひ行けば。盛衰もたゞ
の董も同トやうになるなごはうしと
しもつけのはな 花うす紫にてこでまりに
似たり。拾遺の物名に「種てみる君だにし
らぬ花なれば我しもつけん事のあやしき」
さよめる物と
にくきみのありさま
夕顔の實は瓢也。なりひさこさいふ物なり
なごてさばたおひ出けん
いってかきやうには又生出し事ぞと
見てくらなきに
御幣也。藤の花のさま御幣に似たればなる
べし。本語ある可也
【増】ある人云。信濃の諏訪御射祭さいふあり。
七月七日藤の種にて幣をつくる。是を藤の
花のみてくらさいふ
もえしすいすいにはさあり。こはえも
ト藤たるなるべし。異本にもえしとあるぞ
よるしき。万歳抄にもえしとあり。芽を
出したるさまは藤に劣らぬと
ほさきのすばうにいさこき
藤の色の藤芳に似しやうなるも。是をさす
うのすきさいふと

より以下藤原と他本を見合すべし
いていけばおなじなごうし。しもつけのはな。夕がほはあ
さがほに似ていひつゞけたるもをかしかりぬべき花のす
かたにて。にくきみのありさまこそいと口をしけれ。など
てさばたおひ出けん。ぬかつきさどいふものゝやうにだ
にあれかし。されど猶夕がほといふ名はかりはをかし。あ
しの花さらに見どころなけれど。見てくらなきといはれた
る。心はへあらんとおもふにたゞならず。もえしすいすき
にはおどらねど水のつらにてをかしようこそあらめと覺ゆ
これにすいすきをいれぬいとあやしと人いふゆり。秋の野
のおしなごたるをかしさはすいすきにこそあれ。ほさきの
すばうにいとこきが。朝きりにぬれてうちなびきたるは
さばかりの物やはある。秋のはてぞいと見どころなき。色
々にみだれ咲たりし花の。かたもなくちりたるのち。冬の
すさまでかしらいとしろく。おほどれたるをもしらで。む

「増」漢接。こゝに種まきのすはうにいさきき
さいへるは。花にて見たてしのみ。然る
な後世ますほのすいき。まそほのすいきな
ざいふをのありて。長明無名抄にもくはし
くいへれど。昔古語をしらぬ人だちなほ
いさあきな事ども。説蘇芳なりとい
ふも。此草紙より云事にて誤。蘇芳の字
音にいかでまの詞をむらしむべきや。今按
にまそほさいふそたしき詞なる。まそほ
のそほはあけのそほ舟なごいふそほにて。
あかきこの古言。さればこそまの蘇
なば冠らしめたる。まそほは轉語。か
くばかりのたやすき詞を解き得ずして。爾
ふる道をあすさしは。しさいにぬれけ
ん古人の心。しさいこさやいはん。おろ
なりさやいはん
おほざれたるをもしらで
浮氏あづまに。おほざれたるこゑしてさ
あり。孟津抄にほざけたるこゑあり。蘇
の蘇のそいけひろがりたるなりあしきをも
しらで猶ほつをばなのむかしおもひ出は
に。なびくさ
かひるきたる人に。そ
かいひるこりたてる人のありさまに似たる
こゑ
よそふる事ありて
此蘇を老はてたる物のさまに思ひよそ
ふる事あらは哀ならんこゑ
さなしてのわきて
後撰之「行」へり折てかざらん朝な。鹿たちならすの秋萩。又「さ」を風の立ならすの秋萩におけるしらつゆの我もけぬべし
からあふひ。府安備馬楽流練の詠物に。しらほひとあるも。宣耀抄云。向日葵さて。日の影に。たぶくも云々。文選廿九陸士衛。園葵詩。日
葵北園中。葵生御製。朝榮東北。夕照西南。註李善曰。淮南子曰。人於道。葵之與日。 「増」千載集に葵。一あふひ立てる日は葵の心。
なげきすすたにまづなびくらん」

かしおもひ出がほになびきて。かひろきたる人にこそ
いみじうにたれ。よそふる事ありて。それをしもこそあ
はれどもおもふべけれ。萩はいどいろふかくえだたをや
かひさきたるが。朝つゆにぬれて。なよくとひるごりふ
したる。ささしかのわきてたちならすらんも心ことなり。
からあふひはとりわきて見えねど。日のかげにしがひ
てかたおくらんぞ。なべての草木の心とも覺えてをかし
き。花の色はこからねど。さく山おきにはいはつゝじもこ
となる事なけれど。をりもてぞ見るとよまれたるさすが
にをかし。さうびは。ちかくて枝のさやなどはむつかしけ
れどをかし。雨などはれ行たる水のつら。くろきのはしな
どのつらにみだれさきたる夕はへ」
夕映夕染夕に色のます
水はほざり。黒木は皮つきの水
枝に針のある事
山石欄
例の書きたる文様にや

冊七段

いはつゝし。白氏文集十二云。山石欄一名山鶴一名杜鵑花枝々
し紅そめの色に似たれば
漢接。此蘇の作者も。此草紙の作者も。同時代の女房なるを。かく引出ていはれつるは如何とも思はるれど。かゝる例もあることにて。此ほご
の人たちは。そのをりに人口にふれし語をば。同時代の蘇にも引替なごにせし。こと見たり。蘇の物語に。千載集の匡房細のうるまのし
まの人なれやの哥をひけるなごも思ひあはすべし
くろきのほしつら。黒木階面也。鹿相なる階のほざりなり。同詠云。階底番籬入夏開
おほつかなき物。物の分明ならず心もさな
き心
十二年の山ごりのほうしのめおや
後撰集十詞書に。男のほご久しうありてま
うできて。御心のいさつらきに。十二年の
山籠りしてなん久しうささざりつるこ云
々。比叡山なごに禁足して。こゝる事。此草
紙の心は山法師の久しく禁足してあるに。
父は行てり相見るべきを母は登山かなはれ
ば。十二年のほごおほつかなるべし
「増」下文にもほごなるもさある段に「十
二年の山ごりのほうしのめおや」とあ
り。類聚國史に弘安十三年六月壬戌。傳燈
大師位最澄首。夫如來制戒。隨機不同衆生。
發心大小亦別。伏望天台法華宗。年分度者
二人。於比叡山毎年春三月先帝國忌日。依
法華經制令。得度受戒十二個年。不輒出山。
四種三昧令得修練。然則一乘戒定。永傳
朝。山林精進速勸摩訶許之。
又云。天長八年夏四月丁丑。天台之宗年分度者。受戒之後一十二年不輒出山。四種三昧令得修練之故也
やんごさなき物もたせて。無止ヤゴトナ江次第に書り。一は大事にまふ物を持て他所へやりし。
人のかほ見しらぬ物見。祭の供人なども見知てこそは一入もしるるべければこ

おほつかなき物
十二年の山ごりのほうしのめおや。しらぬ所にやみな
るに行たるに。あらばにものどあるとて。火もともさでさす
がになみたる。いよいよできたるもの心も知ぬに。やん
ごとなき物もたせて人のがりやりたるにおそくかへる。
ものいはぬちこのうりくつがへりて人にもいだかれずな
きたる。くらさにいっごくひたる。人のかほ見しらぬもの
見
うつくしき色も見ればこ

冊八段

たさしへなき物
たさへむたなくはりたる心
あめさ。イ本此次に火さ水さ。朋さ

たさしへなき物

とやせたる人さ。髪長き人さみしき人さ
あり
おな人ながらも心ざしうせぬるは
白氏文集大行路に人心好悪苦不常好生三羽
毛一翮生瘡。
又云妾願未改。君心改。
又云君不見左納言右内史朝承。風塵隨死。
行路難不在。水不在。山只在。人情反覆間
さいへるさまに似たり
いれさわかしく
いれわさき事。イニいれさわかしくさあるも
おなし

忍びたる所にては
是より又別の事の鳥の興ある事なふ
さび
けそ
増「原本にけせうと有は假字たがへり今改
つ。けそは願證の文字をけり。上の一
巻なるけそを註を現合すべし

空のいみしく
前に夏の夜の事なひたれば。こは又冬の
事なふ

夏と冬と。よるとひると。雨ふると日てると。わかきと老
たると。人の笑ふとばらだつと。くろきとしろきと。思ふ
とにくむと。あるときばだど。雨と霧と。おなじ人ながらも
心ざしうせぬるはまことにあらぬ人どぞおほゆるか。
鳥のうへにてたさしへなき事なふ
ときは木おほかる所に。からすのねて。夜中はかりにいね
いさかなく
さわがし。あぢまどひ木づたひて。ねおびれたるこゑに
なきたるこそ。ひるの見めにはたがひてをかしかしけれ。しの
びて遠たる所
びたる所にては夏こそをかしかしけれ。いみじうみじかき夜
のいとばかなくあけぬるに。つゆねずなりぬ。やがてよる
づの所あけながらなれば涼しう見わたされたり。猶いま
すこしいふべき事のあれば。かたみにいらへどもするは
どに。たよあたるまへよりからすのたかくなきてゆくこ
そいとけそうなる心ちしてをかしかしけれ。冬のいみしく寒
きに。おもふ人どうづもれふしてきくにかねのおこのた

つきんくなるまに
次々世に一番鳥二番鳥などいふ次第く
けさう人にて
此段は供なる人の心なきをつれまじき事な
いふに。懸想人の供の心なきは勿論。只
たらふ人などの供の心なきもわるき事な
ふ
すのうちにてあまた人々
清少は塵中にて女房ごち物がたりするに。
彼來たる人も入て領にも歸るけしきなげな
る事
かのいもくちぬべき
河海云。六帖「かのいもくちぬば又もす
わかへんうき世の中にかへらすも哉」晋の
王質が石室山にいたりて一局の碁を見るほ
どに。斧の柯の朽たりし事。述異記に委
ながやかにうちながめて
かのいもくちぬべしと詠吟せし。イ本
ちあくびては長あくびする
又さはいろにいでいはいはす
さやうに我らは煩惱苦惱など聞にいでいはい
えいはすさなごなしやかにいふ。さ
はぬやうにてあていふ詞
したゆく水のさ
六帖「心にはしたゆく水のさかへりいは
で思ふぞいふにまされる」此うたはならの
帝盤手さいふ盤を愛して大納言にあづけさ

○増訂枕草紙春曙抄卷之三

だ物のそこなるやうに聞ゆるもをかし。鳥のこゑもはじ
めははねのうち口をこめながらなけば。いみしう物ふ
かくどほきが。つきくになるまへに。ちかくきこゆるも
をかし。けさう人にてきたるはいふべきにもあらず。た
うちかたらひ。又さしもあらねどおのづからきなどする
人のすのうちにてあまた人々あて物などいふに。いりて
とみに歸りけもなきを。ともなるをのこわらはなど。をの
るにのいも
のえもくちぬべきなめりと。むつかしければながやかに
うちながめて。みそかにとおもひていふらめども。あなわ
びし。ほんなうくうかな。いまは夜中にはなりぬらん
どいひたる。いみしう心づきなく。かのいふものばどかく
えすさ
もおほえず。此ある人こそをかしう見きよつる事もう
するやうにおほゆる。又さはいろにいでいはいはすあ
ると。たかやかにうちいひうめきたるも。したゆく水のさ

せ給へるに大納言其たかをもちしてと申出
 ざる事を申し申されたれば。帝物の給は
 せ給はでいばでおもふにまされ
 どの給ひしに。後人上句をさましくつた
 るよし大和物語にあり
 すいらい 透垣也
 あまたあらん中にも
 にも。さやうに心なき者にはあらぬを心
 ばへる。よく見て召運ありくべき事ぞこ

ふにまざるものなごん
 いとをかし。たてしとみすいがいのもとにて。雨ふりぬべ
 しろかし儲す詞
 しなごきこえたるもいとにくし。よき人きんだちなどの
 供人之
 ともなるこそさやうにはあらね。たゞ人などさぞある。あ
 なきと
 またあらん中にもこほるばへ見てぞめてありくべし

卅九段

しうとめにおもはるいよめのみさ
 莊子が外物篇に。婦姑勃然といへるに似た
 り。唐夫人の姑に乳をふくめしたぐひ。離
 もこひれがふべき事
 しらつれのけぬき
 「増」殿の鏡子云。俗云クヌキ
 ったは
 (改訂)かたは片秀の義にて偏頗の意なり。
 眞秀の反にてすべて完全ならぬをいふが
 本なり。
 おなす所にすむ人の
 入願てはおのづから敬の心をさるへてたが
 ひに恥る心なくなる物なれば。論語に晏
 平仲善與人交。久而敬之と孔子のほめ給
 へる。まごにありがたき事なるべし。佛
 道にも慚愧は衆善之衣服といへり。慚はみ
 づから恥て悪行をせぬ。愧は他人をばち
 て。事なやむる心。人として此慚愧の二
 つなくば。世間は父母兄弟妻子もなく知識
 尊長大小の分ちもなく。畜生と同等也と
 經に説く
 男も女も法師も契ふかくて
 男女の中につきらず。法師もよく契りかた
 らふを和合僧といへり。大和物語にのうさ
 んの君さいひける人淨蔵さはいさになう思
 ひかはす中なりけり。かぎりなく契りて思
 ふかたをいひはしけり云々
 かいれりうたせたるに

○増訂枕草紙春曙抄卷之四

ありかたきもの

しうとにほめらるゝむこ。又しうとめにおもはるゝよめ
 のきみ。ものよくぬくるしろかねのけぬき。しうそしらぬ
 人のすさ。露のくせかたはなくて。かたち心さまもすられ
 て。世にあるほどいさゝかのきさなき人。おなじ所にすむ
 人の。かたみればぢかばし。いさゝかの隙なくよういした
 りと思ふがつひに見えぬこそかたけれ。物語しふなどか
 きうつすはんにすみつけれぬ事。よき双紙などはいみしく
 心してかけども必こそきたなげになるめれ。男も女も法
 師もちぎりふかくて。かたらふ人の末まで中よき事かた
 し。つかひよきずんぞ。かいねりうたせたるにあなめでた
 と見えておこす。内のつほねはほそどのいみじうをかし。
 上小節 是より以下はそのいよき故をいふ
 かみのこしどみあけたれば。風いみしうふき入て夏もい

源氏末緒花にいかれりこのめるさあり。河
海云。操練は両面ふくさ強にて中重なし。河
紅色也。玉葛登の河海云。打殿強殿などい
てあり。男女の装束。うちのリ本林云。板
びきのりなどは各儀なり云々

ほそごの 細殿河海
三光院御殿。感。ホソトノさよめり。舊記に
船をホソトノと點す。是も其心か御注
びやうぶのうしろなごに

【訂】びやぶの云々より以下。しきの御さし
にの條。又あらずなごいへば。さあるに同
る數十行異本になし

【訂】おまびを原本にはなよびさかきて小指
さしたるは誤之。こは指のよにておまびさ
かくべし。土佐日記に「おまびもそこなは
るべし」源氏筆木の巻に「おまびをかひめ
て」なごあり

【訂】おまびを原本にはなよびさかきて小指
さしたるは誤之。こは指のよにておまびさ
かくべし。土佐日記に「おまびもそこなは
るべし」源氏筆木の巻に「おまびをかひめ
て」なごあり

【訂】おまびを原本にはなよびさかきて小指
さしたるは誤之。こは指のよにておまびさ
かくべし。土佐日記に「おまびもそこなは
るべし」源氏筆木の巻に「おまびをかひめ
て」なごあり

と涼し。冬は雪あられなどの風はたらひて入たるもいと
をかし。せはくてわらはべなどののほりたるもあしけ
れは「びやうぶのうしろなごにかくしすたれば。こど所
のやうに聲たかくわらひなごもせでいとよし。ひるなご
もたゆまず心づかひせらる。夜るはたましていさゝかう
ちとくべくもなきがいとをかしきなり。くつのおどの夜
ひとよ聞ゆるが。とまりて。たゞおまび一つしてたゞくが。
其人なゝりとふとしるこそをかしけれ。いと久しくたゞ
くは音もせねは。ねいりけると思ふらん。ねたくすこ
しうち身じろくおど。きぬのけはひもさなゝりとおもふ
らんかし。あふぎなごつかふもしるし。冬は火をけにやを
てれいらのさ聞しる心云
【訂】おまびを原本にはなよびさかきて小指
さしたるは誤之。こは指のよにておまびさ
かくべし。土佐日記に「おまびもそこなは
るべし」源氏筆木の巻に「おまびをかひめ
て」なごあり

たらふ人々の聲をきいしさまなるべし
こへさしもおほはぬ人も
此方より戸をあけたればこの扇へんこまは
いはぬ人も先立とまると
【増】源按。此一句は上のしひてこへ心さ
し來たる人のことにかへりていふ云
すそのつまずこしうちのさなり
几帳のもしより女房のきぬのすそのはづれ
のすこし見ゆるさま云
なほしのうしろにほころび
【増】源按。直衣に綻の出來たるも知らざるさ
まないふ云
うけざりて 河海云。語
赤袴。はむかる事もなきいふ云。我はさ
思へる林云。此双紙の心はさやうに我はが
ほにはえたるらず。少そばめぬたるさま云
袖うちあはせて 袖かき合せてさいふ心云
つしめるさま云
いろくのきぬどもこほし出さしぬきのわき
なごより下着の色々に見えたるさまなり
もかうのしよ
【増】源云。もかうは今の水引などの類にて。
天井にかけてたれたるもの云。よりてもい
うさ九帳との間少しあきたるをいへず

どうたふには。たゞかねとまづあけたれば。こゝへとしも
おもはぬ人もたちとまりぬ。いろなきやうもなくてたち
あかすもをかし。みすのいとあをくをかしけなるに。きち
やうのかたびらいとあさやかに。すそのつまずこしうち
かさなりて見えたるに。なほしのうしろにはころびたえ
ずきたる君だち。六位の藏人のあをいろなごきて。うけは
りてやり戸のもしなどにはそはよせてえたるらず。へいの
前などいしろおして袖うちあはせてたちたるこそをか
しけれ。またさしぬきいとことう。なほしのあさやかに。い
ろくのきぬどもこほし出たる人の。すをおしいて。な
からいらたるやうなるも。とより見るはいとをかしから
んを。いとさよけなるすゞりひきよせて文かき。もしは鏡
とひてびんなごかきなほしたるもすべてをかし。三尺の
きちやうをたてたるに。もかうのしもはたゞすこしぞあ

たけのいさぐみくみらいらん
質たけのすぐれ高き人ぞ。一向にせい短
き人などは何れ几帳にはづれやせんい
あらんぞ。

まして 前にすべてをかしをかしけれなど
あるをうけてまして
りんどのまつりのでうがく
宗祇。香木の別助云。臨時の祭は北祭の
事也。十一月四也。調祭は午の日也。大内
にてある事也。愚案江次第十日。寛平元年
十一月廿一日有。賀茂臨時祭事。右近中將藤
原時平爲使云々。これ初めにや。猶其次第
等委。其祭に舞樂あるを禁中にて先試樂有
て。次に調祭にて樂人舞人等をさしめさ
せ給ふ事也。

そのもりの官人などの長き松
去殿司は炬火庭火などをつかさざる物也。
江次第臨時祭の試樂に。主上入御の時若及二
昏黒。主殿官人等炬火於庭中。さあり。これ
調祭の時ならねども大つた其さまは是に准へ
て知べし。
日のさうぞく。源氏には日のようひさある
を。細流に東帯也。直衣は衣袋也。東帯は
靈のよそひ也。
殿上人の隨身とも
中將少將などの召具せられし隨身也。イ本
供の隨身さあるは彼君達の隨身也。
あらたに生るさみ草の花
うたひ物なるべし。大鏡云。一條院の御時
の臨時の祭に。御前の事果て。上達部だち
の物見に出給ひしに。外記のすみのほど過

る。とにたてる人。内にもたてる人と物いふかほのもとにい
どにくらあたりたるこそをかしけれ。たけのいとたかく
みじからん人などやいかうあらん。なほよのつねのほ
さのみぞあらん。ましてりんどのまつりのでうがくなど
はいみしうをかし。そのもりの官人などの。ながき松をた
かくともして。くびはひき入てゆけは。さきばさしつつけ
はかりなるに。をかしうあそび笛ふき出て心ことに思ひ
たるに君だちの日のさうぞくして。たちとまり物いひな
どするに。殿上人のすあじんどもの。さきをしのびやかに
は高くはさきをわけて我主君のためばかりに聲みたくささおふ
みじかく。おのが君だちのれうにおひたるも。あそびにま
じりてつねに似ずをかしうきこゆ。夜ふけぬれば猶あけ
樂人などの歸るを見ん待也。
樂人などの歸るを見ん待也。
てかへるをまつに。君だちのこゑにて。あらたにおふると
み草の花どうたひたるも。此たひはいますこしをかしき
に。いかなるまめ人にかあらん。すらくしうさしあゆみ

させ給ふさて。のささばなくて口すまひの
やうにすたはせ給ひし。さみ草の花につ
みいれて宮へまわらんのほどを例のほ
はりたるやうに承たりし云々。是此双紙と
おなす詠物のつゞきなるべし。さみ草は積
の事と梁塵歌抄にあり。
〔改訂〕さみ草の花。風俗歌に荒田に生ふる
さみ草の花手に摘みれて宮へまわらむ
さあるを引けるなるべし。さみ草は富草
にて稻の異名なり。其の人に富の附くよ
り名とすといふ。
まめ人。〔増〕演按。まめ人は愚識の人の意にてはめたる詞なるを。こゝには轉して正直すきたるこゝせり
是より又別段也。
さありてなご。しばし有てさ。さばかり
ありてなごいふさおなす心なるべし
もやはおありさて
化生の物ありさておそれて歸て。南殿の
鬼の貞信公をおびやかし河内院の靈の哀極
の御息所をさりいれし類。古今著聞第十七
變化の部に猶此たぐひ多し
殿上人のはみつかければ
上達部と殿上人とは隨身の聲も差異なる
にや。前にも殿上人の隨身ともささか忍び
やかにみつかさあり
おほさきさき
上達部の前詞を大ききささいひ。殿上人のみ
こさささいふさかや。みな隨身の故置なる
べし
あまた。びになれば
其聲度々きけば其聲を女房の音射へて
又あらずなごいへば
〔訂〕上のびやうふのうしろなどに云々より此
の「又あらずなごいへば」まで數十行異本に

て出ぬるもあれば。わらふを。しばしや。など。さ夜を捨て
見捨て急ぎ給ふぞ也。
いそぎたふふ。とありてなごいへど。心ちなどやあしから
ん。たふれぬばかり。もし人やおひてとらふると見ゆるま
でまごひ出るもあめり。
はめたる詞なるを。こゝには轉して正直すきたるこゝせり
是より又別段也。
しきの御さうしに。おはしすころ。こだちなどはるかに
物ふり。屋のさまも高うけどほけれど。すろにをかしう
おほゆ。もやはおにありさて。みなへだて出して。みなみの
ひさしに御さちやうたて。またひさしに女房はさふら
ふ。この糸のみかごより。左衛門の陣に入給ふ上達部のさ
きども。殿上人のはみじかければ。おほさきこさきと聞つ
けてさわぐ。あまた。びになれば。其聲どももみなきし
られて。それぞかれぞといふに。又あらずなごいへば。人
してみせなどするに。いひあてたるは。されはこそなごい

なし

なにかしこゝの
古詩を朗誦する。是河原院にて夏日閑遊
し暑さいふ題を源英明。池冷水無三伏夏
松高風有一聲秋さいへる句を何々一世の
秋さやはらかに出たる文の一跡なるべし
まめでまわり 上達部の禁中を退出し。又
参内せらるゝに。大かたにふたる公用など
なきは后宮へ参上せん。后宮の御勢をいふ
なるべし

四十段

あぢきなきもの
増「演接。あぢきなきは無益の意にて。こゝ
の條々は俗言に要でもない事をした。など
くやむ意をこめし詞
わざとおもひたちて
親の態々思ひたちて禁中へまわらせしむす
め
人にもいはれむつがしき事
宮仕うるさげん人にもいひたられ。我
も實に物うければ
いひてかまひでなんといふことばをなして出

ふもをかし。ありあけのいみしうきりわたりたる庭にお
女房のおりて月見ありく
りてありくをきこしめして。御まへにもおきさせ給へり。
うへなる人はみなりなどしてあそぶにやうくあけも
てゆく左衛門の陣にまかりて見んとてゆけば。われもわ
れもどおひ付てゆくに。殿上人あまたこゑして。なにがし
一こゑの秋とずんじているおとすれば。にけいりて物な
どいふ。月を見給ひけるなどめでうたよむもあり。よる
もひるも殿上人のたゆる折なし。上達部まかでまゐり給
ふに。おほるけにいそふことなきはかならずまゐり給ふ
あぢきなきもの
わきとおもひたちてみやづかへに出立たる人の。ものう
がりてうるさげに思ひたる。人にもいはれ。むづかしき事
もあれば。いかでかまかでなんといふこと草をして出て。
親をうらめしければ。またまゐりなんといふよ。とりこの

四十一段

何ぞぞして里へ退出せんさつれの言種にい
ふ。こゝろさば口すさひに常に云
おやをうらめしければ
里亭へ出ても親は宮仕へを物うけなりとい
さめなごしてうらめしければ
いさしげなきもの
をしからの心もあり。愛相なきこゝろもあ
る
増「演云。日本紀哀不忍。續紀詔詞に伊等
保自彌さあり。勢の訓。いたはしの轉語
。さればいさしげなきものは。今俗に
いふ氣のごくでないさいふ意
されどそれよし
人のためにして其かひあればよし。此
次に人のためにして其かひなき事をいは
んさて
つきんえんたづねて文ゆんさ 清少へ付
々の縁を求て。彼遠國に清少の知人の方へ状をそへよき
なまいたはりなりと 彼知人文筆のいたはりなきに腹立して。返事もせぬ。もさより心にもいらで等閑に出し派状なれば。返事なくともなし
げなきもの心。増「演云。むとくには。さまあしげにさいふ意。六十三段にむとくなる物の縁あり。考合すべし

四十二段

うづゑのこよき
卯杖は正月上の卯日。東宮を始め奉り。左
右の兵衛府作物所なごり大内へたてまつ
る事。結ひの杖も哥によめば。其祝言
。江次第二裏書云。仁壽二年正月諸衛殿
祝杖。逐々々々これ。卯杖さて桃枝な
ごにてつくれる杖。イニうづゑのほうし
道而可考

○増訂枕草紙春曙抄卷之四

養子の顔の我にやさしからぬ。は下めより聲にならんとも思はざりし人
かほにくさげなる。しおくにおもひたる人をしのびて
響にとりて。思ふさまならずとなく人
いとほしげなきもの
人によみてとらせたる哥のほめらる。されどそれはよ
し。とほきありきする人のつきんえんたづねて文えん
どいはすれば。しりたる人のがり。なほざりにかきてやり
たるに。なまいたはりなりとばらだちて返事もとらせで
むとくにいひなしたる
心ちよけなる物
うづゑのこよき。神樂のほんぢやう。池のばちすの村雨
にあひたる。御りやうゑの馬おさ。又御りやうゑのふりば
た

神樂のにんぢやう 人長は神樂の舞人陪從などの長也。内侍所の御がぐらに韓神其駒などの時起て舞もの也。内侍所の御神樂は一條院の御時は
上まれるよし江次第にあり。其次第等猶くはし
御りやうふの馬おき 六月十四日祇園の御靈會に禁中より馬をむかしはひかれし也。公事根源云。祇園御靈會十四日此まつりの日禁中にはこと
なる事なし馬長など儲しつつかはさるれども御靈はなし。祇園の社は貞觀十一年に託宣の事ありて山城の國にはうつし奉しにや。紫蓬鳥尊の靈部
にて牛頭天王さま武塔天神さま申也云々
又御靈會のふりはた 是も祇園會にむかし報懸さいふ事ありしにや。今は絶たる儀式にて知がたし

三段

さりもてる物 此詞原本にはなくてくいつ
のこといりをも前の心ちよげなる物の内に
書つられたり

「増」弘云。古木井に黒川本のイ木に此段なし。
按るにこは誤りに非ず。くいつ云々除目に云々此の二條は上の心ちよげなるものに入れてよく聞ゆる也
くいつのこさいり 傀儡の學取にやイ木くいつのこさいり可尋之 「増」萬歳抄くいつの小鳥さあり
除目に第一の國得たる 正月あがためし除目に。大國などの受領に成たる事なるべし。大國上國中國下國とあり藤原抄に發

御佛名のあした 是より例の物がたり也。
十二月の御佛名三ヶ夜過て明朝の事なるべ
し。年中行事歌合注云。佛名は十九日、月
廿一日まで三ヶ日の間三世の諸佛の御名を
唱て六根の罪を懺悔し侍る心也。寶龜五年
十二月よりば上まる云々。佛名の裝束は延
喜式圖書にあり。江次第に猶委

「増」或説には十二月廿一日より廿三日まで三
日間。又或説には廿四日とさもあり
ちこくみの御屏風さりわたりし 御佛名の所
より后宮の御かたへ取わたして見せまら
せ給也。雲圖抄佛名の所に云。以三塊獄靈御
屏風七帖。立七夕之間一有三綱羅子等。或
書云若無三件御屏風二之時用後再御屏風云
々。榮花物語第三さまの悦の巻に。十
二月の十九日になりぬれば。御佛名とて地
獄給の御屏風などさう出てしつらふさあり

御佛名のあした。ちこくみの御屏風さりわたりし。御佛名の所より后宮の御かたへ取わたして見せまらせ給也。雲圖抄佛名の所に云。以三塊獄靈御屏風七帖。立七夕之間一有三綱羅子等。或書云若無三件御屏風二之時用後再御屏風云々。榮花物語第三さまの悦の巻に。十二月の十九日になりぬれば。御佛名とて地獄給の御屏風などさう出てしつらふさあり

くいつのこさとり。除目に第一の國得たる人」
くいつのこさとり。除目に第一の國得たる人」

御佛名のあした。ちこくみの御屏風取渡して。宮に御らん
せさせ奉給ふ。いみしうゆしき事限りなし。是見よかし
どおほせらるれど。さらに見侍らじとて。ゆしきさけうへ
の清少の局にや

やにかくれふしぬ。雨いたく降てつれづれなりとて。殿上
人うへのみつほねにめして御あそびあり。みちかたの少
男正二位中納言 源政道方弟阿波權守 等
納言びはいとめでたし。なりまの君さうのこと。ゆきな
りふえ。つねふさの中將さうのふえなどいとおもしろう

ひとわたりあそびて。びはひきやみたるほどに。大納言殿
ひとわたりあそびて。びはひきやみたるほどに。大納言殿

びはのこまはやめて
琵琶行云。忽聞水上琵琶聲。主人忘歸客
不復言。尋聲暗問彈者誰。琵琶聲停欲語遲
この句を誦し給ふ也

頭中將 勳傳云。寄信卿正曆五年八月廿八日。
職人頭。長徳二年四月廿四日。任三參議二將
云々。恒徳公三男也

くるどのいた 鳥月也。清涼殿の北の瀧口
の戸の四なる由拾芥にあ
こまなどするなりは袖を
清少の聲すれば頭中將やがて顔に袖をおほ
ひて清少を見給はぬ也

さすびにさうしくこそ 頭中將のいへ
りし詞也。清少をいへらちらもさすびに
清少さつたらはればさひしきに。物いひや
らんさ齊信のの給ふさある人清少に告し

○増訂枕草紙春曙抄卷之四

の。びはのこまはやめて。ものがたりすることおそしとい
ふ事をすんじ給ひしに。かくれふしたりしもあき出て。つ
みはあそろしけれど。猶物のめでたきはえやむまじとて
わらはる。御こまなどのすられたるにはあらねどさりの
ことさらにつくりいでたるやうなりしなり」

頭中將のこころなるをさうとて。いみしういひお
どし。何しに人とおもひけんなど殿上にていみしくも
なんの給ふとまきくればづかしけれど。まことならはこそ
あらめ。おのづからさうなほし給ひてんなどわらひてあ
るに。くるどのかたへなど渡るに。こまなどするをりば。
袖をふたぎて露見おこせず。いみしうにくみ給ふを。どか
くもいはず見もいれやすす。二月つこもりがた。雨いみ
しうふりてつれづれなるに。御物いみにこもりて。さすび
にさうしくこそあれ。物やいひにやらましとなんの

にさうしくこそあれ。物やいひにやらましとなんの

よにあらす。頭中將は我をうきまはて給へば。物いひをこせ給ふ事はあらすの心さひさしにもくらし。その日一日清少の局に居奉りて。夜に入て后宮の御つたへまわられたれば。はや后宮は御寝ありしとよるのおさ。年中行事符合註云。よるのおさ。申は天子の御寝所なり。御寝をおさ。故にいつも灯をけたす。是なにいせしと申にやと云々。猶禁抄抄云。へんをぞつく。女房違清少のきたるをよる。名院殿御説。露つきは文字のつくりと篇を分て。つくりを隠して篇をもつて何といふ文字といひあつる事のためはば縁のくごさくなるべし。猶禁抄に基つちへんづきなどあり

人つてならて申べき事なん
清少に直に可申事と

清少の詞云
殿守づかきは先へ。返事はやめてくれ
よりせんぞ
猶人の物いふきいなど。立脚て彼へんづき
せし女房の清少のほよりへきて物たりす
るなきとあると

給ふと人々かたれど。よにあらじなどいらへてあるに。一
日しもにくらしてまありたれば。よるのおどゞにいらせ
給ひにけり。なげしのしもに火ちかくどりよせて。さしつ
どひて。へんをぞつく。女房違清少のきたるをよる。こぶ
けていへど。すさまじき心ちして。何しにのほりつらんと
おほして。すびつのもどれるたれば。又そこにあつまり
て物などいふに。何がしとふらふといはなやかにいふ。
清少の詞云。只今こそまわられたれほどに何事のありて人のよぶと云。清少問する云。殿上人
あやしういふのまにに事のあるぞとばすれば。殿守
づかさなり。たごころに人づてならで申べき事なんとい
へば。さし出でとふに。是頭中將殿のたてまつらせ給ふ。御
かへりどくといふに。いみじくにくみ給ふを。いかなる御
文ならんとおもへど。たゞいまいそぎ見るべきにあらね
は。いね。今きこえんとて。ふどころにひきいれていりぬ。猶
人の物いふきいなどするに。すなはちちかへりて。さら

さらば其ありつる文を給りて。ことなん。只
今返事なくは。其文さり返して来よと頭中
將の給ひしと云
伊勢物語に。長岡の母より梨平へ。さかの
事さて御文ありといへり。頼は急々の事な
ればなり
心さきめしつるさまにも。頭中將さす
にさうくしくこそあれ。物やいひにやち
ましこの給ひ。又さみの使をこせ給て背き
うすやうに清げに書たる文おこせ給はば
いなる心ばへぞ。にくみ給へる心も引かへ
てやさしきさまの事もやさきめきせし
に。思ひの外に何の事もなきと云
らんしやうの
蘭省花時鐘下。殿山雨夜草中白氏文集
十七にあり。今夜の雨に頭中將は御物忌に
籠つたれ。なるに。清少は夜の御殿の鶴
籠の下に侍る事を思ひ准へて。此上句を書
やり給し。蘭省は尙書省とて政を行ふ所
也。殿山は樂天の山居也
草のいほりをたれたつれん。是はどのむ
を誰か尋んどの心はいひて。我は頭中將に
にくまれければ。いっで問はんどの心を
そへたり
なご。さ人げなき物は草の菴と名付た
るをさめてさやうの名は聞いれし。玉の
塵などよばれば。いかにこそ出あはめと也
玉のうてな
〔改訂〕玉のうてな 榮華物語玉の塵巻に、く

は其ありつる文を給はりて。ことなんおほせられつる。と
くくといふに。あやしういせの物がたりなるやとて見
れば。あさきやうすやうにいときよけにかき給へるを。心と
外に何事にもあらわさる心
きめきしつるさまにもあらざりけり。らんしやうの花の
さば
時きんちやうのものと云かきて。末はいかにくどあるを。
清少の詞云
いかゞはすべからん。御まへの。おはしきまは御らんせさ
すべきを。これがするしりがほに。たごくしきまんなに
かきたらんも見ぐるしなど思ひまはすはどもなく。せめ
返事をいせと云。中將の文のおくに
まどばせは。たゞ其おくに。すびつのみえたるすみのある
して。草のいほりを誰かたづねんど。かきつけてとらせつ
れど。返事もいばやみなねて。つとめていとくつほねに
ありたれば。源中將のこゑして。草のいほりやあるくど
おどろくしうとへば。なごてか。さ人げなきものはあら
ん。玉のうてなもとめ給はましかば。いせきこえてましと

もりなくみがける玉の塵には塵もあかた
きものにぞありける」と見えたり。

よべありしやう
昨夜のありさまはしくかり給ふさま

むげに結ばていこそ 清少と一向に申結し
ては堪忍しがたきこと。前にさうしく
こそあれさいへる首尾

もしひ出る事もやと
彼説人のいひわけを清少の方より云出す
ままでと。さもなくて。つれなくれたまき
り。前にいみしうにくみ給ふな。さかくも
いはす見もいれで過すさありし首尾

只いまは見るまききて 前に只今いそぎ
見るべきにあらればさ有し事

たい袖をさらへてさうざいなませす
清少を東西に身ゆるぎもさせず返事さりて
きたれ。左なくはその文取かへしてまわれ
こと

かへしてけるかさう見るにあはせて
かの文を見るさ一度に各感下であつさわめ
さしこと

いみじきぬす人か
清少を只人ならすまはめんさてされていへ
る詞。禪語に此老賊などいふたぐひなる
べし

「前」竹取物語に。かぐや姫てふおはぬす人の
やつがとあり
これをもとつてやらん
彼下句に上句つけてやらん

修理助のりみつ 未勘
奥にかうぶりえて遠江介に任す。行成卿よ
りさ前に清少に通ぜし人

なぞつかさめしありとも
司召は秋の京官の除目をいへり。江次第な
ごに委。除目に官を得し人はよるごびさて
こなたかなたに御賀の事あり。今則光より
ごび申にまゐりたりさいふに付て。司召も
きこえぬに何に昇進せしご

このかへりごにしがひて
前にこよひあしごもよしごもさだめきりて
やみなんごの事

「訂」万歳抄。したがひての下に「こかげをし
ふみしすまて」の十一字あり。又下の頭申將

いふ。あなうれしまもにありけるよ。うへまで尋ねんとし
つる物をとて。よべありしやう。頭中將のどのる所にて。す
こし人々しきかざり六位まであつよりて。萬の人のうへ。
むかし今とかたりていひしついでに。猶此ものむけにた
えはてよのちこそ。さすがにえあらね。もしいひ出る事も
やとまてと。いさか何ともおもひたらず。つれなきがい
とねたきを。こよひあしごもよしごもさだめきりてやみ
なんかしとて。みないひあはせたりし事を。只いまは見る
りしこと
まじきとて入給ひぬとてとのもりづかさきたりしを。又
おひかへして。たゞ袖をさらへてさうざいなませすこひ
とりもてこずば。文をかへしとれとい申しりて。さばかり
ふる雨のさかりにやりたるに。いととく歸りきたりこれ
とてさし出たるがあたりつる文なれば。かへしてけるかど
るさ見しこと
うち見るにあはせてをめけは。あやしいかなる事とて。

源中將の詞
清少の御前へまうのぼらであるよと
殿上の番所

物の心をまじりし人々をいふ
頭中將の詞清少をさす無下は

にくみならもさすがにこそ堪忍しがたき心
少く清少のていを云

清少のありさまの御懸かきだめんご
心見にかの御者の花の時といひや

東四
主殿司のつへりし

さてはもこの文を其ま返し
清少のひきりつにや

世のたりにしてはあ草にせんご
源中將の詞

草のいほけの返しなれば
いみじきぬすびとかな。猶えこそすつ
まじけれと見さわきてこれがもどつてやらん。源中將
つけよなどいふ。夜ふくるまをつけわづらひてなんやみ
にし。此事必かたりつたふべき事なりとなんさだめしと。
いみしくかたばらいたきまでいひきかせて。御名はいま
前草。塵やあるくさいひしごわり
は草のいほけとなんつけたるとて。いそぎたち給ひぬれ
は。いとわろき名の末まであらんこそ口をしかるべけれ
といふはごに。修理助のりみつ。いみじきよろこび申に。う
へにやとてまありたりつるといへは。なぞつかさめしあ
りごもきこえぬに。何になり給へるごといへは。いごもさ
は發語の詞
早く清少にいひきりせたく思ふゆゑ夜の明
とにうれしき事のよべ侍しを。心もどなく思ひあかして
るなまらしさま

なん。かばかりめんほくある事なかりきとて。はじめあり
けるとごも。中將のかたりつるおなじ事ごもをいひて。こ
のかへりごにしがひて。さる物ありとだにおもはじ

のたまへしにさあるも。万歳抄には。頭中將のたまへばあさのさきりやうしてやり給ひしに。たゞにきたりしは云々あり。今いづれも原本のまゝに従ひて是をさらす

たゞにきたりしは中へはしめ返事なくて殿守司の歸りしはなましひの返事あらんよりはかへりてよりしなり

せうとのためも 則光清少中より故人を敵に兄妹と申さるゝ事な今も云也。實の兄弟にはあらず

せうこそきけ 兄殿さつれよさはふれの給ひし詞也。夕顔の巻に。右近のきみこそ先物見給へさあり。若菜の巻にもうへこそなごあるにおなり

し詞也 こそくはへきしれきには詞をくはへてつけ心見よこにはあらず也。つけ心見よ又此句の面白きをいしれにもあらず也

これどもつけ見見るに 彼草庵の句のし句をつけ見るに及がたし也

少將のつかさにて侍らんは何れも少もふま

過分の昇進せんより清少の名譽をよるこふさなり。無志をいへるこばなり
藤原抄云
少將 相當正五位下
五位殿上人中爲三節第公進一者任之下恩

まづさめしたれば 清少を后宮のめす。少々用ありさもまづくまわれ也
此事おほせられんさて 草のいほりの返事の事なり

あさまじう何のいほせ 我ながら心ならずもいひける草のいほりかなさいふ心也。かく上つたまで御沙汰を願ふもへる心ないふ也
袖さちやうなごりのけて 前に頭中將袖を願にへだて、清少を見おこせ給はぬ事ありし。几帳はかほかたちを隠しへだつる物なれば。袖几帳さいふなり。此事の後にさやうに清少を見ぬやうにもせで彼さらごさゆふのにくみも頭中將の思ひなほりし也
梅つばに 梅壺は源光會さいふ御殿の名也。梅をうみられしゆふの名也。禁秘抄云。梅壺梅。西白梅東紅梅之由。在清少納言罷さあるも此段の奥に見えたる事也。こゝに定子のおほすにや

と頭中將のたまひしに。たゞにきたりしは中へよかりき。もてきたりしたびは。いかならんとむねつおれて。まこととにわろからんは。せうとのためもあろかるべしとおもひしに。なめだにあらず。そこの人のほめかんとて。せうとこそきけとのたまひしかは。した心にはいどうれしけれど。さやうのかたには。さうらにえさふらふまじき身になん侍ると申しかは。ことくはへきしれとにはあらず。たゞ人にかたれとてきかするぞとの給ひしなんすこし口をしきせうとのおほえに侍しかど。これがもどつけ心見るに。いふべきやうなし。ことくはへきしれとにはあらず。たゞに返事をせん人々いひし也
別は返事をせん人々いひし也
返事をせん人々いひし也
夜中までなんおほせし。これは身のためにも人のためにもさていみじきよろこびには侍らずや。つかさめしに少將のつかさえて侍らんはなにともおもふまじくな

くらまへまうで 鞍馬寺

水鏡云。延暦十六年。藤原伊勢人といふ人。寶船の明神の御をしへてつくり奉りし。元亨釋書には此伊勢人の馬のこいまりに難地なれば鞍馬を名付し由あれど。日本紀には天武天皇の御馬を名給ひし故の名と見ゆ。古よりの名成べし。こいかりたのふたがれば鞍馬より清少へ方ふたがれば今夜は外へ方遠に行て。明朝ゆかんぞ。方ふたがりは天一騎などの方にあたりたる夜を云ふ。其夜は其ふたがれる方へはゆかて。こいかりたにて明して。そこより方あしからればゆく事。みくしげとの 中御白道隆公の四君一條院の御殿。小一條院の母代と榮花物語の系圖にあり。拾芥云御殿は貞親殿の中にあり。上藤の女房を別當とす。女藏人あり。河津云。御殿は内藏寮の外御殿なごたち給ふ所なり。

はしごみあけて 花鳥餘情云。半部は下は格子はた板などをうちて。うへに都を釣て外へ上るやうにしたるをいふ。車にも半部とてあり。上のしごみ斗をあけたれば半部とは名づけたるこ

だあけざらんは歸りぬべし。かならずいふべき事あり。い
梅盛に清少はいつで
たくとくかせでまてどのたまへりしかど。つはねにひと
りばなごてあるぞ。こゝにるよとて。みくしけ殿めしたれ
はまありぬ。ひさしくねおきておりたれば。よるいみしう
か。頭中將のたきし
人のたうかせ給ひし。からうしておきて侍しかば。うへに
の調。清少を清者のうへといふ。頭中將の來しといふ。清少の承引あるまじき
かたらはかくなんどのたまひしかども。よもきかせ給は
じとてふし侍にきとかなる。心もとなの事やとてきくは
ぞに。どのもりづかさ来て。頭の殿のきこえさせ給なり。
殿上より退出するとなるべし
たゞいさまかりいづるを。きこゆべき事なんあるといへ
は。見るべきことありてうへになんのほり侍る。そこにて
んぞ
といひて。つはねはひきもやあけ給はんと心とせめめし
てわづらはしければ。梅つはの東おもてのばしごみあけ
て。こゝにといへば。めでたくぞあゆみ出給へる。梅のなほ
しいみしく花はなど。うらの色つやなどえもいはず。けう

せばきまにわたつたは下ながら 縁などのせばき所なれば。腰などかけたるやうに。半身は下まにて。腰のもとの長押などによりぬ給ふ。ふにかき物がたりのめでたきおくにうつは物語の仲忠の大將の事につけて此頭中將の事をいひ出る事あり。それをかへんとて先こゝにやうにいふなるべすのうちにして。只にも人に見せまほしかやうの折ふしは。美麗なるに。まして簾中に若女房の髪うるはしきなごあらば。猶今すこし見所あるべきに我が居て無興と。いますこし見所ありて。【訂】原本にはてもしなし。こはある方よろしきやうなれば。イ本によりて補ひつ。又イ本井二万歳抄には。いますこしの上「やうにて物のいらへなごしらんは」の十六字あれど。なくとも聞えたらばさらすさだすぎふるんしき。奥通源氏におほき詞。年齢のなかにに過て古めかしき事。

らなるに。えびぞめのいとこきさしぬきに。藤のをり枝こ
とくしくわりみだりて。紅のいろうちめなどかゞやく
ほかりぞ見ゆる。したいに白きうす色などあまたかさな
りたる。せばきまゝにかたつかたはしもながら。すこしす
のもどちかくよりの給へるぞ。まことねるにかき物語の
めでたきこといひたる。是にこそはと見えたる。御前の
梅は西はしろくひがしばこうはいにてすこしおちかたに
なりたれど。猶をかききに。うらくと日のけしきのどか
にて。人に見せまほし。すのうちにましてわかやかなる女
房などの。かみうるはしくながくこほれかよりなごそひ
るためる。いますこし見所ありてをかしかりぬべきに。い
より清少のみつちのまをいふ也
とさだすぎふるくしき人の。かみなども我にはあらね
はや。ところくわなきちりはひて。大かた色ことなる
比なれば。あるかなきかなるうすにびどもあはひも見え

かみなども我にはあらねばにや
上に若き女房の髪うるはしき事をいひしに
對して我身にはさやうのうるはしきはなき
にやと云

大かた色こさなる比
輕服などの時節にや。鈍いろを若用と
もいきなりさすかた

髪は宮仕へ人の着する物なれど。后宮おは
されば清少を若すして。桂ばかり着たる
さまと云

しきへなんまゐる
「町」イ本には。「しきのみさうしへなんまゐ
る」とあり

さてもよあかしもはては
かの方違所より。未明に歸りて。清少の局へ
戸たいきよりし事を語り出し給ふと云

西の京よりくるまいに
彼方違所なるべし。西京に。野寺町。細井
小路。宇多小路。木辻など其小路の名拾芥に
委

「町」イ本には。「西の京さいふ所より」あり
従者か客の事。前にかくんきとの給ひし
かともよまきせ給はしき事なり

なごさるものをばおきたる
いかでかくはしたなき従者を留守にはおき
しぞなど中將の給ふと云

さより見ん人はをかし
外より見ては此頭中將の花やかなる形にて
かたひ給へば内の人ゆかしからんこと
おくのつたり見出され

奥より見出され清少の形あしければ外に頭
中將のやうなる人やらんともおもふま
きと云

なごさるものばおきたる
いかでかくはしたなき従者を留守にはおき
しぞなど中將の給ふと云

なごさるものばおきたる
いかでかくはしたなき従者を留守にはおき
しぞなど中將の給ふと云

よきあしきにくき所などをぞさめいひしりひすうじ
なかなたがことなど。御前にもかどりまざりたる事など
仰られける。まづこれはいかにことわれ。なかなたがわ
らばおひのあやしさを。せちに仰らるゝぞなどいへば。何
少の御前にはよらんこと。外にさやうの頭中將のやうなる人やらんとも思はしきと云
かば。きんなども天人あるはかりひきて。いとわろき人も
みかどの御むすめやばえたるといへば。なかなたがわ
人ご心をえて。されはよなどいふに。此事どもよりは。ひる
たごのぶが。あまなりたりつるを見ましかば。いかにめでま
どばましとこそおほゆれと仰らるゝに。人々。さごてまことと
ほむること。清少の詞之頭中將の美々しき
にづねよりもあらまほしうなどいふ。まづその事こそけ
いせめとおもひてまあり侍りつるに物がたりの事にまぎ
りし事かさんさてまこと。標の直衣以下のいてたふありまま中
れてとて。ありつる事をかたりまことえさすれば。誰もく
見つれど。いとかくぬひたるいとばりめまやば見とは
しつるとてわらふ。西の京といふ所のあれたりつる事。も

四の京のあれ
是頭中將の四京にたがへにゆきしゆふ
后宮の御たにてたられしこ
かはらの松はありつや

四の京のあれ。垣やよれ若生たるをか
たるにつけて。唐の驪山宮の長安の都の四
にて荒し事。文集の樂府にあるを思ひよそ
へて聞へる詞云
白氏文集四樂府云。驪山高。高々驪山上
宮。朱樓紫殿三四重。週々兮春日。玉盤
兮温泉溢。翠々兮秋風。山蟬鳴兮宮樹紅。
翠華不來歲月久。猶有衣兮五有松。昔君
在位已五載。何不三季乎其中。西去
門一幾多地下尋

殿上人などのくるもやすからずぞ久々いひな
すなる
清少に懸想の人なられど人々はさかく名を
立るるこ

さいはん人もにくからず
さやうに名たてがましくいひなす人もにく
からぬさ。心にあやまりあらばこそおそ
れにくまめ。實なき事はなにもおぼえぬ
心云
何かはなしなごもかややかへさん
つれに親しく来る人をいかにかたがはに。清
少はこいになしなごいひてたには歸すべ
きぞさ。かややくさは。夕顔の巻に恥が
いやかんよりはさある詞云。かやはゆかり
恥るこいるなるべし

つれふさなりませ
経房。清政は。彼佛名の翌日の上の御局の
御遊に琴笛の役者にて。清少にゆきせよ

るともは戸へる人あらましかはどなんおほえつる。垣など
もみなやぶれて苔かひてなごかたりつれば。宰相の君の
前にもおくにもあり
かはらの松はありつやといらへたりつるを。いみしうめ
樂府をさなる云
西のかた都門をされること。いくはくの地ぞとくち
ずさびにしつる事など。かしかましまでいひしこそを
かしかりしか
清少の里亭へ退出して云
さどにまかでたるに。殿上人などのくるも。やすからずぞ
人々いひなすなる。いとあまり心に引いたるおほえは
たなければ。さいはん人もにくからず。又よるもひるもく
る人をは。何かはなしなごもかややかへさん。まことと
故の見まひにはあらで懸想人くる云
むつましくなごあらぬもさこそばくめれ。あまりうるさ
くもけにあれば。此たびいでたる所をは。いづくともなべ
てにはしらせず。つねふさ。なりまごのきみなどはかりぞ
しり給へる。左衛門のせうのりみつがきて。物がたりなど

清少の心こめ忍びたるあやまちなければ
清少の心にこめ忍びたるあやまちなければ
清少の心にこめ忍びたるあやまちなければ
清少の心にこめ忍びたるあやまちなければ

なる人々
宰相中將殿の
「訂」一本に「宰相中將殿のまわり給ひて」と
あり

つれなくしらすつほにて
かの頭中將の間給ふたはらに。源中將經
房のおはしてつれなくしらすに人にて成て給
へりしと云。經房と清政は里亭をしり給
れば云
だいばんのうへに
齋盤也。殿上人の日給をおこなふ盤なり。
委前に註

わらひなましかばふようぞかし
しらすとあらがひながら笑ひたらば。たじ
のぶにささられて。清少の有所をかくすて
だて不用にあらん云
さらになきこえ給ひそなごいひひて
此詞にてつれなくしらすに我有所を齋信にい
ひきかせうといひおきし事しられたり

何のかくこころもさなくさほからぬほどな
いくらん 奥淺き家の門を。誰きくまとき

するついでに。そのふも宰相中將殿の。いもうどのありど
ころざりともしらすぬやうあらしと。いみしうどひ給ひし
に。さらしらすぬよし申しに。あやにくにし給ひし事な
ごいひて。ある事あらがふはいとわびしうこそありけれ。
ほとくそみぬべかりしに。左中將のいとつれなくしらす
がほにる給へりしを。かの君に見だればは。そみぬ
べかりしにわびて。だいばんのうへに。あやしきめのあり
しを。たゞとりにとりてくひまぎらばししかは。ちうけん
べき折にもあらでくふをいふ
にあやしみのくひ物やと人も見けんかし。されどかしよう
それにてなん申さずなりしに。わらひなましかばふよう
ぞかし。まこととに。しらすぬなめりとおほしたりしをかしう
こそなごかたれば。さらになきこえ給ひそなごいひひて。
ひて。ひごろ久しくなりぬ。夜いたくふけて門おどろおど
ろしくたけは。何のかく心もどなくさほからぬほどを

即光の詞云
齋信の事云
清少の里亭を即光しらす云
いかにかくすまごの心云
わらひなく清少の里をしひて間給云
知てある事をなしとあらがふ云
經房の事云
殿上人にての事を見ゆ
和布
中間の物云
不用云
清少の詞云
なごいひひきかせ給ひそ云

何のかくこころもさなくさほからぬほどな
いくらん 奥淺き家の門を。誰きくまとき

何のかくこころもさなくさほからぬほどな
いくらん 奥淺き家の門を。誰きくまとき

さてかうには何者のたゞくぞなり
左衛門の文にて
則光の文にて。イ本左衛門のみみてさあり。
前に左衛門尉あり。奥に巡警の事あれば。
書といふ本あやまりなるべし。

みさきやう 河津云。本朝月令二月云々。
季節讀録は春秋内裏にて大般若を講讀せ
らるなり。引茶とて僧に茶をひかる。こ
雲圖抄云。初日波。仰三度者。第二日引茶。秋
無之。清談。秋無之。第三日御輪。下界圖あ
り。御裝束など延喜式圖書に委。江次第に
もあり。

め一寸ばかりかみについみて
前に則光和布を食たるさかたりし故。今も
和布をやりて目くはするさいふ心也。必我
在所を語給ひそめくはする心也。奥の哥
にて其心見たり。

一夜せめてははれてすゑなる
頭中將にあまりに清少の在所を問れて。我
もしらぬさましてそゑなる所へ中將をつ
れありきしこ。

まめやにさいなむにいざからし
中將の眞實に我をせめうらみ給ひて迷惑さ
人のもさにさる物つゝみて
只に心もなく和布をやる物かはさ。具
にはさやうの物を人にやる事はなき事な
ば取たがへんやうもなき物をさの心
いづきするあまの。哥の心は。かの和布を
つかはせしは。我が在所をそこゆめく
いふなごの目くはせならんこ。此さまり
めなくはせけりなごいひつめざる所當樂に

たくらんどきよてとばすれば。たきくち成けり。左衛門
の文とてふみをもてきたり。みなねたるに火ちかくどり
よせて見れば。あすみどきやうのけちふわんにて。宰相
御物のための御聲をいふなるべし。清少の事
將の。御物いみにもり給へるに。いもうどのあり所申せ
どせめらるゝに。すぢなしさらねえかくし申せしき。そこ
どやきかせ奉るべき。いかれ。仰せにしがはんどぞいひ
たる。返事もかゝでめ一寸ばかりかみにつゝみてやり
つ。さて後にきて。一夜せめてとばれて。すゑなる所
ひきめてありきしこ。イニし
るてありき奉りて。まめやかにかさいなむいどからし。さ
てどかくも御かへりのなくて。そゑなるめのはしをつ
つみて給へりしかは。とりたがへたるにやといふに。あや
しのたがへ物や。人のもとにさる物つゝみておくる人や
はある。いごゝかおこゝろえさりけるとみるがにくけれ
は。物もいばで。すゞりのあるかみのはしに

心ふくみて面白きにや。此哥後拾遺集に入
し。詞書に陸奥守則光職人にて侍りける時
なごあり。此章紙と詞しゆなれば尋之

びんなき事侍とも
たさひ便なくうらめしおぼす事有とも
さきよしとす
「訂」萬歳抄に「猶ちざりきこえし事は」さあ
り
すて給はで
「訂」イ本に「わすれ給はで」さあり
いまはさざりありてたえなんさおぼはん時
今は限りささる心有て。中絶んと思ひ給
はゞ哥よみ給へと

くづれよるいもせの哥
彼則光が文に。ようにてもさぞなごは見給
へといふをうけて。妹背の中もやうくく
づれたれば吉野川も其人さも。そなたに
も見給ふまよきこ。古今一流れては妹背の
山の中に落るよしの、川のよしや世の中
妹の山背の山とてあるを彼せうさいもうと

清少のうた

かづきするあまのすみかはそとなりと
ゆめいふなとやめをくはせけん

どかきていだしなれば。哥よませ給ひつるかさらに見侍
らしとて。あふぎかへしてにけていぬ。かうかたみにうし
ろみかたらひなどする中。何事ともなくてすこし中あ
しくなりたるころ。文おこせたり。びんなき事侍とも。ちぎ
りきこえし事はすて給はで。ようにてもさぞなごは見給
へといひたり。つねにいふ事は。おのれをおぼさん人は。哥
などよみてえとすすまじき。すべてあたらきとなん。おも
ふべき。いまはかぎりありてたえなんと思はん時さる事
事はいふ
はいへといひしかは。此返しに
清少のうた
くづれよるいもせの山の中なれば
さらによしの川とだに見じ
といひやりたりしもまことに見ずやなりにけん。返事も

など人々のいひたるにさりあはせてよめり

せず。さてかうふりえて。どほたあふみのすけまごいひしかは。にくくしてこそやみにしか

物のあはれしらせがほなる物

はなれるまもなくかみてものいふこと。まゆぬくも

はなれるまもなくかみて
源氏に鳴こをなむむいへり。さまで
たらぬはなはたびくかみて。なくけしきするは。人に哀をしらせ願なること。[訂]弘按。上の註に源氏に鳴こをなむむいへり。さあ
るは非之。源氏にても泣くとは泣く。鼻かむとは鼻かむ。いかで泣こを鼻かむといふべき。こはかの榮卷に「君もたびくはな打かみて云
々」などあるを解し誤りたるにや。是は源氏の君が泣ての給ふさまを云へるなれど。鼻うちむはその泣給へるさまを知らせたるまでにて。泣
くこを鼻うちむむいふ意には非之。
まゆぬくも。[訂]原本にももつなし。イ本又一本によりて加へつ。イ本又一本には。「わさびくも。まゆぬくも」あり。弘按。わさびくは山
突を喰ふ。からくて涙のいづれば此所にいへるなるべし。まゆぬくは眉毛を抜てまゆづくりするを云ふ。是は痛くて涙の出るより此所にいへる
なるべし。
[増]源接。取へばや物語に。まゆぬきかけつけなむなびさせ給ふ云々あり

さてその左衛門の陣に
前の有がたき物といふ奥に。有明のいみ
う勝渡りたる庭などにおりてありくを。開
召て。お前にもおきさせ給へり。上なる人
は皆おりなごして。漸々あけてゆく。左衛
門陣まかりて見んさてゆけはとあり。その
所を今いひ出て。其後清少の里へいでし事
をいふなるべし。
さふもんのちんへいきし朝期
是も彼所の事を后宮の被仰し事之。其所の
詞におまへにもおきさせ給へりとある首
尾之。其時の事おぼし忘れぬ心の心之
[増]さふもんの陣は建春門之。上に委くあり
わたくしには。后宮さへ思召出す朝期を清

思ひ侍らざらん。御前にもさりととも中なるまをとりとばお
ほしめし御らんじけんとなんおもひ給へしと聞えさせた
れば。たち歸りいみしくおもふべかめるなり。たがおもて
ふせなる事をば。いかでかけのしたるぞ。只今宵のうち
よろづの事をすて。さふもんのほれと。
ませ給はんとなん仰せことあるとあれば。よろしからん
にてだにゆし。ましていみしくとあるも。命もさ
ながらすてしふんとてまありにせし。

思ひ侍らざらん。御前にもさりととも中なるまをとりとばお
ほしめし御らんじけんとなんおもひ給へしと聞えさせた
れば。たち歸りいみしくおもふべかめるなり。たがおもて
ふせなる事をば。いかでかけのしたるぞ。只今宵のうち
よろづの事をすて。さふもんのほれと。
ませ給はんとなん仰せことあるとあれば。よろしからん
にてだにゆし。ましていみしくとあるも。命もさ
ながらすてしふんとてまありにせし。

ふだんの御さやう
中宮には春秋に季の御禮あれど。こは
別に不漸に御断絶のためおこなはせ給ふな
るべし。
佛供の。はとめより物をさひたる。
法師などのしはしてさいへど。佛供の
おろし給はらんさいふ。
いさでまだきには
遠也。佛供のおろしもまたあるべき時節
ならぬにはいさであらんと答る。

かりはがま 金葉集連符に。かりはがまを
ば念しこどもふふとあり

佛の御弟子にさふらへば
彼老尼の乞食のみづからいふ。比丘、比丘
尼、優婆塞、優婆塞を四部の弟子といふ。今
此御はうたのなしみ給
前にいかでまたきにはま法師ごものいひし
事

うつくしなる
源氏物語に所々ある詞也。尼の字也。こ
はうち埋れて花くしちち心なれば尼也

それがさふらはればこそより申侍れ
こそ食物なき故こそ侍供をたべまはば
さり申上たれと

いづこにかつむ
「尼」原本「いづむ」にあり。今イニに
よりて改めつ
なかしき事とつと

かたはらいたき事。又さはすがたりに語り
そへなごすると
よるはたれされん
尼かうたふ哥

なごかくかたはらいたき事はせさせつる
何さてかやうのうたをうたはせしと
后宮の御事

ひたちのすけとつたり
彼うたひし詞につけて尼が名につけたる
いづちやりにけん
后宮のさらさせ給ひしきねはいづくへや

たるかりはがまの。つととかやのやうにはそくみじかき
竹の節のやうに細く短き

を。おびより下五寸ばかりなるころもとかやいふべから
ん。かなじやうにすくけたるをきて。こののさやにいていふ
なりけり。あれはなに事いふぞといへば。こそひきつくる
清少の詞

ひて。佛の御弟子にさふらへば。ほどけのころしたべと申
すを。此御はうたのなしみ給ふといふ。はなやかにかみや
其いふこゝまのはなやかなる

びか也。かゝるものはうちくんじたるこそあはれなれ。う
たてもはなやかなるかなとて。こと物ばくはで。佛の御お
ろしをのみくふが、いとたふとき事かなといふけしきを
清少の詞

見て。なごかこと物もたべざらん。それがさふらはねはこ
そとり申侍れといへば。くだものひろきもちひなごを。も
尼の詞

のにとりいれてとらせたるに。むけに中よくなりて。よろ
ぶの事をかたる。わかき人々いできて。男やある。いづこに
かすむ。なご口々にとふに。をかしき事をへことなどすれ
今ものしもちさいふ物の無にや

は。うたはうたふや。舞などするかととひもはてぬに。よる
はたれとねん。ひたちのすけとねん。ねたるはだもよし。こ
たのすま長かりしと

れがすゑいとおほかり。又をどこ山の峯の紅葉ハさぞ名
はたつくと。かしらさるるがしふる。いみしくにくけれ
是も尼がいふ事

は。わらひにくみて。いねくといふもいとをかし。これに
何とらせんといふをきかせ給ひて。いみしうなごかくか
たはらいたき事はせさせつる。えこそそごかやみよをふた
はつくいなせよと

きてありつれ。そのきぬひとつとらせてとくやりてよと
おほせ事あれは。とりてそれ給はらするぞ。きぬすくけた
り。しろくてきよとてなげとらせたれば。ふしきかみてか
尼のきぬを取て

たにぞうちかけてまふものか。誠ににくくみてみな入にし。
のちにはならひたるにや。つねに見えしらがひてありく。
今日に習ひて又此尼が來たる

やがてひたちのすけとつたり。きぬもしろりず。おなじ
すくけてあれば。いづちやりにけんなどにくむに。右近
前の第九

ひたちのすけとつたり
彼うたひし詞につけて尼が名につけたる
いづちやりにけん
后宮のさらさせ給ひしきねはいづくへや

しやらんご

小兵衛といふ人 后宮の御つたの若き女房
也。奥に五せちの時あかひものさけしも此
人

あれいかに見侍らん

かれをいかに見候はんご
御さくいなりにさらにもつたらひごらじ
其尼は。后宮の御得意成けり。此方に見せ
させ給ふも。此方へはつたらひごり侍ら
す内侍のぞれていへる詞

ふしなかわはされごよし

かたはなる尼なれご其まはよりしご
其のちいさく
常陸のすけのつたはの尼に物つげさせ
給ふを見て。ふすべ心にて久しくまわら
るなるべし。なごましき事なはいんご

ご

おほせ事にて

后宮の御せさいふにて侍ひめして山作れご

か所にも此人あり
の内侍のまゐりたるに。かゝるものなんかたらひつけて
置ためる。かうしてつねにくること。有しやうなど。小兵
衛といふ人して。まねはせてきかせ給へば。あれいかで見
侍らん。かならず見せさせ給へ。御さくいなよりさらによ
もかたらひごらじなど笑ふ其のち。又あやなるかたはの
いとあてやかなるがuscitaるを。又よび出てものなご
ふに。これいばづかしけにおもひてあはれなれば。きぬ一
つ給はせたるを。ふしをがむはされごよし。扱うちなきよ
ろこびて出ぬるを。はや此ひたちの介いさあひて見てけ
り。其のちいさく見えねど。誰かは思ひ出ん。さてしは
すの十餘日のほどに。雪いとたかうふりたるを。女房ごも
なごして。ものふたにいれつゝいとあほくおくを。あな
トくは庭にまことの山をつくらせ侍らんとて。さふらひ
めして。おほせ事にていへば。あつせりてつくるに。殿守司

其あり様を
右近内侍のこぼ
是は又ご尼
又后宮のき
山なごのやうにつみおかしにや
清少なごの申上たるにや
雪山作

下つかさご
の人にて。御きよめにまゐりたるなどもみなよりて。いと
たかくつくりなす。宮づかさなごまゐりあつせりて。こと
くはへことにつくれは。所のしう三四人まゐりたる殿守
つかごの人も二十人はかりになりけり。里なるさふら
ひめしにつゝはしなごす。けふ此山つくる人にはろく給
はずべし。雪山にまゐらざらん人には。おなじからずご
めんなどいへば。聞付たるはまごひまゐるもあり。里ごは
きはえつげやらす。つくりはてつればみやづかさめして。
きぬ二ゆひごらせてえんになげ出るを。一つづごりに
よりて。をがみつごしにさしてみなごかぬ。うへのき
ぬなごきたるは。かたへさらでかり衣にてぞある。これい
つまでありなご人々のたまはするに。十餘日はありな
ん。たご此ごろのほどを。あるかぎり申せは。いかにごは
せ給へば。む月の十五日までさふらひなんご申を。御前に

御きよめにまゐり

主殿は御殿の酒掃をつむる官人。拾
遺「ごのりごのりごのみやごご心あらはご
の春ばかり朝ごよめすな
宮づかさご

鳥后宮職の大夫、亮、大進、少進、扇などを管
宮づかさごいふ
所のしう 職人所衆さて廿人あり。六位の
侍可然置補之ご職原抄にあり。禁抄に
も委。禁抄抄。雪山の所の界云。所衆作山。
瀬口上藤三人。所衆三人立。庭奉行持三柄振
云々。これは禁庭の事ながら雪山つくるも
なごらへしてしるべし
おなじからずごいめん
雪山作りたる人ごは同じからずして。藤な
ごいめてつづはすまごご

こしにさして皆ごいめん

巻納なれば候にさす。源氏物語にこしご
しごあるはなり
うへのきぬなごきたるはかたへさらでかり衣
にて
縁給りて人々退出してのち。袍きたる人の
かつ残り居たるは。狩衣に着かへて侍ふな
るべし。かたへさらでさは。源氏物語にか
たへはのこりてごあるたごいん。少し残り
ある心ご

おなじからずごいめん

雪山作りたる人ごは同じからずして。藤な
ごいめてつづはすまごご

退
雪山つくりし者ごへの
退
雪山の番に狩衣にて居る
此雪山いつ
清少に后宮の間給ふご
いづれも十日あまりのあごさきを答へ申ご

しら山のくはんおん
 加賀の白山はいつも雪消ぬ所なれば念下たるにや。古今「消果る時しなれば越路なる白山の名は雪にそありける」
 白山明神は。延喜式神名帳には加賀國石川郡白山比咩神とあるを。泰澄法師には十一面觀音と見え給へり。其本地をしら山の觀音といへるなるべし。
 式部のぞうたは。前の雪丸をうちたる藏人忠隆同人なるべし。寛弘元年正月式部丞に任ずる由勅物にあり
 御前のつばにも
 一條院の御前也。禁秘抄雪山の所に云事始大君一條院御時以後清少納言記有「其子御云々」の所の事なるべし
 春宮 三條院也。冷泉院第二皇子。寛和二年七月十六日春宮に立せ給へり
 [訂]イ本萬葉抄春宮にもこのもとのあり

もえさはあらじとおはすめり。女房などはすべて年の内つごもりまであらじとのみ申に。清少の心二十二月十日より正月十五日まで十日ばかりけるかな。けにえしもさはあらざらん。ついたちなど申べかりけると下にはおもへど。さはれさまでなくといひそめてん事はとてかたうあらがひつ。
十二月廿日
 二十日のほどに雨などふれどきゆべくもなし。たげぞすこしおとりもてゆく。しら山のくわんかんこれきやさせ給ふなといのるも物くるはし。さてその山つくりたる日式部のぞうたはたか御使にてまゐりたれば。しとねさし出し。物などいふに。けふの雪山つくらせ給はぬ所なんなき。御前のつばにもつくらせ給へり。春宮。弘徽殿にもつくらせ給へり。京極殿にもつくらせ給へりなどいへば
清少の哥
 こゝにのみめづらしとみる雪の山
 ところろにふりにけるかな

弘徽殿 義子也。榮花物語系圖云。義子一條院弘徽殿女御。開院太政大臣公季公女
 京極殿 道長公なるべし。拾芥云。京極殿土御門南宮極西南北二町其前一町被入三近長家
 こゝにのみめづらしと
 此府宮の御方へのみ思ひしにさやうにあまた所にもふれわたりしよとの心を雪のふるにそへたる歌
 あされたるみすのまへにて人々に
 [訂]原本にはあされたりとありて。註にあされは。左禮の儀也。これに於て侍る事實幾ならずと卑下の詞也。返歌えれば退出せんさていへるなるべし。とあり
 又云人々にも原本には人になさあり。然れどもこは異本に「あされたるみすのまへにて人々にを」とあり。万葉抄にも人々にをさあり。是をよしとすべし
 弘徽。されたるみすのまへとは。風流の女房の前といふ意にて。忠隆が自分は歌を知らば。風流の女房達の簾前にて人々に此歌の物語りせんぞ
 いみしくよきぞ思ひつらん
 至りてよく返歌せんさなくは一向すましきと忠隆がおもひつらんぞ
 いさ心うき事の侍しかば
 彼がたの尻に衣さらせ給ふが心うきにうらやましあしもひかれず
 うらやましあしもひかれず
 足もえひかめは物さらせ給ふさいふに尼が足ひく事をいふ
 かくなんといひやり
 かくなんにて目を見れすひたちのすけ

どかたばらなる人していはすれば。たびくかたぶきて。返しはえつかふまつりけがさじ。あされたるみすのまへにて人々にをかたり侍らんとてたちにき。哥はいみしくこのむどきしに。あやし。御前にきこしめして。いみしくよくとぞおもひつらんとぞのたまはする。つごもりがたにすこしちひさくなるやうなれど。なほいとたかくてあるに。ひるつかた縁に人々出るなどしたるに。ひたちの介出きたり。などいと久く見えざりつるといへば。なにかいど心うきことこの侍しかはといふに。いかに何事ぞとどふに。猶かくおもひ侍しなりとてながやかによみいづ
常陸介のうた
 うらやましあしもひかれずわたつうみの
 いかなるあまにものたまふらん
 どなん思ひ侍しといふを。にくみわらひて人のめも見れねは。雪の山にのほりかよつらひありきていぬるのち

をいせたるさ
なご人そへてこいにはたまはせざりし
其ひたちの介に入そへて右近がもこへも
こせ給はれしとの心
さてゆきの山は
〔訂〕原本にはゆきやまはさのみあり。今乃歳
本によりて改めつ
ついたちの日
勅物云長徳元年正月一日乙卯雪降
あいなし

〔増〕真云。あいなしはあひなしの音便也。註
にあちきなしといへるは非なり。あひなし
は無遠慮の義也。俗に思ヒガケナイなどい
ふに同ト。故にこいは后宮の御前にて。是
は思ひがけない雪であれば最初雪はその
まゝ置て後にふりたるは取り捨よその給へ
る也
うへにてつばねへいささう
后宮の御方にて清少の局へ早朝にかりしに
さふらひのをさなるもの
侍の長二年勞ある心なるべし。帶刀長など
いふ心にや
わなき出たり
是奉らんなどふるひくいふさま也。寒け
なるさまなるべし
齋院より 選子内親王也。村上天皇皇女。
細運録云。號大齋院。歷五代也。足軒御
説云。選子は大齋院と申は關原院より後一
條院まで五代の齋院たるによりて也
ひさりれんとてあくる
清少ひさりしてはあけがたきをこへ念し
てあくる也

に。右近の内侍にかくなんといひやりたれば。返事の詞
へてこゝには給はせざりし。かれがはしたなくて。雪の山
しはあはれなる也
までかゝりつたひけんこそいとかなしけれとあるを又わ
らふ。さてゆきやまはつれなくてとしもかへりぬ
ついたちの日又雪おほくふりたるを。うれしくもふりつ
みたるかなとかもふに。これはあいなし。はじめのをほお
きて。今のをはかきすてよと仰せらる。うへにてつばねへ
物たり
いとどうおるれば。さふらひのをさなるもの。ゆのはのこ
衣なるべし
とくなるとのあきぬの袖のうへに。あをきかみの松につ
けたるをおきて。わなき出たり。そはいづこのぞととへ
は。齋院よりといふにふとめでなくおほえてとりて参り
ぬ。まだおほどのこもりたれば。もやにあたりたるみかう
しおこなばんなど。かきよせてひとりねんじてあくるい
とおもし。かたつかたなればひしめくに。おどろかせ給ひ



山とよむかの、哥
山とよむ山にひやく心也。山下とよみゆ
く水のさ古今によみし詞也。山中ひやくて
鈴の音かきて尋みれば此祝杖をつく音ぞと
也。卯杖か祝杖といふ事前に註

すはうなるは梅なめり
赤く見ゆるは梅の衣也。こゝ。梅花御説に梅
表裏蘇芳。十二月より正月に至る云々
雪の山はまこにここのにやあらんきえげも

げにいささかりけり
清少はいささかりけり侍らざらんといふゆ
ゑにまことに早きあけやうそやとの給ふに
うつつ二つをうつつの
卯杖御説は左の如きもの
〔増〕卯杖は左の如きもの
下長や四五尺
〔訂〕卯杖は左の如きもの
山とよむかの、哥
山とよむ山にひやく心也。山下とよみゆ
く水のさ古今によみし詞也。山中ひやくて
鈴の音かきて尋みれば此祝杖をつく音ぞと
也。卯杖か祝杖といふ事前に註

て。なごさはするとのたまはすれば。齋院より御文の候は
んれば。いかでかいそきあけ侍らざらんと申に。けいとい
どかりけりとしておきさせ給へり。御文あけさせ給へれば。
五寸ばかりなる卯杖二つをうづるのさまにかしらつしみ
なごして。山たちばな。ひかけ。山すけなどうつくしけに
かざりて。御文はなし。たゞなるやうあらんやばとて御ら
んずれば。うづちのかしらつしみたるちひさきかみに
山とよむかの、ひさきをたづぬれば
いはひのつるのおどにぞありける
御返しにかゝせ給ふほごもいとめでたし。齋院にはこれよ
か始にて此のちより申通し給ふ
りきこえさせ給ふ。御返しも猶心ことにかきけがし。おほ
く御ようい見えたる。御つかひに。しろさおり物のひとへ
すはうなるは梅なめりかし。雪のふりしきたるに。かづき
てまゐるもをかしう見ゆ。此たびは御返事をしらすなり